少年倶楽部文庫
39

# 大東の鉄人

山中峯太郎



## 『少年倶楽部文庫』について

✡この文庫は、かつて雑誌『少年倶楽部』に掲載されて好評を呼んだ名作傑作の数々を選集したものです。

✡この文庫には、発表当時作者とともに情熱をこめて作品を飾られた諸画伯の挿絵もできるかぎり多く収録しました。

✡各作品のかなづかいなどは現代方式により、若い読者の方々にも読みやすくしてあります。

# 目次

装幀　安野光雅
挿絵　椛島勝一

# 大東の鉄人



# 神様のような人

ああ興安嶺！　アジアの大山脈だ。

昭和七年三月、新しく独立した満洲国の西に、興安嶺の大山脈が幾千年の昔も今も、東アジアの王のようにそびえている。

諸君、アジアの地図を、開いてみたまえ、満洲国の西から蒙古へ、そうして、シナの北の万里の長城まで、興安嶺の長い山脈が、満洲と蒙古の大陸につづいている。その長さ、およそ千六百キロメートル、わが日本の本州よりも、まだ長い。いかにも大山脈ではないか。

興安嶺の高さは、いくらあるか、まだはかったものがない。山が高すぎるのではない、森が深く、谷も深く、頂へ行く路もない。だれも興安嶺の奥へ入ったものがないのだ。

アジアの秘密――満洲と蒙古の大秘密山脈が、興安嶺である。だれひとりとして、この山脈の奥を知らないからだ。

しかし、山の下の平地には、蒙古人がおおく住んでいる。その蒙古人は言う、

「興安嶺には、ふしぎな神さまのような人が、大勢の山男をつれて住んでいる。うっかり森の奥

へ入ると、魔術をかけられて眠くなる。眠くなるから、歩けなくなる」
と、いかにもふしぎなことを、山の下の蒙古人は皆、子どもまで、そう思っている。しかし、
「そのふしぎな神さまのようだという人を、だれか見たものがあるのか」
と、たずねてみると、だれも見たものはないのだ。
「それなら、山男というのを、だれか見たか」
これもないのだ。ただ、しかし、
「森の奥へ、木を切りに入ってゆくと、いつのまにか眠くなった。そして手も足もしびれて、歩けなくなった」
と、これは、村のおじいさんも、おとうさんたちも、大勢のものが、そういうめにあってきたのだ。

その蒙古人の村は、どこにあるのか？　満洲国の大平原の西に、「洮南」という町がある。そのまた西に散らばっている蒙古人の村々、この村が皆、興安嶺の山の下にある。仰げば山の頂から谷へかけて白樺の森が茂り、奥の知れない谷から流れてくる水が集まって、村と村の間の小川になり、そうして洮南の町の方へ、音もなく流れている。この河の名を「洮児河」という。

洮児河の岸は浅い。冬には河の上に厚い氷が張って、馬でも荷車でも通れる。昭和七年の三月、洮児河の氷は、まだとけなかった。夜になって、蒙古人が三人、大きな荷車を引きながら、河の上を村の方へ帰ってきた。洮南の町へまきを売りに行ってきた帰りだ。月の光をあびて、三

人と荷車の影が、氷の上にうつってゆく。
「なあ、オイ、こんど、満洲がさ、一つの国になったというのは、ほんとうかなあ」
と、ひとりが言う。おじいさんだ。
「ウン、ほんとうだろうよ。町の人がみんな、そう言ってたんだから」
と、ひとりが答える。おとうさんだ。
「すると、僕たちは満洲国民だ」
と、またひとりが言う。少年だ。
「そうさ。けれども、そうなると、この興安嶺は、どうなるんだろうな？　満洲国のものか、蒙古のものか」
「さあ」と、三人とも考えた。
わからないのだ。なにしろ大山脈だ。興安嶺が、満洲と蒙古の境になって、長くつづいている。どちらの国の山脈だろう？　三人が考えながら荷車を引いていく。すると、
「わかった。向こう半分が蒙古のもので、こっちの半分が満洲国のものだろう」
と、おとうさんが言う。
「なるほど、おまえは、うまいことを考えるぞ」
と、おじいさんが言って、三人が荷車を引きながら、月の興安嶺を仰いだ。このとき、少年がさけびだした。

「ヤッ、あれはなんだ？　星か？」

星！

満洲の空気は、すみきっている。だから、星の光は日本で見るよりも、まだ美しい。そして皆、大きく近く見える。頭のすぐ上へ、さんさんと降ってきたようにかがやいている。しかし、今、それを仰いで、蒙古人の少年だけがさけんだのではない。おじいさんもおとうさんもさけびだした。

「オオ、なんだろう、大きいぞ、星かな？」

「流れ星だ！」

興安嶺の頂よりも高く、流れ星か？　ス――ッと横に飛んでゆくまっ青な大きな光は、流れ星だろうか？　月の白い光の中を、一直線に南へ飛んでゆく……。

「早いなあ、星が飛ぶのは！」

「アッ、消えた」

「大きな星だったぞ」

「僕は、あんな大きな星を、見たことがない。おじいさんは？」

と、少年がたずねると、

「ウム、わしも、この年になるが、はじめて見た大きな星だ」

と、そういうおじいさんの年は、七十三だ。

「桃の実くらいあったぜ」
と、おとうさんも、おどろいて言う。
　少年は考えて言った。
「僕は、日本軍の飛行機だと思う」
「いや、飛行機だとひびきが聞こえるわけだ。今のはなんにも音がしなかったぞ。星だ、流れ星だよ」
「それにしても大きな流れ星だったな。早く帰って、おばあさんに聞かしてやれ。ハハハ、ビックリするぜ、おばあさんも」
と、おじいさんが笑いだして、三人は洮児河の氷の上に、荷車をきゅうに早く引きだした。
　しかし、少年はまだ考えていた。（あんな大きな流れ星があるかしら？　ひびきのしない飛行機を、日本軍が飛ばしてるんじゃないか？）と、学校にも行ってない蒙古人の少年が、この時「ひびきのしない飛行機」ということを、ふと考えついた。
　ひびきのしない飛行機――「無声飛行機」は、世界に発明されていないか？
　音は空気がふるえて耳に聞こえるのだ。空を高く飛行機が、空気のふるえるのを、地の上まで届かせずに飛べたら、音は空の中途で消えて、地の上の人間には聞こえないのだろう。この、空気のふるえを止める方法を、もしも発明したら、完全な「無声飛行機」ができるのだ。
　無声飛行機軍が、敵を攻めるとなると、敵は飛行機の攻撃を、ひびきによって早く知ることは

できない。飛行機の姿を見てはじめて防ぐ。しかし夜に無声飛行機が、あかりなしに攻撃するとなると、地の上の敵は、頭の上まで飛んでこられても、まるでわからないだろう。都会、要塞、軍港、飛行機の庫、軍艦、兵営、戦車の庫、地の上のものが、無声飛行機のためには、皆、爆弾を真上から投げられる。ひびきが聞こえないから、早く防ぎようがないのだ。ただ一つの防ぐ方法、それは、四方の空を照らす大きな照空燈を、夜じゅう朝までかがやかして、無声飛行機の姿を、なるべく早く発見しなければならない。そして味方の飛行機や高射砲で防ぐ。しかし、空は高い。照空燈の光の届く高さには、かぎりがある。光の届かない上の方を、無声飛行機が攻撃してきたら、どうしても発見できないだろう。

だから、夜の無声飛行機は、どんな新しい武器よりも強い。

興安嶺の上を飛んでいった流れ星のような光は、あかりをつけていた無声飛行機ではなかろうか？

世界のどこかで、無声飛行機を発明し、それを、夜の満洲国の空に飛ばしているのではないか？

ああ興安嶺！　ふしぎな神さまのような人が住んでいるという、アジアの大秘密山脈の上空を、昭和七年三月の夜、南へ飛んでいったまっ青な光もまた、大きな秘密の光であるらしい。

# 声なくさけぶ万歳

満洲国の大平原は、まことに広い。見わたす四方に、大空と原がまるくひろがっている。太陽も月も、大平原の端から上り、大平原の端へ沈む。この大平原の土が、冬はかたく石のように凍る。草も枯れてしまい、村と木のない所は、大平原のどこでも飛行場のようだ。飛行機は思う所へおりられる。

満洲国の三月は、まだ冬だ。そのうえに、夜は北風が強く吹き、大平原は月と星の下に、かたく凍っている。そこに、上空から音もなく、まっすぐにおりてきた一台の戦闘機、地の上にフワリと浮くかと思うと、そのまま静かに止まった。

どこの国の飛行機か？　翼は単葉、なんの記章も見えない。機体はまっ青だ。しかも、プロペラの無い飛行機だ。機体の中から出てきたひとりが、スックと土の上に立ちどまって四方を見まわす。毛皮の飛行外套を着ている。ずきんを深くかぶり、飛行めがねをかけたまま、後ろを振りむくと、

「オイ、もう少し行けばよかったぞ」

と、言う。ハッキリした日本語だ。日本人だ。
「ウム、だが、向こうのあかりは、ハルビンだ。ここでよかろう」
と、機体の中から答える。
ハルビンは満洲国第一のにぎやかな大都会だ。人口はおよそ三十三万人、そのうちの四千人あまりはわが日本人だ。満洲人、蒙古人、シナ人、ロシア人、米国人、そのほかの外国人、国のないユダヤ人も商売している。ハルビン市中のあかりが、夜ふけの空にパッと赤くうつって、月と星の下にかがやいている。その近くの平原へ、音もなくおりてきた戦闘機は、この夜中に、ハルビンをめざして飛んできたらしい。なにをするために着陸したのか？　土の上に立ってるひとりが言う、
「入江、今はもう一時じゃないか」
「待て」
と、入江は機体の上で、小さな懐中電燈を照らした。腕どけいを見ると、すぐに光を消して、
「ウム、あと十二分だ。信号燈をつけてみるか？」
「いや、ちょうど一時になったら、つけてみろ。本郷さんは時間の正しい人だ。ハルビンから、ここへ、一時には来られるはずだ」
「よし、あと十二分、本郷さんは、無論、安全だろう。が、……オイ、入江、気をつけッ！」
と、岩崎がきゅうにことばを切った。

それよりも早く、岩崎の姿が消えた。ハッと地の上へ身をふせたのだ。
（人影！）
月の光をあびて、二百メートルほど向こうに、なにものか、こちらへ近づいてくる。ふたりだ。ひとりは身のたけが高く、ひとりは低く横に太い。靴の音がかたい土にひびいて、ヒタヒタと歩いてくる。それが、いきなり立ちどまった。
「オオ、何だ（チトー）？　あそこに（ターム）？」
「待て（ジュダー）！、怪しいぞ（チューデスフィ）！」
ふたりがさけんだのはロシヤ語だ。ジッと飛行機の方をすかしてみる。
「アッ、単葉……戦闘機だ！」
「日本軍の飛行機か？」
「いや、違う。形が違う！」
「今ごろ……このハルビンの近くに、あやしいぞ。本部へ知らせるか？」
「急げ！　あの怪（かい）シナ人の飛行機かもしれないぞ」
「よし、きさまはみはってろ！」
身のたけの高い方が、いっさんに後ろへ走りだした。低い方が、ジッと立っている。ロシヤ人らしい。そこへ岩崎が、地の上をふしたままジリジリと進みだした。
（岩崎、やるか！）と、機体の上から見つめる入江、右手を飛行外套のかくしへ入れると、小さ

な自動拳銃を、つかみ出した。
風の中に聞こえたロシヤ語、「怪シナ人」とはなにものか？　それを、入江も岩崎も、耳にとめた。あやしいシナ人が、この近くを、うろついてるらしい。また、「本部」とはなにか？　このふたりは、その「本部」のものらしい。
(早く捕えてみろ！)と入江は、地の上を進んでゆく岩崎を、そして向こうに立ってる男を見ると、右手の自動拳銃をあげて、向こうの男の足へ、ピタリと、ねらいをつけた。
(動くと一発だ！　が、殺すと、本郷さんに叱られるぞ)と、入江は、引き金へ指をあてながら、ジッと見つめる。そこに、
「誰かッ？」
岩崎を見つけた男がさけぶよりも早く、バッと岩崎が下から飛びついた。入江が射とうとする一秒前に、ふたりが組みついた。
(やれッ、岩崎！)入江は自動拳銃をにぎったまま立ちあがった。が、ハッと空をあおいだ。
南の空に聞こえる飛行機のひびき……見ると、月の下を斜めにおりてくる、これも単葉だ。一目で入江にわかる、日本軍愛国第一号機！　すばらしい速度で降りてくる……岩崎とロシヤ人(？)は今や渦まくように闘う。敵は強く、右手の突きを岩崎の胸へ、と、それをかわした岩崎、かわす胸へ左手のすごい突きをグッと受けた。そのままふたりがまた組みついて闘う。が、今にも岩崎がまけそうだ。その向こう七十メートルほどに、愛国号が降りると、入江の飛行機の

方へ、ズズズズと進んできた。
（あぶない！）と、入江は電気信号燈をつけた。
まっ青な強い光が、前の平原を照らして消えた。消えた一秒の時、ロシヤ人（？）が、たたき伏せられた。ギャッとさけぶと地の上に平たくなった。気を失ったのか、そのまま動かず、しかも、そこに別のひとりが、岩崎のほかに立っているのだ。いつ現れたのか？　だれか？　おどろいて見つめる入江の耳に、
「岩崎！　けがはないか？」
と、ほがらかな力のある声は、
（本郷さんだッ）と、入江は聞くと同時に、おもわず左手を上げて、（万歳！）と、胸いっぱいに声なくさけんだ。
（本郷さんが来た！　見ろ、本郷さんが来た！）
岩崎は、息を、はげしく吐き（は）ながら、
「ハッ、けがは、ありません。ありがとうございました」
と、シナ服の本郷を見て、おどろきながら言う。
本郷はほおに微笑（びしょう）している。黒いトルコ帽をかぶり、絹の黒いシナ服を着て、月の下に立っている姿は、堂々たるシナの英傑のように見える。が、黒めがねをかけ、シナ服の高い襟を立てて、鼻とほおだけが現れている。向こうに降りてる愛国機を見ると、右手をあげて、

（来たれ！）と、いうように、スッとおろした。

愛国号を飛び出た日本航空将校が、走ってきながらたずねる、

「本郷義昭少佐殿でありますか」

「ああそう。あなたは？」

「佐藤航空兵中尉であります」

と、本郷の前に立ち止まった佐藤中尉、挙手注目の敬礼をする。

本郷は、うなずいて答礼すると、

「ご苦労！　本庄司令官閣下も、三宅参謀長閣下も、お元気だろうね」

「ハッ、ただいま奉天に……」

と、佐藤中尉はいいかけて、足もとにたおれてる男を見る。

「いや、この男は、日本語がわからんのだよ」

「ロシヤ人でありますか」

「ハハア、ロシヤ人に見えるが、ユダヤ人だ。佐藤中尉！」

「ハッ」

「これはハルビンの獲物だ。本庄閣下に！」

本郷はシナ服の上衣の奥から、なにか黒い細長い包みを出して、佐藤中尉の手へ、大事そうに渡すと、

「すぐ出発してくれたまえ！」

「ハッ、少佐殿！」と、佐藤中尉は別れの敬礼をして、

「どうか皇国（みくに）のために、少佐殿のご大切を祈ります」

「ありがとう。あなたたちも！ ……満洲国はまだ赤ん坊だ、しかし、シナは無論、○国、△国、×××、ユダヤ人まで、この赤ん坊の息を止めようとしている。彼らの秘密の巣は、このハルビンだ。僕は今まで、ハルビンの秘密の巣の中にいたのだ。アジヤの平和はまだ遠い。閣下をはじめ、司令部の方々に、本郷よりよろしくと申し上げてください。われらはアジヤの平和を破るものと、最後まで戦わねばならない！」

「ハッ」

佐藤中尉は、この俠傑本郷義昭と別れをおしみながら、愛国機の方へ走っていった。

（ああ雄偉なる本郷少佐殿から、なにか大事なものを、おれはあずかったのだ！）と、思う、佐藤中尉の任務は重い。愛国号に飛び乗ると、その大事なあずかりものを、中尉は飛行服の内隠し（うちかく）へ、シッカリと入れた。これから奉天へ星の空を帰るのだ。

岩崎が、息を静めて言う、

「こいつのほかに、もうひとり、ハルビンの方へ走っていったやつがいるんです」

「ウム、身のたけの高い男だったろう」

「そうです。本部へ知らせにゆくと、いきなり走っていきました。僕たちの飛行機は発見されま

した」
「捨てておいていい。きみたちは、興安嶺の上を通ってきたか」
「通ってきました。南へ、そして東へ進んできました」
「信号燈を照らしてみたか」
「二分間、照らしてみました」
「下から答えは？」
「ありました。たしかに！」
「ウム、色は？」
「まっ黄でした。非常に強い黄色でした」
「……」本郷が黙った。腕を組んだ。月下に立てる日東の剣俠児、ああなにをか思う？……。
愛国号がひびきをたてて走りだした。ゆるく浮きあがった。サッと片手をあげた佐藤中尉、機体が上を向いてグーンと空へゆく。そのひびきに、本郷の足もとに倒れてるユダヤ人が、ビクッと動いた。
「入江！」
と、岩崎が声をかけて、
「興安嶺の光は、まっ黄だったな！」
「ウン、真っ黄！　僕も見ました」

「……」
黙々たる本郷義昭、両腕をさげると、飛行機の方へ歩きだした。
「アッ、お帰りになるんですか」
と岩崎も歩きながらたずねる。
「……」
本郷は黙って、飛行機の中へ入った。岩崎もつづいて入った。

## 武侠嶺と興安嶺

まるでひびきをたてない無声戦闘機、本郷と入江と岩崎の三人を乗せて、走りもせずに、ハルビン市外の上空に地からすぐ浮いた。と見るまに西へ音なく消えた。単葉の翼が、とんぼの羽根のように目にも止まらぬ早さでふるえていく。安全な無声飛行機だ。
岩崎とならんでる本郷に、入江が前から上げ舵(あげかじ)を取りながら尋ねる、
「武侠嶺へ、お帰りですか」
「いや、興安嶺へ！」





「ハッ」
西へ……西へ！　満洲国の夜ふけの上空を横ぎる全速力の無声戦闘機、ゆくえは興安嶺へ……アジヤの大秘密山脈へ！……。
ハルビン市外には、土の上に、ユダヤ人が、ひとり、グッタリと倒れている。そこに、
「オ！、どこだ（グデー）？」
ロシヤ語でさけびながら、十五、六人が、バラバラと月の下を走ってきた。
「オー、どこだ（グデー）？」
この声を聞くと、今まで倒れてたユダヤ人が、きゅうに立ちあがって言いだした。
「ここだ！　皆来い！　怪シナ人が、ふしぎな飛行機に乗って、西へ！」
と、西の空を指さして、
「今さきに、飛んで行った。やつ、日本人らしいぞ」
「なに？　日本人（ジャパニーズ）だと？　どうしてわかった？」
と、走ってきた先頭の大男が、英語でたずねる。すると、
「日本の単葉飛行機が、南から飛んできた。それに乗ってたやつは、たしかに陸軍の将校だ。ふたりが話してたのは、日本語だ。そして怪シナ人のやつ、将校になにか黒い包みものを、話しながら渡したぞ」
と、ユダヤ人も英語で答える。

これを聞いて、皆が顔を見あわせた。大男が毛皮外套のかくしに、グッと両手を入れて、ユダヤ人にたずねる。

「オイ、それでやつらは、なにを話してたんだ?」

「いや、第三司令! おれあ日本語とだけわかったんで。だが、なにを話してたか意味はわからねえ」

「フム、ふしぎな飛行機とはなんだ」

「プロペラのねえ、まるで音がねえ単葉のやつなんで、走りもせずに、いきなり飛びあがっていきやがった。なんしろふしぎだ」

「きさまあ、それだけ見たり聞いたりしてやがって、日本語の二つや三つ、耳に止めておかねえのか」

「それあ、おぼえてる。飛行将校のやつが、怪シナ人に、『ホンゴー』と言ったようだ、たしかに」

「な、なにホンゴー?」

「ウム、たしかに!」

皆がギョッとして顔を見あわせた。

(ホンゴーとは、本郷義昭ではないか?)それを皆が顔色でたずねあう。中に「第三司令」といわれた毛皮外套の大男が、ジッと目をかがやかして、

「しまった！　皆、本部へ引きあげろ！　やつ、ホンゴーだったか！」

恐ろしいものを見たように言うと、いきなり歩きだした。皆がついてゆく。十二、三人が洋服を、三人がシナ服を着ている。ハルビンの方へ行きながら、中のシナ人が小声で言う、

「第三司令！　本郷義昭だと、これアおれたちがあぶねえぞ」

「ウム、本部へ行って総司令を呼ぶんだ。ああ、やつのトルコ帽、黒めがね、恐ろしいやつだ。やつのシナ語はまったくきさまたちにも、日本人だとわからなかったんだな」

「わからねえ、おれたちよりもじょうずなシナ語だったんで」

小声で言いながら、第三司令をはじめ十六人のものが、ハルビンの裏へ行き、細い町を入ると、ゾロゾロとどこへか姿をかくした。

ハルビン市には、「シナ人町」というのがある。しかしシナ人ばかりが住んでいるのではない。各国の人間が、それぞれの店で商売している。にぎやかな町だ。

夜おそく、シナ人町の店は皆戸をしめた。町は人どおりもなくなり、さびしく見えて、両側のあかりが路（みち）を照らしている。そこに、身のたけの高い紳士がひとり、ステッキを振って、横路から出てきた。西洋人だ。屋根のあかりを受けて、中折帽子の下に顔が白い。顔つきも外套も靴も歩き方も、りっぱな紳士だ。夜おそくひとり、どこへ行くのか、ゆったりと歩きながら、また路

をまがった。四百メートルほど行くと、また別の路へまがった。そこに黒い箱自動車が、家の前に止まってる。運転台に居眠りしてるのは、ひとりのシナ人だ。そこに立ちどまった紳士が、ステッキで路をカタリと突くと、虫のような小声で言う、

「オイ、陳(チン)！　紅槍(ホンチャン)」

紳士の声を聞くと、シナ人の陳が太い声で答えた。

「同事同事(トンシートンシー)」

なにかの合図だ。眠ったふりをしてる陳、運転台にいて、番兵の代わりをしてるらしい。紳士は歩きだした。自動車の前をまわると、家の戸をステッキでおした。スッと音もなく戸が開いた。その中へ、紳士の立派な姿が、影のように消えた。

戸の中は暗い。まっ暗だ。が、紳士は奥のようすを知ってるらしい。まっすぐに歩いてゆく。床はコンクリートだ。靴の音がかたくひびく。隅の方へ行くと、靴音が下へおりてゆく。階段だ。幾段もおりてしまうと、

「開(オープン)けッ！」

英語で言った。

まっ暗な中に、一条の光がスーッと上下へ現れた。戸の端だ。それがおおきく開かれて、紳士は光の中に立った。中のものがさけびだした。

「アッ、総司令だ！」

紳士は中へ入った。両方からユダヤ人とシナ人がきて帽子とステッキと手袋を受け取り、外套をぬがせる。ここは地下室だ。天井から大きな電燈が下へ光を投げて、下には二十七、八人の各国人が、まんまるいテーブルのまわりに集まってる。テーブルの上に広げてあるのはアジヤの大地図だ。紳士が空いてる椅子へ、ゆったりと腰をかけた。すると、前にいる大男の第三司令が、太い髭(ひげ)の下から言いだした。

「総司令！　あなたに来てもらったのは、今、非常な失敗を、ここの本部でやったからだ。われわれが有力な味方だと思いながら、『怪シナ人』と言ってたやつ、あの李天祥(リーテンシャン)は、有名な本郷義昭だった。やつ、無声飛行機をどこからか呼びよせて、きょうの午前一時すぎ、市外の原を西へ飛び去った。しかも、われらの日満破壊計画書(にちまんはかいけいかくしょ)をうばって、日本軍の飛行将校へ渡したのだ。その日本軍飛行機は、南に行ったという。どうします？」

総司令の紳士は、これを聞きながら眉も動かさず、おちついて言う、

「殺すのだ」

「エッ、本郷をですか」

「無論！　本郷といえども、神ではあるまい。殺せるのだ」

「しかし、だれがやつを殺します？」

「おれが殺す！」

「……」

皆がシーンとなった。
「今だから言うが、おれは、やつがこの日満秘密破壊党へ入ってきたとき、あやしいと見ていたのだ。殺すつもりだった。第三司令！　やつは西へ行ったというのだな」
と、総司令は地図を見つめた。その両眼の光、火のように燃えて、
「さては、本郷、興安嶺へ飛んだな。やつが満洲にいる間、おれたちの目的は成功しないぞ」
と、見る見る顔色が青白くなった。
この総司令はなにものか、どこの国の人間か。本郷義昭を殺す！　と、顔色が青白くなるまでにかたく心をきめたのだ。
山また山の興安嶺、白樺の森深く、谷深く、月の下に静まっている。そこへ夜の大空を突いて東から西へ、本郷の無声飛行機が、興安嶺の上空へ飛んできた。
静かだ。高度今や六千メートルあまり、上空は実に静かだ。月と星の光に、空気が青くそまってる。その中を音もなく切ってゆく全速度、本郷も入江も岩崎も、すごい寒さに全身がこおっている。単葉の翼がふるえながら、スーッと機体が右へまわった。下を眺めてる本郷が命令した。
「岩崎、天佑谷へ安全信号！」
「ハッ」
岩崎が座席のそばのスイッチを押した。
電気が通じて尾翼の下に緑色の光がついた。

「入江、旋回！」
「ハッ」
入江は機体を右へかたむけ、尾翼を右へまわした。そして下げ舵を取った。
右へ大きくまわってゆく単葉飛行機、渦をまくようにおりはじめた。岩崎がさけびだした。
「アッ、黄色の信号燈です、天佑谷です！」
「ウム」
本郷は胸をかがめて、はるかに下を見つめた。黒く細長い線が幾すじも流れてる。谷だ。その暗い中に一点の黄色い光、かがやき現れては消え、消えては現れる。信号だ。しばらく現れるのは線を示す。現れてすぐ消えるのは点だ。これを「モールス符号」という。電報文にも使う。●がイだ。●――●――●はロだ。――●●●がハだ。そのほか線と点の組み合わせで、どんな文章でもつづれる。いま、興安嶺の谷底から上空の無声飛行機へ、黄色い光がモールス符号で通信する。本郷は、それを読みながら、グッと眉を上げた。なにか？
「本郷、ソノ機上ニ在リヤ。敵ノ秘密ノ手、今ヤ蒙古へ進ミツツアリ」
この燈火通信を読んで、眉をあげた本郷義昭、岩崎の座席の横にあるスイッチを自分でおした。おしては放し、またおす、長く短く、そのたびに尾翼の下から緑色の光が、同じく線と点のモールス符号を現し、今や三千メートルの上空より谷底へ通信する。
「本郷、ココニ在リ。今ヨリ着陸ス。鉄人先生、天佑谷ニ在リ給ウカ」

下の黄色の光が谷底から答える。皆、日本文だ。
「鉄人、ココニ在リ。来タレ、本郷」
「承知」
と、スイッチをおしては放す本郷、
「着陸！」
と、入江に命令した。
翼のふるえが止まった。スッとさかさになった単葉、三千メートルの高さから空中をすべって逆さに走る……音なき急転の直下、月の光をかすめて、おりゆく興安嶺の頂より谷底へ、その谷広くして、そこにバッと青白い炎（ほのお）が四ヵ所に燃えあがった。着陸所を下で知らせたのだ。マグネシウムの光だ。

## 日本人の中の日本人

天佑谷。四方は山と崖だ。が、大興安嶺の奥に、この谷底も広い。水流れて谷の中に平地があり、天にそびえてる松、楊（やなぎ）、白樺、ニレという樹、エンジュという幹の太い樹、ダンというめず

らしい樹などが、山から谷へ昼も暗く茂りあってる。この谷を発見して、樹を切り倒し、平地を畑にし、崖のかげに小屋をたて、岩を掘りあけて岩屋をつくり、崖と崖との間を抜ける秘密の路を開いて、東は満洲へ、西は蒙古へ、山また山を越えて出られる。この深く大きな谷を「天佑谷」と、岩屋や小屋に住んでるものがいう。

平地の四ヵ所に、夜ふけの今、マグネシウムの青白い炎を燃やしてる。その炎にパッとうつしだされた人影、数は十三人、皆が毛皮にくるまって、蒙古人のようだ。が、天を仰いでひとりが言うのは、ほがらかな日本語である。

「さすがに上手だぞ。本郷さんの部下だけある。見事見事！」

そばの皆が天を仰いでる。いかにも見事な空中滑走、見るまに着陸所へめがけて、さかさにおりてきた。グーンと大地を突き破るかと思うばかり、真下へ一直線に、と見る、いきなり、フワリと上向いて波に乗ったよう、地上十二、三メートルからななめにスルスルと着陸所へ入って、車が地に着くと止まった。

「むッ、うまい！」

と皆がおどろいて息をつく。

そこに、機体の中からおりてきた本郷義昭、トルコ帽に黒絹のシナ服、地面へ立つと静かに黒めがねを取った。後から岩崎もおりてきた。

入江も出てきた。すると、

「待っておったぞ！」

ズシリと力のこもった声が聞こえて、十三人のまん中からゆうゆうと歩き出た人、雪のような白髪を頭から両肩へたれている。しかも、からだ高く堂々として、着ている毛皮外套も白狐の毛をあんだものらしく、まっ白な巌が動き出たように見える。月に照らされて、全身が神々しく白くかがやく。

本郷は、この白い巌のような人の前に、トルコ帽をぬぐと、つつしんで頭をさげた。そして言う、

「先生もおかわりなく、お喜びを申しあげます」

「おお、きみも元気じゃの、武侠嶺のものも皆、健康であろうの」

「ハ、ひとり残らず、今後の働きを待っております。わたくしはただいままで、ハルビンにおりましたが」

「ウム、知っておる。奉天の本庄から密使が来ての、きみがハルビンに活躍しておると、わざわざ知らせてきたのじゃ」

この人、白く長い髯を、胸の上に左手でにぎりながら、関東軍司令官の本庄中将を、ただ「本庄」と言う。本郷に向かっても弟子のように言う。上空から本郷が通信した「鉄人先生」とは、この人にちがいない。

「蒙古の方面へも、敵の手が進みつつありと、お知らせでありましたが、……？」

と、本郷は帽子をぬいだまま、気をつけの姿勢をしてたずねる。
「さよう。それについて、少し話したいこともあるのじゃ。岩屋へ行こう」
言いながら、またゆうゆうと歩きだした。白い巌のような鉄人老先生、その後ろに本郷、岩崎、入江、そのほか十人、皆、日本人だ。向こうに見える崖の下へ、ヒタヒタと平地を歩いてゆく。このとき、マグネシウムの炎が消えて、ふたりの者が残って立ち、ならんで四方を見はっている。夜じゅう番兵に立っているらしい。ふたりの足もとに、黒くまるいものが台の上に乗っている。燈火通信器だ。台の下からふたすじの黒い電線が、崖の方へのびてる。すると、この深い谷底に、発電所があるのだ。かすかに滝(たき)の音が聞こえる。谷と四方の森にひびいて、仰げば月高く、降るような星が、いっぱいにきらめいてる。――ああこの天佑谷、白衣の鉄人老先生は、わが本郷さえ尊敬してる一世の老傑(ろうけつ)ではないか。したがう日本人は皆、顔たくましく姿正しく隆々(りゅうりゅう)としてる。見るからに日本人の中のすぐれた日本人だ。大興安嶺の奥にあって、この人々、なにを計っているのだろう……。
岩屋の中は、入り口からよほど深く、入ると右へまがり、なお行くと広い部屋が奥に現れた。入り路も天井も四方も皆岩だ。岩壁から岩壁へ、そして奥の天井へ電線が伝わり、部屋の中にあるテーブルの上に、置き電燈が明るくかがやいている。そのテーブル、椅子、隅にならべてある寝台、谷の樹をけずって皆が自分でつくったものだ。白木でガッチリとじょうぶにできてる。

鉄人老先生が、椅子へもたれた。その顔色、鉄のように赤黒く、白髪（しらが）と白髯（しろひげ）にうつって、しかも、水のように清らかな眼の光はなにものをも見とおすだろう。神々しい威厳にあふれて、本郷を眺めながら、力ある声が静かにたずねる。

「ハルビンで、かの赤魔バザロフに会うたかの？」

「会いました」

と、本郷も椅子へもたれて、

「バザロフは自ら『総司令』と言っております。さすがに一方の傑物、初めからわたくしを見破っておりました」

「ウム、そうじゃろう。彼の手は、大刀会（だいとうかい）にも、紅槍会（こうそうかい）にも、のびておるようじゃの」

「満洲のみで三万人は少なくとも、彼の命令に服しております」

大刀会、紅槍会、それはシナから満洲国へかけて、いたるところに隠れ動いている賊の名だ。馬賊ではなく、馬賊より強い。それが満洲だけで三万人も、バザロフという総司令にしたがってるという、この本郷の話すのを聞いて飛行士の入江はグッと腕をくんだ。三万人の賊を空中から爆撃したいのだ。が、賊は一ヵ所にかたまってはいない。総司令バザロフの秘密命令を受けて北満洲の方々に現れ、村を焼き、人民を殺し、財産をうばい、満洲軍と日本軍をも攻撃する。満洲国を乱す国家の賊だ。その本部が、大都会ハルビンの地下室にあり、その総司令が、白人のバザロフであろうとは、今、本郷義昭によってさぐられたのだ。が、さぐられたと早くも知っている

バザロフ、彼は別の名を「赤魔」という。ロシヤ語で「真っ赤な鬼（レージイ・チヨルト）」という。殺人の血を流して平気な鬼のような人間だ。この赤魔が、本郷のために自分の本部をさぐられ、もっとも大事な秘密の計画書をうばわれたのだ。

「三万人の賊は、しかし、本郷、恐るるにおよぶまい。いずれわが皇軍に討たれるじゃ。毒虫のようなやつらじゃからの」

と、鉄人老先生は微笑して、

「それよりも、蒙古が乱れそうじゃ。蒙古の中に、今また新たな敵が、ひそかに北平（ペーピン）から進んできとる。この方が将来は非常な禍いを、日本と満洲に残そうぞ」

「………」

本郷は、鉄人老先生の清らかな目を見つめた。すると、

「どうじゃ、わかったかの？」

「ハ」

本郷は、それだけを答えた。

わが日東の老傑と剣侠児、このとき、心から心へなにものかを伝え、なにものかを受けたのだ。

鉄人老先生は、なお白髯を動かして言う、

「しかし、かの赤魔は人間の姿をしとるが、心は鬼じゃ。君のためにやぶれて、捨てておく男で

はない。賊の三万人は恐るるにおよばぬ。が、一人の赤魔は、必ずきみと最後まで闘うじゃろう。ユダヤ人は、けっして復讐を忘れぬからの」

「なに、いずれ来るものと思っております」

「きみは大事な人じゃ。新たな敵を討つと同時に、赤魔の復讐にも、十分に用心してかかるがよい。本郷、そして、……」

と、言いかけて、鉄人老先生は、部下のひとりが汲んできた湯を、大きな茶碗から飲みほした。

この夜、老傑と剣侠児は、この天佑谷の岩屋に、夜明けまで語りあった。なにを語ったか？

興安嶺に朝日がさしそめ、やがて白樺の幹がまっ白くかがやきだしたとき、天佑谷から南へ、水の流れに沿うて崖のあいだを、きたない蒙古服の男がひとり、帽子もなく歩いていった。なにものだろう？　いうまでもなくわが本郷義昭だ。――本郷はひとり、天佑谷を出た。ボロボロの蒙古服を着て。

## 熱河（ねっか）のシナ兵

一月（ひとつき）すぎた。二月（ふたつき）すぎた。五月になった。北満洲には春らしい時候がない。寒い冬からすぐに夏の暑さがくる。冬に枯れてた木の葉が、一時に芽ばえて青々と茂り、興安嶺も美しい緑につつまれた。しかし、平原には、大刀会と紅槍会、そのほかの賊が、わが日本軍の平賀（ひらが）○団（だん）に追われながら、方々にあばれまわり、日本と満洲国に敵対する馬占山（ばせんざん）という将軍も、自分の軍隊をつれて逃げ走った。すると、熱河省という蒙古の一部分に、今まで満洲国にしたがっていた湯玉麟（とうぎょくりん）という将軍も、きゅうに敵対しはじめた。この熱河省の都の熱河、そこの町の四つかどに、六月二十九日の朝、きたない蒙古人がひとり歩いてると、

「囲め（ウエイパ）ッ」

と、不意に路のかげからなにものかシナ語の号令をかけた。

バラバラと二十人あまりの武装シナ兵が、四つかどから現れて、銃剣をきらめかし、蒙古人を取りかこんだ。立ちどまった蒙古人、まわりを見ると、

「本郷！　忘れたか？」

すごい声が、シナ兵の中から聞こえた。
（なにものか？）ボロボロの蒙古服を着ている本郷、その男の顔を見ると、にわかに目をかがやかした。
（赤魔だ！）シナ人に顔色も姿もかえてるバザロフだ！
本郷義昭と赤魔が、顔を見あわした。
（赤魔！　さては、きさまか！）
（本郷！　死ねッ！）
本郷の目は、このとき、水のようにすんで静かに、赤魔の目は、今殺そうという勝利を思って燃えた。ジリジリと四方からシナ兵が、今にも本郷へおどりかかろうとする、今や剣侠児の死！
これを目の前に見て、赤魔はすごく笑った。
「フム、本郷、網にかかったな、死ねッ！」
と、その声、するどくロシヤ語でさけんで、右手をふりあげた赤魔、本郷の胸を指さすと、つづいてシナ語の号令をかけた。
「放！」――射てッ！
一時に射った！　シナ兵の射撃、ひびきの中に、さすがの本郷もたまらず、あおむけにドッと倒れた、そのとき、
「アアッ！」

今まで本郷の後ろに立っていたシナ兵、二、三人がさけぶと、前へ横へ後ろへバタバタと倒れた。そこに、「うぬ!」赤魔もさけんだ。

どうしたのか? 見よ! 倒れたシナ兵の向こうに、目にも止まらず黒いものが飛んだ……本郷だ。……弾(たま)はあたらなかったのか? 四方からかこんで射ったシナ兵、味方にあたるのを恐れて、銃さきを上にむけた。その一秒前、倒れた本郷は後ろへ、ハッシと柔道の早技、シナ兵三人の足を横にはらって、おどり越えた捨て身と立ち上がりの早さ……。

「うぬ!」

と、赤魔がさけんだときは、四つかどの横路へ、本郷の黒い姿が風のように消えた。

「うぬ、追えッ!」

なおさけぶ赤魔の号令に、二十余人のシナ兵、おどろきながら横路へ走っていった。が、

「アアッ、没有(メイユー)!」——いないぞ!

皆が立ちどまった。まっすぐな路だ。夏の光がギラギラと赤土を照らして、両方に低い家がつづいてる。が、今の射撃におどろいて、だれひとりも出ていない。赤土の路、それだけだ。人無し。

「右側の家をさがせ! 行け、早く、一軒に二人ずつ行けッ!」

赤魔が歯ぎしりしてさけぶ、

「見つけたら射て! 賞金五千元(ゲン)!」

本郷は四つかどを右へまがったのだ。右側の家の中へ消えなくて、どこへ行く？――賞金五千元！　と、赤魔の命令に、おどりあがったシナ兵たち、われさきにと右側の家々へ、銃剣をきらめかして、バラバラに分かれながら入っていった。

（五千元で本郷が射てたら、安いぞ！）

と、路ばたに立ってる赤魔、そこに、向こうの四つかどから、ドッとかけだしてきた新たなシナ兵の一隊、先頭に四人の士官が、軍刀を白くふりかざしてくる。今さきの銃声を聞いて、なに事かと、熱河軍司令部の守備隊が、きゅうにかけつけてきたのだ。

「銃声はなんだッ？」

「敵の馬賊か」

「射ったのは、どこだッ？」

「アアッ、どうしたのか、オイ！」

四人の歩兵士官が、先頭にさけびながら走ってきた。後ろにつづくシナ兵たちは、味方の兵が家の中におどりこんでるのを見ると、皆がギロギロと目をかがやかした。自分たちもおどりこみ、家のものをおどかし、金や品物を分捕(ぶんど)ってきたいのだ。その路角に一人、ジッと腕をくんでるシナ人は、姿をかえてる赤魔だ。先頭に走ってきた隊長の歩兵少佐を見ると、いきなり呼びかけた。

「周少佐(しゅうしょうさ)」

「エッ？」
呼ばれた周少佐は、おどろいて赤魔を見つめた。すると、気がついて、
「アアッ、総司令ですか」
赤魔は熱河軍にも「総司令」と呼ばれてるらしい。大きな勢力をもってるのだ。
「ウム、軍隊を止めろ！」
赤魔が、おちついて命令した。
「ハッ、大隊——止マレッ！」
周少佐の号令に、後ろの軍隊がゾロゾロと止まった。赤魔がきく。
「いくらきたのか、兵力は？」
「ハッ、二個中隊です」
「人員は？」
「三百八十二人きました」
「よし、家の中をさがしてる二十三人を、周少佐、貴公の指揮に付ける」
「ハッ、分捕りですか」
「蒙古服の日本人をさがすのだ！　黒麻の蒙古服、帽子なし、髪をのばしてる。すぐさがさせろ」
「ハッ」

「賞金五千元！　殺すのだ！」

「ハッ」

周少佐と三人の士官が、五千元と聞くと、ビクッとした。いきなり後ろを振りむいた周少佐が、大声をあげて言いだした。

「聞けッ！　大隊命令、この町を探せ！　黒麻の蒙古服の男、帽子なし、髪をのばしてる。日本人だぞ！　殺せ！　賞金一千元（ゲン）！　わかれッ！」

聞くと同時に、ワーッと叫び声があがった。士官は軍刀をふりかざし拳銃を抜きだし、兵は小銃に剣をつけ弾（たま）をこめながら、方々の家へ争うように飛びこんでいった。周少佐も走りだした。五千から一千をひく四千元は、自分が隊長だからもらうつもりだ。

町のシナ人と蒙古人たちは、皆が家から路へ追いだされてきた。おとなも子どももブルブルふるえてる。黒服を着てる蒙古人の男と見ると、兵が五、六人で四つかどへひっぱってくる。そこに立ってる赤魔が、顔をふって言う、

「ちがう！」

路にも家の中にも裏の方にも、将兵のどなる声、男や女や子どものさけぶ声と泣く声が、方々に遠くまで聞こえ、戸を割って開く音、走る足音、銃声、ものを投げつけたひびき、ここに町じゅうが非常なさわぎにうずまいて、その中に、引っ張られてくる黒服の男を見ると、

「ちがう！　ちがう！」

と、さけぶ赤魔の顔色が、かわってきた。
（うぬ、本郷！　どこへ消えたか？）
シナ兵は家の中をさがすのが、うまいのだ。人民の家を荒らすのに、戸棚のすみまで早くさがす。このシナ兵四百人あまりを使って、このせまい町をさがさせながら、
（本郷は？　……）と、赤魔は四つかどに今や立ちすくんだ。

## その男はなにものか？

日がくれて、うす暗くなってきた。
町じゅうが、戸棚の奥、縁の下、天井の上、裏庭の豚小屋まで、残らずさがされた。
「賞金一千元」われこそ取ろうと、四百人以上のシナ将兵が、日がくれてきても、まださがしまわってる。
この時、熱河の町の外へ、畑の路を、スタスタと北の方へ歩いてゆく黒い蒙古服の男一人、うわれしそうな顔をしてる。本郷か？　歩きながら蒙古服のかくしへ手を入れると、大きな銀貨を何枚も出して見て、ニヤリと笑った。その顔、本郷ではない。なにものだろう？　畑の路を急い

で、うす暗い中を向こうの森の方へ、いっさんに走りだしていった。
町の方には、周少佐が息をきって、路へ出てきた。赤魔の前へ走ってくると、
「総司令、残念です。これだけさがしても、その日本人というやつ、どこにも、見えないようです」
と、声をふるわせて言う。いかにも残念そうだ。
赤魔は一言、吐きだすように言った。
「兵を集めて帰れ！」
「ハッ」
「おれがつれてきた二十三人も、貴公の大隊に加えろ。賞品だ。貴公は早くかけつけてきたからな」
「ハッ」
周少佐は赤魔に、捧げ刀の敬礼をした。二十三人の兵を、賞品にもらったのだ。赤魔は答礼もせず、四つかどを後ろへ歩きだした。
(うぬ、本郷！　今に待て、あくまでもさがしだして、殺すのだ！)
唇をひきしめ目をかがやかし、ヒタヒタと路を歩いてゆく赤魔、やがて夕やみのうちに姿を消した。
四つかどに立ってる周少佐は、ラッパ手を呼ぶと、集合ラッパを吹かした。遠くから近くか

ら、方々の家から出てきた将兵たちが、ようやく路に長くならんだ。ガヤガヤしゃべってる。周少佐はどなりだした。
「中隊長！　あらたに加わった二十三人を、二個中隊に分ける。人員検査（けんさ）！」
「ハッ、気ヲツケッ、番号！」
ふたりの中隊長が号令した。
「一（イー）、二（アール）、三（サン）、四（スー）、五（ウー）、六（リウ）、七（チー）、八（パー）、……」
番号が終わると、中隊長が報告にきた。
「第一中隊、士官以下二百二人！」
「第二中隊、士官以下二百二人！」
「なに？　合わせて四百四人か。そんなはずはないぞ」
と、周少佐は目を見はった。
今までの三百八十二人に加える賞品の二十三人は、四百五人のはずだ。
「ひとり、逃げたか、アーン？」
「ちがいます。ひとりは周少佐殿です」
「ウン、よし。軍司令部へ行進！」
すっかり暗くなってる路を、この熱河軍の二個中隊が、前にきた方へゾロゾロと行く。軍司令部へ帰るのだ。

あくる日の朝。

熱河軍司令部の表門に、ふたりの番兵が立っている。白い壁の大きな門だ。門の中には、入って右の方に、番兵小屋がある。四十人ばかりのシナ兵が、小屋の中に、武装したまま休んでる。熱河の夏は暑い。番兵は三十分ずつで代わる。小屋の柱に大きな八角どけいが、チクタクと振り子を動かしてる。その柱の下に、椅子へ腰をかけてるのは、番兵長の歩兵中尉だ。軍刀を膝のあいだに立てて、眠そうな顔をしてる。この番兵長の後ろに、ひとりの二等兵が、帽子を横にかぶったまま、これはコクリコクリと居眠りしてる。あぐらを組んで、小銃を肩へもたれさせて、だらしのない形だ。うつむいて眠ってるから、顔はわからない。が、きのう、赤魔についていた二十三人の中のひとりだ。ほかのシナ兵たちは、きのうの家探しのことを、きょうも朝から話しあってる。

「なあ、オイ、おしいことを、したじゃねエか、一千元!」

「ウン、おらあ、黒服の蒙古人が馬小屋の前に、ウロウロしてやがったから、いきなり、なぐりつけてひっぱってってったんだ」

「そしたら、いきなり、『ちがう!』とやられたろう」

「そうよ。しめた! 一千元と、ゾクゾクしたけどな」

「ハッハハハ、いったい、その蒙古服の日本人てやつは、あれだけおれたちがさがしたのに、どこへ逃げやがったろう?」

「逃げるすきは、ねエじゃねエか」
「だから、ふしぎだ。いくら日本人でも、なあ、オイ！」
「だから、おしいや、一千元！」
「やかましい、だまってろ！」
中尉が叱りつけた。眠いのだ。
皆が、ちょっと静かになった。が、また話しだそうとする。このとき、門の外に、自動車の止まった音が聞こえた。番兵がなにかたずねてる。と思うと、
「整列！」
番兵が号令をかけた。
眠そうな中尉が、ガタリと立ちあがった。
「早く出ろッ！」
だれか、えらい人が自動車に乗って、軍司令部へきたのだ。番兵は皆、小屋から飛びでると、門の方からズラリと二列にならんだ。中尉の後ろに眠ってた二等兵は、ノソリノソリと出てくると、後列の中へ入った。
「捧（ササ）ゲ――銃（ツツ）ッ！」
中尉が号令した。
ラッパ手がふたり、敬礼の曲を吹きだした。皆が捧げ銃をしてる。その前を、緑色のりっぱな

箱自動車が、門を入ってくると、司令部の建物の方へ、スルスルと走っていった。皆が窓の中を見ると、ただひとり、すずしそうな青白い洋服をきてる西洋人の紳士が、同じ色の青白い帽子をかぶり、振りむきもせず答礼もせずに、葉巻を吸いながら、スーッと行ってしまった。

「立テ——銃ッ、ワカレ！」

皆は小屋へ入ってきながら、またガヤガヤと話しだした。

「オイ、今の西洋人は、きのう、四つかどに立ってた人に、なんだか顔が似てたじゃねエか」

「そうよ。おれも、そう思った。きのうはシナ服、きょうは西洋紳士、へんだぞ。あいつにきいてみろ」

「そうだ。ヤイ、いま行った西洋人は、きのう、てめえの大将だった人だろう、ちがうか」

たずねられたのは、後列に入ってた二等兵だ。まだ帽子を横にかぶったまま、眠そうな顔をしてる。

「知らねエよ。おいらは」

そう言うと、この二等兵は、ノソリノソリと小屋へ入っていった。

## 本郷をさがす本郷

夜になった。午後八時、すると、司令部の建物の方から、別の四十人ばかりのシナ兵が、少尉につれられて、表門の方へ行進してきた。いままでの番兵小隊と代わるのだ。小屋を出てきた中尉が、今から番兵長になる少尉を見ると、そばへ行って耳へ口をよせながら言う。

「午前七時すぎ、きみも知ってるだろう、赤魔が、自動車できたぞ。まだ帰らずにいるんだ。裏門から出たかな？」

「そうか」

と、少尉は首をすくめるようにして、

「敬礼整列を忘れたら、たいへんだぞ、免職になるからな」

と、ビクビクして言う。

「気をつけろよ、緑色の箱自動車だ」

そう言うと、中尉はいままでの番兵小隊をつれて、司令部の建物の方へ、いまからグッスリ眠れると急いで行く。その列の後について、小銃を天秤棒のようにかついでいくのは、まるでばか

のような二等兵だ。だが、この二等兵こそ、実はわが本郷義昭なのだ。

本郷が、どうしてここへ来てるのか？　しかも、シナ二等兵になってるのは？　——きのう、三人のシナ兵を打ち倒し、早くも四つかどを右へまがった蒙古服の剣侠児、右側の家へ入るやすぐに裏庭へ、風のように走りぬけた。その裏庭に土塀が高い。およそ四メートル、と見た本郷、後へ下がった、同時に土塀目がけて走りだした、ハッシと飛びつく両手、かけあがる両足……路にはシナ兵のさけび声と足音が、ドッと走ってきた時、本郷は土塀をおどり越えていた。その塀の外、細い路地だ。サッと飛びおりた本郷、息もみだれず、しかもシナ兵に囲まれたもとの路へ走り出た。そこの地面に倒れてる二等兵ひとり、本郷に一撃の当て身を受けたひとりだ。ほかのふたりはいまさきに起きあがると、四つかどへ皆の後ろへ走っていった。気を失ったまま倒れてる二等兵を、本郷は路地へ引きずり入れた。うつむけにして背中へ、なお一撃の活！

「起きろッ！」

あえぎながら息を吹きかえした二等兵を、本郷はだきあげた。やっと立たせて、

「ぬげッ、服を！」

ここにシナ兵の服をぬがせて、自分の蒙古服を、シナ二等兵の軍服に着かえた本郷義昭、軍帽をかぶり小銃をもち革帯をしめて、四、五秒のうちに姿をかえた。ふるえてるもとの二等兵に蒙古服を着せると、

「おまえは、どこから兵にやとわれてきたのか」

やさしくたずねられて、シナ兵はなおふるえた。
「へ、平泉からきました」
平泉は熱河の東八十キロ程にある、小さな町だ。
「なまえは？」
「何同豊」
「よし、おまえは平泉の町へ帰れ。その蒙古服のかくしに、銀貨が二百元ほどある。それを持ってゆけ。途中でシナ兵に見つかるな」
「………」夢かとばかりに、おどろき喜んだシナ兵、本郷にペコリと頭をさげると、いっさんに路地から表の路へ走りだし、四つかどの反対の方へ、蒙古服をきたまま逃げていった。
シナ兵は皆、金で軍隊にやとわれてるのだ。その月給さえ、もらえないことがある。それが二百元も多くもらって、自分の家へ帰れるのだ。喜んで逃げていった二等兵の姿が、表の路に見えなくなると、本郷はノソリノソリと路地から路地の奥へ、シナ二等兵になって入っていった。そこに町じゅうのさわぎが起きた。新たな二個中隊が、家探しを始めたのだ。
（ご苦労だが、いっしょにさがすか）本郷は、ほがらかに微笑した。
（おれは二等兵、何同豊だ。今から本郷義昭を、さがしてやろう！）
何同豊二等兵は路地を走りだした。一軒の裏庭へ出てくると、そこに家のものを追い出してるシナ兵の中へ、まぎれこんでしまった。今や熱河軍司令部に、シナ歩兵二等兵の何同豊と姿をか

えて敵中にある日東の剣俠児、しかも、この夜、赤魔バザロフが、軍司令部の奥に、なにものかと会ってるらしい。まだ帰らずにいる。これをわが本郷義昭が、このまま見のがすだろうか……？

その夜、六月三十日の夜ふけに、アジアの大秘密山脈である興安嶺の上空へ、月の光をかすめて、またも一台の飛行機が現れた。複葉偵察機だ。プロペラの音高く、はるかに下の森をふるわせて、南から北へ飛ぶ。両方の翼に緑と白との光をかがやかしてるのは、なにかの信号らしい。その緑の光が、飛びながら二つになった。三つになった。と見るまに消えて、白い光一つになった。

この緑一つ……二つ……三つ……白一つの光を、はるかに下から仰ぎ見たのは、天佑谷に夜じゅう立ってるふたりの日本人だ。

「ウム、武俠嶺の捜索信号だぞ」

「そうだ、本郷さんかな？」

ひとりがすぐに燈火信号器のスイッチをおした。現れた光は白だ。空から見えるように、かがやきながらまるくまわる信号燈、これをめがけて、ななめに降りてきた偵察機、百メートルほど近く上までくると、ハラリと落としたのは、小さな落下傘についてる通信筒だ。白い傘がひらいて、信号燈のそばへ舞いながら落ちてくる。そのまま偵察機はまた上空へ、グーンと機首をあげて飛び去った。

「武侠嶺の連中は、実に、うまいなあ!」
下のひとりが、感心しながら走っていくと、通信筒を拾いとった。信号燈の光に照らして見ると、筒の下へ針金で結びつけてある小さな鉄の板に、白く書かれてるのは、二条の暗号だ。
「なに? 鉄人閣下親展……クロック! そうか。だが、先生はもう、おやすみだろう」
「いや、クロック将軍の通信ならば、持っていってみろ」
ふたりは顔を見あわせながら、ひとりは信号燈を消した。

## 警戒に立つ宣彦少年

天佑谷の奥に、白樺の森茂って、下には星の光もささず、まっ暗な中へ、蒙古服を着ている日本人が、左手に通信筒を握って、スタスタと歩いてきた。
森いよいよ深く、しかし、日本人は方向もあやまらず、やみの中を歩いてゆく。と、
「止まれッ!」
あたりの幹にひびいて、日本語が強く聞こえた。
「上空警戒者、第九号!」

と、立ち止まった日本人が答える。

「よし！　通れ！」

と、ただ二言、やみの中から通過を許した。この声、静かな森の奥へひびいて、どこからさけんだのか、姿も見えず、所もわからないのだ。

日本人は歩きだした。二百メートルあまり行くと、森の外に崖高くそびえ立ち、月の光に照らされて、青白くかがやいている。日本人は、森を出ると、崖の横へまわっていった。そこに、崖の陰から下へ降りてゆく小路が、自然の石段になっている。暗い。日本人は降りていった。姿が下に消えた。

石段の小路は、崖と崖のあいだに、左へまがってゆき、なお降りると右側の崖に、深く洞穴があいている。その奥の方に、小さなあかりが見える。日本人は、洞穴の奥へ進んでいった。なにものが切り開いたのか？　実に巨大な洞穴だ。トンネルのように、しかも、奥へ行くほど広い。

日本人の進みゆく足音が、ヒタヒタと上の岩と左右の壁へひびく。

この洞穴の路が、奥に行って三つにわかれ、日本人は右の路へまわっていった。そこにも上の岩から黒い線がのびて、電燈がついている。なお行くと、また右へまがろうとしたとき、

「止まれ！」

涼しい日本語が聞こえた。

曲がりかどに立っているのは、蒙古毛皮の外套を着ている十五、六の少年だ。その前に立ち止

まった日本人、電燈の下に微笑してきく、
「ヤ、今夜の当番は宣彦くんか。閣下はおやすみか？」
「いいえ、まだ起きていられます」
と、宣彦が、まん丸い顔をあげて答える。
「それでは、高村が武侠嶺からの通信筒を持ってきたと申しあげてくれたまえ」
「ハッ」
と、顔をかがやかした少年宣彦、洞穴(ほらあな)の奥へ走っていった。少年宣彦に代わって、この曲がりかどを警戒する高村は、外の方を向いて姿勢をただした。
洞穴のズッと奥に広間がある。そこに大きな丸木を組み合わせた机によって、満蒙大地図(まんもうだいちず)を眺めているまっ白な巌(いわ)のような人こそ、わが大東の鉄人だ。髪雪のごとく白く両肩へたれ、長き髭(ひげ)また白く、白狐(しろぎつね)の蒙古毛皮を着て、地図を見つめる瞳に無限の力あり、その顔色あざやかにあかく、なにごとかいま、地図を眺めながら、強くうなずいた。
このとき、入り口から静かに少年宣彦が入ってきた。立ち止まると、気をつけの姿勢をして言う。
「先生！　高村中尉殿が、武侠嶺からの通信筒をもってこられました」
ゆったりと振りむいた鉄人先生は、やさしく宣彦をながめて、白い髭の中から言われる。
「ここへ呼んでこい」

「ハイ」
宣彦は鉄人先生に敬礼すると、回れ右して出ていった。
やがて、蒙古服を着てる高村中尉が、つつしんで入ってくると、立ち止まって敬礼し、そして言う、
「ただいま、武侠嶺よりの複葉偵察機、この通信筒を持ってまいりました」
「よろしい。開いてごらん」
「ハ、閣下のご親展となっております」
「かまわぬ。発信人はだれかな?」
「ドイツ、クロック将軍であります」
「よろしい」
と、鉄人先生は、うなずいて言われた。
高村中尉は、落下傘の針金から通信筒を取りはずし、筒の上についてる小さなボタンに、指をあてて回すと、中にカチリと音が聞こえて、筒が二つにわれた。中から厚い紙きれを取り出し、両手でひらくと、
「暗号ドイツ文であります」
「読め」
「ハ、……われらがもっとも尊敬する鉄人閣下! 閣下のご健康を心より喜び、同時に、武侠嶺

にあるわれら一同の健在なることを、ここに報告するは、クロックの光栄とするところでありま す。ただ一つ、われら一同が心をいためつつあることは、すでに一月三日より、われらの本郷義昭氏が、武侠嶺を出てのち、そのゆくえまったく不明、特務間諜日本人松島道一の報告によれば、『去る一月、ハルビンにて本郷氏はシナ人李天祥となり、ユダヤ人の世界的秘密党〝シオン同盟〟に入りて、彼らの機密重要書類をうばえり』という。しかし、この後の本郷義昭氏、いずこにありや？　ここに閣下のお教えを乞い、万一、閣下なお本郷氏のゆくえについてご存じなきときは、武侠嶺のわれら一同、死をもって本郷氏のゆくえをただちにさぐるべく、一刻も早く閣下よりお教えを待つものであります。閣下のもっとも忠実なるドイツ陸軍中将ハインリヒ・クロック」

読み終わった高村中尉は、通信文の厚い紙きれを、鉄人閣下の前の丸木机へ、つつしんでおいた。まっ白な巌のごとき大東の鉄人は、ジイッとだまっていられる。その神々しい威厳に打たれながら、高村中尉は静かにたずねた。

「閣下、クロック中将に、ご返事をお出しのときは、高村が書かせていただきたいと思います」

鉄人先生は地図をながめたまま、なお静かに言われる。

「返事は、いらない」

「ハ、しかし、本郷少佐殿のゆくえについて、実はわたくしたちも皆、心配いたしております」

「なにを心配するのじゃ。本郷は、さほど心配な男ではない」

「閣下、しかし、このクロック中将の通信によりますと、本郷少佐殿がシオン同盟の機密書類をうばったそうであります。その敵の首領は、かのユダヤ人赤魔でありましょう」
「ウム、それに違いはなかろう」
「赤魔バザロフは、シオン同盟の極東委員長であると、わたくしたちは聞いておりますが」
「そうじゃ。しかし、赤魔なるものが、恐ろしいかの、高村」
と、鉄人閣下は、かすかに微笑された。
高村中尉は、グッと眉(まゆ)をあげて言う、
「わたくしたちに恐ろしいものはありません！　しかし、シオン同盟の力と赤魔のすごい腕を考えますと、本郷少佐殿のために心配するのであります。今、本郷少佐殿は、どこへ行っていられるのでありますか。どうかお聞かせください」
「本郷は、わしが熱河へ入れたのじゃ」
「オオ熱河へ、……」
「高村、本郷と力を合わせに行きたいと思うかの」
「閣下、言うまでもないことであります！　本郷少佐殿のためならば、わたくしたちひとり残らず、だれでも行きたいと思うでありましょう！」
と、高村中尉の声がふるえて、この洞穴の広間にひびいた。
すると、鉄人閣下は、雪のような髭(ひげ)を動かして、うなずきながら、

「熱河は、いまから後、わが日本と満洲国にとって、かなり大事な所になろう。いまのうちに様子を知っておくため、高村、おまえとなおひとり、……ウム、宣彦を修業のためにやろうかのう」
そう言われると、鉄人閣下は、テーブルの隅にある小さなボタンを、指さきでおされた。すると、洞穴の廊下に、ちいさく鈴の音が鳴った。鈴を聞いて走ってきたのは、少年宣彦だ。生き生きしている。入ってきて敬礼すると、静かに微笑していられる鉄人先生が、宣彦を見て、
「ここへこい、宣彦、おまえは高村中尉といっしょに、熱河の様子をさぐりにいってみんかな」
と、これを聞いた宣彦は、見る見る顔を赤くして、前へ歩み出た。
「先生！　行かしてください！　僕は、もう、蒙古語を、蒙古人と同じように話せますよ」
そういう宣彦は、熱血あふれて声もきれぎれに、なお言った。
「高村中尉殿！　僕、なんでもしますから、つれてってください！」

## 総司令の赤魔

熱河軍司令部の兵営。

白壁の兵舎が、低く三列にならんでいる。それが、夜ふけて星あかりの下に、沈んでいるように見える。多くの窓にあかりなく、すでに消燈の後だ。広い庭を越えて、向こうに三階建ての黄いろい洋館が、やみの中にたっている。これは司令部の建物だ。下の入り口の前に、一台の箱自動車が、ジッと止まっている。一階も二階も三階も、窓に皆あかりが見えるのは、この夜ふけに、司令部がなにか重大な会議を、開いているのではないか？

兵舎の中に、一時を打つとけいの音が、夜の重い空気をふるわせて聞こえた。

門の方から、三、四人のくつ音が庭の方へ、かすかにまわってきた。衛兵が巡視に歩いてきたらしい。

司令部の裏に、低い木造の建物がある。便所だ。そこへ、三名の衛兵が、巡視にきた。すると、

「アッ、待て！」

衛兵副長の軍曹が、なにを見つけたのか、部下の二名とともに、便所の中へ走っていった。

「オイ、たれかッ、止まれッ！」

衛兵副長がどなると、しばらくして、

「在阿」――おりますだ。

と、ばかのような声が、奥の方から聞こえてきた。

「たれだ？　名を言え！」

衛兵副長が、またどなると、
「何同豊(かどうほう)」
「第何営(だいなんえい)のものか？」
「第三営だに、今出ますだ」
と奥の方から、ボンヤリと出てきた二等兵、帽子をななめにかぶってる。本郷義昭の何同豊だ。
目の前に衛兵副長の軍曹を見ると、ダブダブの服を着てる何同豊が、ヌッと右手をあげて、軍曹に敬礼した。
「なんだ、貴様、いまごろ便所に、入っていやがって、腹でも下したのか」
と、軍曹が、はげしくたずねる。
「ヘエ、すみましねエ、腹が痛むでがんす」
「馬鹿ッ、この便所は、司令部のものだけが入るんだぞ。きさま、それを知らんか」
「ちッとも知りましねエだ」
「あやしいやつだ！　オイ、こいつを引っ張ってゆけ！」
衛兵副長の命令にバラバラとふたりの衛兵が何同豊(かどうほう)の左右へ、銃剣を差しつけた。軍曹がさけぶ、
「行け！　衛兵所へ！」

いま、司令部の秘密会議を、さぐろうとする本郷義昭、衛兵巡視のくつ音を聞いて、便所へ姿をかくした一瞬に発見されたのだ。

(残念!)と、本郷の何同豊、両手の指を組みあわせ、上下に振りながら、

「わたしゃ、なんにも知らねェんで、軍曹殿!」

と、地面の上へすわってしまった。

「なにを、立て!」

とそばへよってきた軍曹が、靴をあげて何同豊(かどうほう)の肩を、ハッシと蹴(け)った。

ノロノロと立ちあがった何同豊、いきなり言いだした。

「軍曹殿! わたしゃ、きのう、熱河の町で総司令についてた二十三人の中に、いたんですぜ」

「なに?」

と、軍曹は身を引いた。

衛兵のひとりが、何同豊の顔を見つめると、銃剣を引いて言う、

「アッ、そうだ。こいつは軍曹殿、総司令についてやがった二等兵です。まちがいありません。きのう、町からわたしと同じ小隊に入ってきやがッたやつだ」

これを聞くと、軍曹は横を向きながら、

「去(チュイ)!」——行けッ!

と、言うやいなや、衛兵をつれて、便所の前を歩きだしていった。

総司令というのは赤魔バザロフのことだ。シナ軍の中に、非常な勢力をもっている。「総司令についていた」と聞いて、身を引いた軍曹とふたりの衛兵が、向こうへ歩いてゆく。それを、後ろからながめる本郷の何同豊、また便所へ入っていった。なにをするのか？ 便所から司令部の中がさぐれるか？ そのまま四十分あまりすぎた。低いくつ音が聞こえてきた。蒙古人だ。襟の高い蒙古服を着てる。その服の色黒く、ヒタヒタと歩きながら、便所へ入ってきた。

午前三時すぎ、月すでに沈んで、星の光すみわたり、蒙古の空に風が出てきた。熱河軍司令部の営庭にも、やみに風動いて、窓ガラスをならしはじめた。

司令部の出口へ、八人の護衛兵がならんだ。銃剣をきらめかして、皆武装してる。そこに奥の方から石段を下りてきた人影数人、先頭は青白い洋服を着てる赤魔バザロフだ。後ろにシナ服と軍服の五人が入りまじってついてくる。シナ軍に有名な将軍の張作相（ちょうさくしょう）、王樹常（おうじゅじょう）、栄臻（えいしん）、満洲事変に日本軍攻撃命令をくだした王以哲（おういてつ）、熱河軍司令官の湯玉麟（とうぎょくりん）、この五人が、総司令の赤魔バザロフのあとについて、護衛兵のあいだを歩いて出ると、五人とも立ち止まった。そこにある箱自動車の扉を護衛兵長があけた。スラリと車の中に入ったバザロフに、将軍が五人とも敬礼する。自動車はすべりだした。

表門のなかの、一小隊の衛兵が整列した。衛兵長少尉が号令をかけた。

「捧（ササ）ゲ——銃（ツツ）ッ！」

銃を捧げて敬礼する衛兵の前を、バザロフのりっぱな緑色自動車が、スルスルと門の外へ走り

出た。路を左へ、蒙古人運転手は速度をかけた。
赤魔はどこへ行く？　速度をかけた自動車は、前にまっ白な光を道に輝かし、走ること千メートルあまり、原へ出た。車の中のあかりは消されている。赤魔が姿を見られないためだ。この時、なお速度をかけた一瞬、路から原の中へ車体が走り出た。と思うと、なにごとぞ？　車の中から不意に拳銃二発、原にひびくとあかり消えて車停まり、扉からおどり出た赤魔バザロフ、拳銃右手に身を伏せた。蒙古人運転手の姿も見えず、スルスルと赤魔は蛇のごとく地をはって、前へ進みだした。パッとおどりあがって、運転台へ飛び乗ろうとする。そこに車体の後ろから音もなく走り出た黒影！　蒙古人運転手だ。今しも運転台へ飛び乗った赤魔バザロフへ、サッとおどりかかった、振り向いて射ちはなした赤魔の自動拳銃、その右手が下から運転手につかまれて、乱射の弾は空を飛び、しかも運転手が右手の一撃、赤魔の左胸へ、と見るまに、
「ホンゴー！」
一声さけんだ赤魔バザロフ、左胸を突かれながら、サッと左手を振った。
白いもの！　が動いた。
白いもの！　ハンケチだ。赤魔が左手に投げつけたハンケチ、かわす一瞬に本郷の顔へ上から当たり、タラタラと流れおちる液体、これを払いのける本郷が、よろめくと下へ打ち伏した。赤魔も左胸を押さえたまま後ろへ倒れて、せまい運転台の上と下に、ふたりとも動かず、一秒……二秒……三秒するうちに、息を吹きかえした赤魔が、よろめきよろめきそばのハンドルをつかんで

立ちあがった。下に倒れてる黒色蒙古服の本郷を見つめて、
「……フム、健康を祝そうか、ホンゴー！」
と、底光る瞳を、すごくかがやかした。右手の拳銃を上衣のかくしへ投げいれ、うつむくと拾いとった麻酔液のハンケチを、ズボンのかくしへ突っ込んだ。
左胸を押さえながら、運転台を降りた赤魔バザロフ、倒れてる本郷を引きずって車の中へ運び入れ、外から扉をしめると、自分は運転台に飛び乗って、きゅうに前のあかりを輝かし、原から路の上へ、そして遠く走らせていった……。
夜が明けた。
熱河軍司令部の便所に、はいっていった衛兵長の少尉が、軍刀の革帯をといて、外へ立て掛け、前の扉をあけたとき、ハッと身を引いた。なにか？　シャツとズボン下の男がひとり、便所の中に倒れてる。そばに軍服がぬぎすてられ、その肩章は二等兵だ。衛兵長は呼び笛をかくしから取りだすと、口へ当てながら外へ向いて、いきなり吹きならした。一小隊の衛兵が皆、門の方から走ってきた。便所の中に倒れてる男を外へ引きずりだすと、
「アッ、総司令の運転手だ。蒙古人だ」
「死んでいるのか？」
さけぶ皆の中に、衛兵長、男の鼻へ手を当ててみると、
「生きてる。気絶してるのだ。医務室へはこべ！」

という、この衛兵長少尉は、おちついている。すると、そばから、副衛兵長の軍曹がさけびだした。

「林衛兵長殿！　この男が運転手だ。今さきに総司令の自動車を、運転していったやつはなにものです？」

「不明白（ブミンバイ）！」――わからない！

と、顔を振って言う林衛兵長は、司令部へ報告に走っていった。

## 七人の男に三つの誓（ちか）い

月、高く天にかがやいて、蒙古の大平原を照らす。青白い月光の下に、黒く方々に静まってるのは、森だ。まっ黒に見える。森も夜ふけに眠ってるようだ。見わたすかぎり、月の下の大平原、風さえ静まって、動いているものはなに一つない。天には、白い雲が流れて、月は西へ動く。星一つ、はるかに飛ぶと、見るまに消えた。すると、森の中にチラチラと動きだしたものがある。なにか？　火だ。おお火だ！　森の外から、赤く動いて見える。

なにものか、森の奥に、火を燃やしてるのだ。木こりのたき火か、それとも、シナ軍か蒙古軍

か、森の中に夜を明かしてるのか？……

大きな森だ。黒松の幹が、太く幾本もならび、その根が、ウネウネと土の上に出ている。上に枝がのび葉がしげって、かすかに月の光がさしてる。この森の中に、広い地面が、松の幹にかこまれ、そこに見よ、大勢の男女が。夜ふけに集まっている。七十人あまり、皆が、すごい顔つきをしてる。百姓か？　ちがうのだ。あるものは、洋服を着てる。女の中には洋装の少女がいる。あるものは、きれいな白絹（しろぎぬ）のシナ服を着てる。なにものの集まりだろう？　皆が土の上に、まるくなってすわり、まん中に枯れ枝を燃やしてる。ふしぎな連中だ。

松の根もとから、ひとりの男が立ちあがった。頭に白いきれをまき、青いシナ服の胸に、両肩から太い皮帯をさげ、右には拳銃、左にはなにか四角の皮箱をつるしてる。身のたけ高く、この中の幹部組長のようなものらしい。まん中へ歩いて出ると、火のそばへ立ちどまった。その顔白く鼻たかく、まわりを見つめていう、

「新入りのもの、集まれッ！」

「是（シイ）！」――ハッ！

まわりから、七人の男が、立ちあがってきた。この七人、シナ服や蒙古服を着ている。が、皆、二十歳くらいの青年だ。幹部組長の前へ行くと、いきなり、組長が右手をあげて号令した。

「一列にならベッ！」

「是！」

七人がゾロゾロと一列にならんだ。

「今から、おまえたち七人に、わがシオン同盟の誓(ちか)いを与える」

「是(シイ)!」

「三つの誓い!」

「……」

七人とも、だまった。

隊長が右手をあげたまま、するどい目をかがやかした。その目、青く火に照らされて、七人の顔を見ながらいう、

「第一の誓い! われらの神の名はエホバ、天地万物を造りたまいし神エホバの命令によって、われらは日本と日本人を敵とす!」

「是!」

七人が声をそろえて、強く答えた。

「第二の誓い! 日本をほろぼして、今後のアジアをわれらの世界とす!」

「是!」

「第三の誓い! 死すとも神のまえに誓いをかえず!」

「是!」

七人とも顔色が青白くなった。

「よし！　祈りをささげる」
まわりにすわってたものが皆、幹の前へ立ちあがった。
火の燃える音とともに、幹部組長の声がすごく、森の中にひびく。
「われらの神、天地万物の造り主なるエホバよ！　ここにわれらは、七人の新しき同志を加えて、天にある神エホバに誓う。シオン秘密同盟のわれらは、血と死をもって極東の日本をほろぼさん。ロシアをわれらのものとなせるごとく、日本をもわれらのものとなすべし。願わくは神エホバの大いなる力を、われら同盟の男女、各人に与えよ！　地の下をくぐりゆく水が、岩をも砕く永き忍耐をもって、彼ら日本人の有する国家を下より崩さん。祈りによって日本を敵とし、最後の勝利を、われらは神エホバの前に信ず！　アーメン！」
「アーメン！」
火のまわりと、幹の前に立ってる七十人あまりの皆が、上を仰いで高く両手を上げ、神に祈りの誓いをささげる。ひとり残らず目をふさぎ、すごい顔つきが火に照らされて、なにものかを呪う。森の中の恐るべきありさまだ。
誓ってなにを呪うのか？　日本を呪うのだ。幹部組長も両眼をふさぎ、口をひきしめ、たくましい両腕を高くさしあげてる。その太い腕、シナ服の袖口から、ありありと白く上に出てる。顔も腕も白い。頭にまいてるきれの下に、髪がちぢれて、紅く、今さきに見ひらいていた目は、するどく青くかがやいていたのだ。シナ服は着てるが、たしかに白人だ。祈りのことばによると、

シオン秘密同盟のユダヤ人だ。「アーメン」というのは、「真心(まごころ)で祈る」というユダヤ人のことばだ。

この恐るべき七十余人の祈りと呪いが、夜ふけの森の中にて、彼らの神エホバにささげられた、このとき、遠くから平原の上を、すべるようなひびきが聞こえてきた。

「誓いの火を消せッ！」

幹部組長が、カッと目を見ひらいて命令した。

皆がバラバラと集まってきた。うつむくと、両手に土を掘って、四方から火の上へ投げる。燃えてた炎(ほのお)が、土をあびて消えた。月の光が青白く、葉のあいだから下へ落ちてる。幹の上を仰いだ幹部組長、眉をしかめて、

「大刀(タータオ)！　音はなにかッ？」

はげしくさけんだ。同時に、幹の上の方から、答える声が聞こえた。

「南の方、自動車です！」

「一台か？」

「アッ、総司令の自動車です。橋を越えた。あかりを消してます！」

と、少年の声だ。

「たしかに総司令の自動車か」

「形でわかります、細長い！」

（総司令、来たる！）森の中の皆が、きゅうに静まった。

車の音が近づいてきた。路をすべってくる……森の外へとまると、

「丁殿九（ていでんく）！」

月の光をふるわせるような声で、森の中まで聞こえた。総司令――赤魔の声だ。

「ハッ」

幹部組長が外へ走っていった。

皆が立ちすくんでいる。そこにまた、

「ふたり、男が来い！」

総司令の声に、ふたりのシナ服を着てる男が、つづいて外へ走っていった。

黒い死骸（しがい）か？

怪人赤魔バザロフが、森の外へ運転してきた、すばらしくりっぱな緑色の箱自動車、その車の中から、丁殿九とシナ人の名にかえてる幹部組長、そしてふたりのシナ人が、ひとりの男を抱くように引きずり出してきた。その男の顔が月の光をあびた。両眼をふさいだまま、死骸（しがい）のように

動かず、しかも、凛たる眉、力そのものの如きほお、ジッと結んでる唇、たくましい全身に黒色の蒙古服を着ている。ああわが日東の剣俠児・本郷義昭だ。死んでるような顔が、月に照らされて、神々しく見える。頭の方をだいてる丁殿九が、おどろいて、ささやいた。

「総司令！　これは、なにものですか？」

運転台の外に、腕ぐみしながら立ってる赤魔バザロフ、目の前にかつがれてきた本郷の顔を、ジロリと見ると、獲物をつかんだ鷲のごとき目をきらめかして、

「これか。丁殿九、ウム、一国を取るよりも、この男を捕った方が、おれの血はわくぞ！」

と、これを聞いて丁殿九は青い瞳を見はった。

「おお、では、日本の本郷ではないですか？」

「ウム、こいつだ！　森の底へはこべ！」

「総司令、同盟の勝利です！　これが、本郷ですか！」

と、丁殿九の声が、喜びにおどった。

「ハ、ハ、ハ、まず勝利か、いや、決戦はこれからだ。丁殿九、大いなる敵は、興安嶺にあり！　今夜、はじめて、敵の本部の巣が、興安嶺の奥と、明白に知れた。これからだ、こんどの敵は大きいぞ」

森の中へ、ゆうゆうと歩いてゆきながら、赤魔がささやく。後ろに本郷をかついでゆく三人、その中の丁殿九がなおたずねる。

「興安嶺の奥、どの方向ですか?」
「ここから北々東!」
「しかし、どうしてわかりましたか?」
「熱河軍司令部の三階に、無線電波を受けて、おれが今夜、試験してみたのだ。特別に短い電波の暗号だ。受信のルーフアンテナによって、発信方向を、おれが、たしかめた。暗号を見ると、日本人の使うものだ。方向は北々東! たしかに興安嶺の奥だ。なにものが発信し、なにものが受信してるか、おれには、今夜、明白に……ウム彼だ! 彼だ!」
ふと赤魔が立ちどまった。森の中の広場を、すかして見ると、しばらくしてたずねた。
「丁殿九(ていでんく)! 数がおおいではないか?」
「そうです。今夜、新入りが七人、今さきに誓(ちか)いを終わりました」
「あやしいやつはおらぬか。おれが会ってみよう!」
ユダヤ語で話すふたり、ほかのものにわからないのだ。
広場の七十人あまりは、ゆうゆうと入ってきた総司令の目の前に、身動きもせず立ちすくんでる。総司令の後ろに、かつがれてきた黒い蒙古服の人間、それが黒い死骸(しがい)のように見える。
「新入りの七人、前へ出ろ!」
と、皆の胸にしみこむような冷たい声で、総司令が命令した。

# 今や得たり一条（すじ）の路（みち）

熱河の東八十キロ程に、「平泉（へいせん）」という小さな町がある。今しもギラギラと日光の明るい昼すぎ、ふたりの蒙古人が、平泉の町を西へ歩いてゆく。高村騎兵中尉と宣彦少年が、姿をかえてるのだ。いかにも貧乏な蒙古人兄弟のように見える。

町を通りすぎると、ふたりは高粱（コーリヤン）の畑路へ出てきた。畑路といっても広い。両がわの高粱は、高村中尉の身のたけよりも高く、青々と茂ってる。だから、広い街道でも、畑路のような気がする。ふたりは急ぐ、熱河へ！……。

（熱河には、本郷さんがいられるはずだ）

これを、神と仰ぐ鉄人先生から聞いてきたふたり、武侠熱血（ぶきょうねっけつ）の本郷さんに、早く会いたいのだ。この前、月明るき夜、無声戦闘機に乗って天佑谷へきた本郷少佐、鉄人先生と会い、朝になると、ボロボロの蒙古服を着て、谷を出て行った。それきり、ゆくえが知れないのだ。熱河は人口二万五千、だが、どこかで活躍してる本郷さんだ。さがせばさがせるだろう。さがして会わねばならぬ。（急げ！　僕たちが行ったら、本郷さんは喜ぶぞ。喜ぶ本郷さんの顔が見たい！　も





う一つ、本郷さんの大きな仕事に、僕たちも、手伝わしてもらいたい！）

二つの望みが、ふたりの足を急がせる。高粱の畑を出ると、けしの畑路へふたりは入った。すると、向こうの曲がり角から、これも急いでくる蒙古人、二十五、六の男だ。ただひとり、だがひとりでなにかニコニコしてくる。と、見ると、宣彦少年は、きゅうに高村中尉の顔を見た。中尉も、向こうの蒙古人を、ジッと見つめながらゆく。

広い黄色い路だ。かわいてる土が、三人の足もとから、ほこりをあげる。黄色い土ほこりの中に、三人が行きちがう、と、このとき、

「オイ、あにい、待った！」

高村中尉が声をかけた。

蒙古人がギョッとして、立ちどまった、と思うと、いきなり逃げだした。これを見た宣彦少年、逃げる蒙古人の足さきを、ハッシと横からけった。けられた足が、片方の足にからんで、バッタリ前へ倒れた蒙古人、ムクムクと起きあがろうとする、前と後ろにふたりが立つと、

「あにい、なにを逃げるんだい。おれらはなんにも、わるいことをするんじゃ、ねエんだぜ」

そういう高村中尉のまえに蒙古人は立ちあがると、恐ろしそうに中尉の顔を見ながら、

「ハア、おまえは、物盗り(ものと)じゃねえのか？」

「ハッハッハッ、あにいは、いやに心配してるナ。そんな悪いおれらじゃねエよ」

「それじゃ、おれを、なぜ呼んだ？」

と蒙古人がきゅうに強そうな顔になった。
「いや、呼んだのは、ちょっとたずねたいことがあってナ、あにい！」
「な、なんだ？　言えッ。おらあ先を急ぐんだ」
「では、正直に聞かしてくれ。その蒙古服は、だれにもらった？」
「な、なんだと？」
「あにいは今まで、兵隊をしてたナ！」
「ヤ、ヤイ、どうしてわかるんだ？」
「ハッハッハッ、あにいの眉から上が白いぜ。それに足をそろえて立ってらア。どうだ、あにいは兵隊だったナ！」
「ウン、おまえはなんだ？」
「おれらは、これから熱河へ帰るのよ。オイ、その着物に、見おぼえがあるんだ。おれのあにきの蒙古服だ。どこでもらった？」
「エエッ？　あれア、おまえのあにきか」
と、蒙古人は、おどろいて顔を長くした。
「そうよ、どこでもらった？」
「つ、強いあにきだぞ、おまえのあにきは！　この着物を、おれにくれて、おれの軍服を着たらしいや。あれア、とても強いあにきだ」

「ハハア、ところで、その軍隊は、どこの軍隊だ？」
「そ、そいつア言えねエ！　言ったら、……おらあ、殺されるからナ」
「なに？　だれが、あにいのような正直な男を、だれが殺すんだ？」
「……恐ろしい、すごい、白い人だからナ、言えねエ！」
「そうか、それじゃア聞くまい。が、あててみようか。その白い人は、鷲のような鼻をしてるだろう、鷲のくちばしのような」
「アアッ、おめえ、あの総司令を、知ってるんか！」
と、蒙古人は顔色をかえた。
「よし、行きねエ、あにい、また会おうぜ」
いきなり言いすてた高村中尉、スタスタと歩きだした。
（わかったのだ！　本郷さんは熱河でシナ兵になり、恐るべき赤魔——敵の総司令と闘ってるのだ！）
これが、宣彦少年にもわかった。
（いそげ！　熱河へシオン同盟の極東委員長バザロフ、赤魔のいる所に、わが本郷さんもいられるのだ！）
今や一条のさぐる路をつかんだ、高村中尉と宣彦少年顔を見あわせると、熱河をさして足を早めた。

熱河軍司令部。

白い壁の大きな門が、路に向いて立ってる。門の両方に、武装番兵が、銃剣をきらめかして、路の上をながめてる。そこに、きたないふたりの蒙古人が、トボトボと歩いてきた。青年と少年だ。ふたりとも長い柄のついてる籠を、肩へかけてる。

「パン、パン、うまいパン！　焼きたてのパン、まっ白な大きいパン、二つ一銭、銅貨一枚で二つのパン！」

と、少年蒙古人の方が、すずしい声でさけんだ。

「二つ食ったら腹いっぱい、一銭に二つのパン！　食ってみたらば、うまかろう。だれか見ないか、白いパン！　黄色いパンはないものか？　ないでもないが、ここにはない。パン、パン！」

「コラッ、向こうへ行けッ！」

と、番兵のひとりが、どなった。

「番兵さん、パンを買ってくれませんか、二つで一銭！」

「門の前で大きな声をするなッ。パンを見せろ！」

「ありがたい。買いますか？　兵隊さんは、ただで取るからナ」

「見せろといったら、ヤイ、見せろ！」

「だから、さきに一銭、出してくださいヨ、二つあげるんだ。一銭、投げてくださいナ、番兵さん！」

少年蒙古人が、そう言ってるところへ、門の中の番兵小屋から、ツカツカと士官が出てきた。歩兵少尉だ。剣をさげてる。ふたりの番兵が、おどろいて気をつけの姿勢（しせい）をした。ひとりが報告する。

「ただいま、異状ありません」

「パン売りの小僧など、相手にしちゃ、いかんぞ」

と、少尉が言いながら、前に立ってるパン売りのふたりを見た。

「ヘエ」

と、小僧も大僧の方も、おじぎをした。すると、

「オイ、その籠（かご）に、パンが入っとるのか？」

と、少尉が歩いてきながらたずねる。

「ヘエ、うまいパンで」

と大僧の方が、籠の上の新聞をハラリと取った。

まっ白いまるいパンが、籠の中に幾つも入ってる。大きくて、うまそうだ。

「隊長さん、買っていただけませんか、二つ一銭で」

「ふたりの籠（かご）の中に、幾つあるんか？」

「ヘエ、五十ばかり持ってきましたんで」

「五十か。番兵が四十二人おるんだ。みんな買ったら、まけるか？」

「そ、それア、三つ一銭に、ヘエおまけします、どうぞ皆、お買いなさって！」
「よし、番兵小屋へ来い」
少尉が門の中へ、パン売りのふたりをつれて、入りかけた。この時、路の向こうから、蹄の音が聞こえて、きたない馬車がガタガタと走ってきた。幌馬車だ。一頭の黒い蒙古馬を前につけて、駅者台の上にひとりの青年シナ人が、長い皮のむちをあげてる。幌の中を見ると、髪の白い年よりの西洋人が、黄色いダブダブの洋服を着て、ゆったりと腰をかけてる。その横に、顔の黒い十五、六の少年が、これも黄色の服を着て、同じ色の鳥打帽をかぶってる。幌の中からこの少年のまっ黒な眼が、軍司令部の少尉とふたりのパン売りと番兵をすばやく見た。
馬車の音に、ふりかえったパン売りの大僧と小僧、いうまでもなく高村中尉と宣彦少年だ。ふたりが、幌の中の西洋人を見ると、きゅうに顔色を動かした。
その幌馬車が、熱河軍司令部の前を、ゆれながら走ってゆく。年よりの西洋人も、高村中尉と宣彦少年を、幌の中から見ていった。カツカツと蹄の音が、路をけってゆく。そのうしろを、高村中尉も宣彦少年も見送った。
（あの色の黒い少年は、なにものか？）
（インドの少年ではないか？）
「オイ、入れ、パン屋！」
そばから言う熱河軍の少尉も、幌馬車の後を、じいっと見送ってるのだ。

まっ暗だ。なんにも見えない。墨（すみ）の水の中のようだ。水のように思えるのは、暗い中の空気が、つめたく沈んでいるからだ。まるでなに一つ見えない暗さ——その中に、いきなり、

「ああア……」

と、あくびのような太い声が、下の方に聞こえた。

だれかいる。その声がまた、うなるように言いだした。

「ああア　没法子（メーイファーズ）……」——仕様がねえやア……。

シナ語だ。シナ人が、まっ暗な中にいるらしい。うなるようにひとりでいう、と、それきり、だまってしまった。そのまま七、八分すぎた。そこに、遠くの上の方から、足音が聞こえてきた。ひとりではない。三人か四人の足音だ。上の方から、コトリコトリと、いっしょに下りてくる。

「ああア、来了麼（ライラモ）？」——来たか？

またシナ語が、うなるように言った。

足音は階段を下りてくるらしい。だんだんと下へ、コトリコトリと聞こえてくる。ひとりはくつ、ほかの三人は、はだしでいる。それが足音でわかる。その下の方へ、スーッと上からあかりがさしてきた。暗い中に、灰色の階段が見えた。すると、

「左だぞ！　落とすな！」

と、何か突きさすような声が、すごく上から聞こえた。

「大丈夫です、ここが下の下の廊下です」
と、答える声も、いっしょに下りてきた。
「ウム、わかっているのだ」
あかりが動いて、いよいよ下りてきた。灰色の階段……下に灰色の床……灰色の壁が、ボンヤリ見える。廊下だ。広い。そこに、四人が影のように、階段を下りてきた。先頭の黒影が、あかりをさげている。あかりといっしょに洋服のズボンと赤ぐつが、ヒタヒタと歩いてくる。その後に、三人のシナ服の裾とズボンが動いて、足つきがヨチヨチと重そうに見える。
「待て！」
先頭が立ちどまると、あかりを持ちあげた。
懐中電燈らしい。が、特別のものだ。スイッチを押して、電気を強くしたのか、パーッときゅうに明るくかがやきだした。灰色の広い廊下が、トンネルのようだ。壁に四人の影が、否、五人の影が写った。光に皆の顔もはじめて現れた。先頭に怪人赤魔バザロフ、するどい目が廊下の向こうを、ジッと見つめている。つぎに同じくユダヤ人の丁殿九、青いシナ服をきて、ほかのふたりのシナ人といっしょに、黒い蒙古服の人間の頭と足の方を、重そうにかついでいる。蒙古人に姿をかえてる本郷だ。
おお本郷義昭が、この灰色の廊下へ、赤魔と部下の手によって、いま、かつぎおろされてきたのだ。が、いまさきに、まっ暗な中で、「ああア、……」と、うなるようにシナ語で言ってた人

間は、どこへ行ったのか？　赤魔が照らした懐中電燈、白い強い光が、廊下じゅうにかがやきながら、立っている四人と、死骸のようにかつがれてる本郷、五人のほかには、なにものも廊下にいないのだ。しかも、あやし！　ここはいったい、どこの建物なのか？……

赤魔があかりを高くあげたまま、歩きだすと言いつけた。

「丁殿九！　八号へ入れろ！」

「まん中ですナ、わかりました」

丁殿九も後のシナ人ふたりも、本郷を重そうにかついだまま、ヒタヒタと歩きだした。

## 熱血と冷血

――大きな波がまるくまわっている。うずまきだ。うずの中に自分が、波といっしょに、まわされてる……上を向いたまま、グルグルとまわってるのだ。

（なにを！　？）

グッとうずまきの上を、背なかで泳ぎ切った。外へ波を切って出た……と思った本郷義昭、そこで気がついた。しびれ薬が、頭の中にさめたのだ。同時にグッとからだが動いた。すると、

「お目ざめか、ハ、ハ、ハ、気分は、どんなものか、聞きたいものだが、……」

ゆうゆうと言いだした、その笑い声、赤魔バザロフの声だ。つづいて突きさすように言う、

「どうかな、本郷！　さて、よく来たものだ！　勝敗、ここに明白、シオン同盟と日本！　まず、こんなものかな、フム起きろ！　立て、本郷！」

氷のごとく心のつめたい赤魔も、いまや日本の本郷を捕らえ得て目の前の喜びに、自分の「シオン同盟」の勝ちを、口に出してほこる、――日本をほろぼそうとちかう秘密のシオン同盟、その大幹部である赤魔バザロフが、本郷を捕らえたことは、まったく彼の大きな勝利だ。同時に、日本にとって非常な損害でなければならぬ。一軍の全滅よりも、わが本郷義昭を失うことは、帝国の国防のためにおしい！……。

ジッと仰むいてる武侠熱血の本郷、自分の顔が、あかりの白い光に照らされている。赤魔のほこる声を聞きながら、まだ身動きもせず、近くの様子を、心静かにながめた。

あかりは特別の懐中電燈だ。ほとばしる白熱の光が、太い十字の格子のように上にかがやいている。その格子の外に、腕ぐみしたまま立ってる黒い紳士風の男――おおバザロフだ。

（怪魔、勝ちをほこる！）と、本郷は仰むけのまま、まだ動かず、あたりにつめたく沈んでる空気を、深く腹の底まで吸うと、静かにはきだした。

しめっていて土くさい空気だ。しかも、三方の灰色の壁、一方に太い格子戸あり、外は廊下らしく、そこに、赤魔が影のごとく立っている。上の天井は暗く、土のにおいは、しめっぽく上か

ら落ちてくる。背なかの下の床は、ジッとつめたい。

（地下室、深し！）と、これを、すぐ知った本郷剣侠児は、はじめて声をかけた。

「バザロフ！　いま少しく衛生に良い部屋を、用意しておくがよかろう。シオンの諸君は、世界の富をにぎっているはずだ。が、この部屋は、まことにおそまつのようだ」

と、これを聞くと、バザロフの青白い顔が、格子の外から、すごく笑った。そして言う、

「失礼したかね、本郷の死の部屋として、なるほど、いま少しく相当に、かざっておくべきだッた、かもしれない。ハ、ハ、ハ、ところが、ここはなにしろ満蒙の平原、これだけの物をつくるのが、まず、精いっぱいのところだ。ハ、ハ、ハ」

満洲か蒙古か、冬は凍る平原の下に、いつのまにか大地を深く掘り、自由に通行しうる大建築を、造りかくしているシオン同盟、その力は、いかにも恐るべきものがある。これをまたほこって笑う赤魔バザロフ、腕ぐみしたまま、本郷の全身を、すきまなく見つめながら言う、

「さて、本郷！　あいさつはお互いに、このくらいでよかろう、として、おれの手もとから、貴公が持っていった機密書類、ハルビンで貴公の手に入った、あれはいま興安嶺の日本人の巣にあるのかね？　死ぬ前に言え、本郷！」

死をもってなにものがせまろうとも、これに答えぬ本郷義昭と、もとより知ってる赤魔バザロフ、かがやく電燈の白い光を、本郷の顔に照らして、まばたきもせず見つめながら言う、

「興安嶺の奥に、日本人の巣、その秘密の谷に、なにものがひそんでおるか、知らぬおれではな

いのだ。フム、本郷、貴公は、ハルビンから興安嶺へ、無声飛行機を使ったのだ。そして熱河へ来た、途中におれの機密書類を、興安嶺の老人へ、報告に渡してきたろうが……？」

言いつつ赤魔の瞳が、なにものをも突きとおすように、殺気あふれて、ジイッと本郷を見つめる、答えぬ本郷の顔色の動きから、なにものかを読みとろうとする。すると、

「ハハア、バザロフ！」

本郷が微笑した。白い光の中に、ゆうゆうと起きあがりかけた。

赤魔も格子戸の前へ、グッとからだを近づけた。侠傑と怪人、内と外から、まぢかく顔を見つめあった。互いに顔色を読もうとする。しかも、本郷はほがらかに笑い、赤魔の顔は青白い面のごとく、ただ唇だけを動かして言う。

「本郷！　……ここは、シオン同盟の土の牢獄だ。言わぬか、機密書類のゆくえを！　貴公の手から、なにものへ渡したか？」

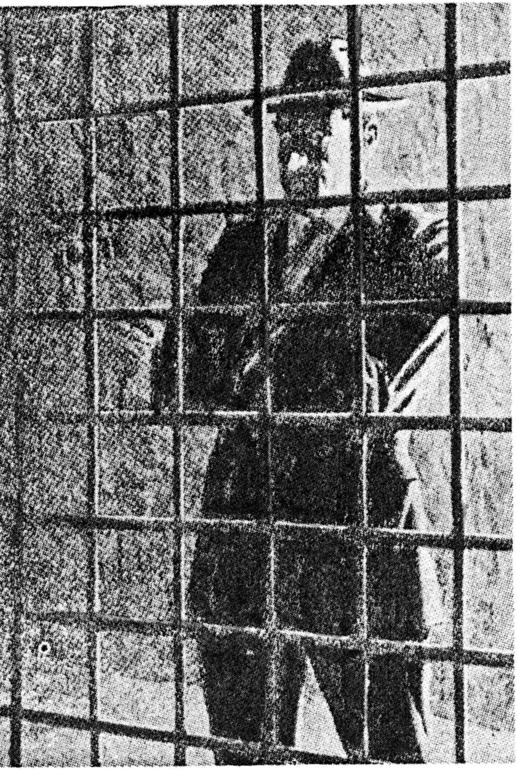
「バザロフ遅し！　すでに三月前だ」

と、言いながらスックと立ちあがった本郷、格子戸へ右手をかけた。

鉄だ。ビクとも動かない格子戸の外に、赤魔は、あざけり笑った。

「フフム、三月前、日本の『愛国機』と名づける飛行機によって、関東軍司令部へ渡したと言うのか」

「そのとおりだ。さすがは赤魔！」





と、なお微笑する本郷は言う。
「いま、貴公の知りたいのは、機密書類のそれよりも、興安嶺の奥ではないか。峰と谷にあって、満蒙の盾となる日本人の数知れず、無声飛行機あり、神のごとき老将軍あり、貴公の恐れるところは興安嶺だ。行け、バザロフ！　シオン同盟をひきいて、興安嶺の日本人をさぐれ。老将軍は、貴公らの来襲を、一日も早くと待っていられるのだ。すでに三月、おそいではないか、赤魔！」
「フン、襲うに時を選ぶのが、おれのやり方だ。ゆっくり聞こう、貴公のいわゆる『老将軍』本名はなんというのか？」
「言うまでもなかろう」
「なに？」
「老将軍は日本人！」
「………」
「名を聞くよりも、日本人の力を知れ。バザロフ！　正義、仁愛、剣、三千年の魂に生くる日本人の前に、シオン同盟が陰謀の炎を消せ！　貴公のためだ。貴公の才知、貴公の胆略、冷血、決断、すべておしいものだ。正義の日本を敵にすることをやめて、アジアの地を去れ。去って西へ行き、貴公の祖国ユダヤを興せ！　亡国ユダヤを、祖先の墳墓の上に、ふたたび興すべきが、貴公のつとめではないか！　かしこきバザロフ、貴公のためだ」

敵に捕らわれ、死を前にして、その敵を熱心に忠告する本郷義昭、鉄格子をつかんでいる顔色に友人の身のうえを思うような真心(まごころ)が、ありありと、はげしく現れた。

## 待て四十九日！

ユダヤの国はほろびている。ほろびてすでに二千余年、国はないのだ。だが、ユダヤ人は世界に今や千三百五十余万人、各国に散らばっている。しかも、世界の大きな富をにぎっているのは、何百年も前から、多くユダヤ人だ。米国、英国、フランスをはじめ、すばらしい大金持ちは、ユダヤ人が多い。彼らは欧米強国の金を動かす。だから、この前の世界大戦のとき、ユダヤ人は戦によって、すごい富をにぎった。金にして二千億ドルとかぞえられている。

二千億ドル、巨大な富だ。この大きな富を、新たににぎったユダヤ人の勢力は、米国にも、欧洲にも、目にたっては見えないが、すばらしいものだ。ここに、亡国(ぼうこく)のユダヤ人は、けっして劣(れっ)等(とう)の人種ではない。大金持ちになったばかりか、すぐれている多くの政治家にもなった。フランスの大統領になったミルランは、そのじつ、ユダヤ人だった。大蔵大臣(おおくらだいじん)のクロッツもユダヤ人だった。英国のロイド・ジョージの内閣にも、ユダヤ人が多かった。露国(ろこく)はどうか、革命当時陸軍

大臣をしていたトロツキーをはじめ、ケレンスキー、カーメネフ、ジノブエフ等、有力な政治家の十人のうち八人までが、皆ユダヤ人だ。米国はどうか、大都市ニューヨークの人口五分の一は、有力なユダヤ人だ。大統領だったウイルソンの夫人まで、ユダヤ人だ。このほか、世界的学者のマルクスも、アインシュタインも、同じくユダヤ人だ。

おそるべきユダヤ人、その秘密の世界的同盟を「シオン同盟」という。「シオン」はユダヤにそびえている山の名であり都の名だ。シオン同盟の目的は、ユダヤ国の独立をはかるばかりではない。全世界の国々を、最後にはユダヤ人の下に、必ず征服しようとする。このために、世界じゅうの帝国を、まず共和国にかえようとする。ロシヤ帝国がほろびたのも、ドイツ帝国がほろびたのも、おそるべきユダヤ人の陰謀だといわれている。あらゆる国を、まず共和国にし、その国民を最後には、ユダヤ人の勢力の下に征服しようとする。これが、シオン同盟の大目的だという。じつに世界的大陰謀ではないか。

このシオン同盟の極東委員長である赤魔バザロフ、アジアの帝国日本をほろぼそうとして、その目的のために、満蒙へ来たり、いまや本郷義昭を「土の牢獄」――地下室に捕らえて、しかも本郷から友人のように忠告されたのだ。「アジアをさわがすよりも、去ってユダヤの祖国をおこせ!」と。

これを聞いて、赤魔の、今まで水のようにすんでいた瞳が、らんらんと光りだした。彼ははじめて顔色を動かした。うらみと呪いの色すごく、うす黒い唇を引きしめた。二千余年の祖先から

伝えきた亡国のうらみ、今や赤魔の顔に現れて、彼は炎をはくように言いだした。
「知らぬか、本郷！　第二のユダヤは建てられているぞ。ソビィエット・ロシアを見よ！」
今のロシアは、ユダヤ人の国であると言う赤魔、呪いにもえて本郷を見つめると、
「興安嶺を、日本人の手に渡しておけぬのだ。おれを『遅し』という本郷、きさまに、興安嶺の日本人滅亡を、今三月、否、七の七倍の日……四十九日のうちに、目の前へ見せてやろう、この土の牢獄に、待て四十九日！」と、声を低めて呪文をとなえるごとく言いつづけた。
七の数は、ユダヤ人が祖先から、神聖な数として、あがめている。興安嶺の大山脈は、将来、日露開戦の時には、第一に勝敗を決する重大な地だ。四十九日のうちに、興安嶺の日本人滅亡を、ここに前もって言いだした赤魔バザロフ、呪いの胸に、なんの陰謀をたくらんでいるのか？亡国の怪人、「やる！」と言えば、必ずやる赤魔だ。このとき、廊下の遠くから、ユダヤ語で報告する声が、不意に聞こえてきた。
「総司令！　今、黒松の森に、幌馬車一台、熱河の方から近づいてきますぞ。どうしますか？」
きたない幌馬車が、一頭の黒い蒙古馬を前につけて、路から畑の上へ、ガタガタとゆれてきた。ヒューッと長いむちを、馭者の青年シナ人がふりあげた。むちの音に馬は足を早め、グラリと馬車が横にかたむいて行く。畑の土は走りにくいのだ。すると、
「見えるかい？　消えてやしないか」

と、幌の中から、英語でさけびだしたのは、顔の黒い少年だ。
「はっきり見えてます」
と、駆者も英語で答えた。青木綿のシナ服を着てる。
「畑の中を走っていったんだナ、路を出てから」
と、少年がまたさけんだ。すると、
「ウム、気をつけるがよい。向こうに見える森が、この近くではあやしいと思われる」
と、少年の横に腰をかけてる白髪の西洋人が、前の方の森を見て、ゆったりと言う。
「そうです、ゴム輪のあとは、森の方へつづいています」
駆者はむちをまたふりあげた。馬の前の畑の上を見てゆく。赤黒い土の上に、自動車の走ったあとが、太くつづいている。全速力で走ったものだ。スーッと二条、はっきり見える、しかも、新しくりっぱなゴム輪のあとだ。（このいなかに、こんなりっぱな自動車を使っているのは、なにものか？）
これを、幌の中のふたりがあやしんだ。熱河軍司令部の前を通ったとき、この自動車のあとを、土の上に見てはじめてあやしんだのだ。
（貧乏な蒙古人やシナ人が、乗れる自動車ではない。もしかしたら、これを使っているのは、ユダヤ人のバザロフではないか？）
「駆者、この自動車のあとを追ってみろ！」

と、そのとき、幌の中から英語で言いつけた西洋人が、つづいて横の少年に、インド語でささやいた。
「ルイカール！　おれたちのさがす人が、この自動車に乗っていったと思わぬか」
ルイカールと呼ばれた少年が、まっ黒な目をかがやかすと、
「エッ、どうしてですか、どうして、それがわかるんです？」
と、伸びあがると、幌の外へ顔を突きだして、路の上を見つめた。路の上に、太いゴム輪のあとを、向こうの方まで見わたすと、ルイカールはさけびだした。
「そうだ、左側を、まっすぐだ！　直線だ。こんなにうまく、運転する人は、……そうだ。馭者、早く走らせろッ！」
馭者は、このときもむちをふりあげた。
ルイカールは、息をはずませると、またインド語で、横の西洋人にたずねた。
「すると、あの人は、ユダヤ人の自動車を、運転していったと、あなたも、そう思いますか？」
「たぶん、そうだ。そのように思えることではないか。本郷は赤魔をすててはおくまい。しかし、……」
クロック中将、あなたも！」
「エエッ、しかし、なんですか？」
「危険じゃ」

「本郷さんに、危険があるのですか？」
「神ではない、本郷といえども。しかし、バザロフは悪魔じゃ。……待て！」
クロック中将は、幌の後ろについている小さな窓から、今きた路の方をふりかえって見た。――
そこに遠く、向こうから蒙古人の青年と少年が、籠をさげて路をいそいでくる、今さきに軍司令部の門の前で見た、パン売りのふたりだ。（あのふたり、パンを売りに、町の外へ来るのはあやしい！）
クロック中将は、ここにも怪しいものを見た。そのまま馬車は町の外へ、早く走りつづけた。
が、今しも森の前へ、畑の上をゆれながら来ると、駅者が手綱を引いてさけびだした。
「変です、ゴムの輪のあとが、森の外で消えてます！」
「なに？　よく見ろ！」
ルイカールが、駅者台の上へ飛び出た。
（本郷さんのためならば、死んでもいい！）そう思ってるルイカールだ。ドイツの将軍クロック中将も、駅者台へ出てきた。
きたのだ！　自動車のゴム輪のあとを見て、路をいそいできた高村騎兵中尉と宣彦少年、いよいよ森へ近づいてくると、
「見ろ！」
と、高村中尉が、小声でいう。

宣彦少年は、キッと森の方を見つみた。——幌馬車からヒラリと飛びおりた黄色い服の少年が、森の中へ走ってゆく。つづいて身のたけの高い西洋人が、これも飛びおりた。と思うと、あたりを見まわしながら、森の奥へ、ゆったりと入ってゆく。

「注意しろ！　西洋人は、赤魔の味方かも知れんぞ」

と、高村中尉は、なお小声になった。

宣彦少年は、眼をかがやかした。本郷さんを思う熱血、胸にあふれて、

「この自動車のあと、それに、幌馬車と西洋人がいるのを見ると、赤魔もいるんだ。僕、この近くに、本郷さんもいられる気がする」

と、いうと、これを聞いた高村中尉も、グッと強く顔いろを動かして、

「そうか。おれも、そう思うぞ」

と、それきり、ふたりは、だまった。話を聞かれてはならない。幌馬車の後ろへ、近づいてきたのだ。馭者台（ぎよしやだい）の上に、青年シナ人がただひとり、長いむちを肩にあてて、前に蒙古馬が一頭、首をさげている。ちいさいが強そうな黒馬だ。

「パンを買わないか？」

と、宣彦少年は、馭者を見て、いきなり蒙古語でいった。すると、

「不要（ブヤオ）！」いらない！

と、シナ語で答えた馭者の青年シナ人は、ジロリと宣彦少年を上から見て、顔をふった。

(おまえたちと、なんにも話さないぞ)と、そういうように、シナ人は、はげしく顔をふってみせる、すると、高村中尉が、やさしくたずねた。
「向こうにいる西洋人は、きみの主人かね? あの人は、パンを買ってくれないかな、うまいパンだぜ、きみ!」
「不知道(ブチタオ)!」——知らない!
と、シナ人は、また顔をふった。
ほかのものと話をするのを、この青年シナ人は、きびしくとめられている。してみると、向こうにいる西洋人に、いつもついているシナ人だ。途中でやとわれてきたものではない。主人の命令を、かたく守っている。しかし、高村中尉は、またたずねた。
「この近くに、もうひとり、西洋人がいるはずだがな、きみ知らないか?」
(赤魔のことだ!)と、宣彦少年も、シナ人の顔いろを見つめた。
「…………」
だまってるシナ人、目いろも動かさず、前の蒙古馬を見ている。赤魔のことをまったく知らない顔つきだ。
(すると、向こうにいる西洋人と赤魔バザロフとは、関係がないのか?)と、高村中尉も、宣彦少年も、森の中へ入ってゆきかけた。
(色の真っ黒なインド人らしい少年も、なにものか?)

る。

見ると、そのふたりが、森の中の空き地に立って、なにか足もとを見つめている。宣彦少年は、森へ入ってゆきながら、さげてるパンの籠(かご)を、右手から左手を持ちかえた。その右手で、土の上を、高村中尉にスッと指さして見せた。――自動車のゴム輪のあとが、見よ、ここで消えている。

クロック中将とルイカール、ふたりは、森の空き地に、ならんで立っていた。四方は黒松の幹にかこまれ、土の上にたき火のあとが、枯れ枝といっしょに残っている。灰がまだ新しい。なにものか、ここで火を燃やした。しかも、灰と枯れ枝のまわりに、靴のあと、はだしの足あと。大勢がいたのだ。その靴あとも、大きな蒙古靴、やわらかなシナ靴、細い西洋靴、さまざまな靴底の形が、方々にみだれている。ルイカールは、あやしみながら、土の上を見まわすと、

「アッ、そこは、一列になってる！」

と、たき火のあとの向こうを、ジッと見つめた。

「ウム、整列したものじゃ」

と、クロック中将も、その方を見た。

「七つある、七人、一列にならんだあとだ！」

「おお、……七つ？」

と、クロック中将は、その靴あとをかぞえると、白い眉を、きゅうにしかめた。おちついてる将軍が、きゅうにおどろいたらしく、声をひそめていう、

「ルイカール！　この大勢の靴あとは、シオン同盟のやつらが、この森の中に集まったらしいぞ」
「エッ、ユダヤ人が？」
と、ルイカールも、おそるべきユダヤ人の同盟「シオン」の名を知っていた。
「そうじゃ。七つという数は、ユダヤ人が、いつも使うからの。それに、たき火のあとを見ると、土をあびせてきゅうに消したものじゃ。おそらくゆうべ、シオン同盟のやつらが、ここに集まって、きゅうに立ち去ったものらしい、ウム、じつに世界の至るところへ、彼らは陰謀の手をのばしておるが、……」
森の外へ、靴あとが、どの方向へ立ち去ったか？　これを見るべく、クロック中将は、あたりを見まわす。さすがはドイツ軍事間諜団「七人党」の総首領だったクロック中将、一列の靴あとのたき火の上の土に、(これこそシオン同盟の秘密集合なり！)と、するどく見破った。このとき、ルイカールが、下を見たままいった。
「前の蒙古人がふたり、こちらへ入ってきた」
ヒタヒタとふたりの足音が、森の中へ聞こえてくる。
(あやしむべき蒙古人！)
と、クロック中将もルイカールも、同時にその方を見た。
高村中尉と宣彦少年も、また同時に、

（このふたり、はたしてなにものか？）と、ひどくあやしみ注意しながら、パンの籠をさげたま、森の奥へ入ってきた。
本郷義昭をさがすふたりとふたりが、それとも知らず、あやしみあって、互いに顔を見あわせると、高村中尉はクロック中将の前へ、宣彦少年はルイカールの前へ、静かに立ちどまった。ここでパン売りをはじめて、相手の正体をさぐろうとするのだ。
が、やさしく正体をさぐられるクロック将軍とルイカールだろうか？

## 死の前の友情

森の中に、四人があやしんで顔を見あわせたとき、――土の下の深い牢獄には、ユダヤ語で報告する声が、
「総司令！　ふたりの蒙古人、いまさきの白髯の白人とインド人らしい少年の前に、立ちどまりました。ひとりは二十七、八歳、ひとりは十四、五歳、ふたりとも籠（かご）をさげています。しかし、顔は似ていません。兄弟ではないようです。そして、……」
と、こまかく報告しはじめた。これを聞くと、赤魔バザロフ、太い鉄の格子（こうし）の前から、一言、

ズバリと命令した。
「だまれッ！」
突きさすような赤魔の声だ。ピタリと報告するものがだまった。
鉄の格子の中に、ほほえんでるのは、本郷義昭だ。懐中電燈の白い光に照らされて、力そのもののような本郷の笑顔を、するどく見つめた赤魔。格子の上の懐中電燈を取ると、
「貴公は、ユダヤ語を、知ってるとみえるが、……？」
と、自分もユダヤ語でいいだした。
「しかり、地上の報告を感謝しよう！」
と、本郷もユダヤ語で答えると、なおほがらかな笑顔になった。
いままでの報告を、本郷は残らず聞いていたのだ。
（しまった！）と、底光りのする目の光を、赤魔は本郷の顔へそそぐと、あざ笑いをほおにきざみつけて、
「フム、貴公の後から、いろいろのお客がきたようだ。一つお目にかかってみようか。この牢獄は、まだいく人も入れるのだ。広くつくらせておいたからな」
と、ゆうゆうといいすてると、懐中電燈に廊下を照らして、足音もたてず歩きだしていった。
まっ暗になった鉄格子の中に、捕らえられている本郷、スックと両手をあげた。上をさぐるとそこも高い格子だ。鉄の柱が十字形に、ガッチリとならんでる、息を深く吸いこんだ本郷、声な

き気合いとともに、高く上へ飛んだ。その両手、上の格子をつかみ、両足は下の格子へかかった。音もなく一瞬に、上へのぼってゆく。そこに、天井が両手にさわった。かたい。コンクリートだ。手のひらを下からあてて みると、いかにも厚くつくられている。地の下に、よほど深く掘ったものだ。天井の下から壁の方へ、本郷は鉄格子をスルスルと伝わっていった。さわってみると、壁もコンクリートだ。つめたく、しめってるのは、長いあいだに地の下の水が、しみこんでるのだ。

(赤魔! よほど前に、これだけの地下牢獄を、つくらせたが、壁のコンクリートは、うすいぞ。中は土だ。破れぬか?)

水がしみこんでるのは、そまつなコンクリートだ。本郷は息をはきだすと、下へ音もなく飛びおりた。そして腕をくんだ。

(破れぬか? ……いまさきのユダヤ語の報告、「白髯の白人」とはクロック将軍だ。「インド人らしい少年」とは、無論、ルイカールだ。ふたりが武侠嶺を出て、ここまでおれを、さがしてきたか!)

ふたりの友情が、地下に捕らえられている本郷義昭の胸に、熱くしみる。

(敵はいま、赤魔だ。クロック将軍とルイカール、いかに豪胆勇敢なりとも、赤魔の呪いの手に、落ちはせぬか。危険だ。しかも、「ふたりの蒙古人」とは、なにものがきたのか?)

自分は、死の牢獄に捕らわれながら、友のクロック将軍とルイカールの危険を思う本郷、立って

る両足に全身の力をこめた。土の上にいるふたりの危険を、救いたいのだ。力をこめた両足に、床のコンクリートを、はげしく打ちはじめた。すごいひびきが、床から廊下へ伝わっていった。赤魔の注意を、本郷の自分に引きつけ、同時に、この牢獄の中になにものがおるのか？　目の前の様子をさぐるべく、本郷は、足で床を打ちつづけ、きゅうに壁の前をはなれると、
「ああア、眇的奴！」——ああ、やかましいやつだナ！　と、廊下の奥から、ぼんやりしたシナ語が聞こえた。なにものか？　まだ廊下の奥にいるのだ。
「総司令！　やつが、なにかさわぎだしたようですぞ」
と、シナ服をきてるユダヤ人の丁殿九が、顔いろをかえていいだした。
赤魔は、あざ笑って、
「貴様たちは、本郷が恐ろしいか。やつ、おれを引きつけようとして、フム、……待てよ、こいつは？　ドイツ七人党のクロックらしいが？」
廊下のすみに、壁の上からさがってる太い潜望鏡へ、両顔をあててる赤魔、身動きもせず、地上の様子を眺めながら、
「オイ、聴音機の受話器を、よこせ！」
「ハッ」
と、床の箱をさぐって、丁殿九が受話器を取りだすと、赤魔の帽子をぬがせて、頭から両耳へかけた。

「よし、本郷を警戒しろ！　三人で行け！」

「ハッ」

丁殿九と、ふたりのシナ人が、廊下を走ってゆきかけると、赤魔はまた命令した。

「舌を動かすな！」

「…………」

赤魔の沈黙命令だ。三人とも唇をぬいつけられたように、グッとだまると、そのまま廊下を走っていった。一言も本郷と話すことを、禁じられたのだ。

潜望鏡へ両眼をあて、両手で度をあわしながら、両耳に受話器をかけてる赤魔、この深い地下室にあって、土の上の四人を、ありありと見、その声を、はっきりと聞きはじめた。

波の下にあって潜水艇が敵艦を見る潜望鏡、それを、ここに地上の枯れてる黒松の幹から、地下へ備えつけているのだ。聴音機もまた、太い黒松の幹の中へ、下からかくし備えている赤魔が、青白いほおをヒクヒクと動かした。（ウム、こいつは、たしかにクロック！）と見きわめたのだ。

「いらんというのじゃ、パンなどは」

と、クロック将軍が、前に立ってる若い蒙古人を、叱りつけるようにいう。

「でも、まあせっかく、ここまで買ってもらいにきたんですから、そういわずに、いくらでも買ってくださいよ」

と、蒙古人の方は、しきりに頭をさげて、大きな籠を、前へ出した。そばに、少年蒙古人と少年インド人が、互いにさぐるように顔を見あわせたまま、だまって立っている。
「買わんといったら、買わんのじゃ」
と、シナ語も上手なクロック将軍が、「おし売りは、……」と、きゅうに小声になると、「しかし、パン一個、これだけにするのか？」と、右手を突きだしてみせた。
その右手を見た蒙古人、ハッと胸を引いて、クロック将軍の顔を見つめた。
将軍の右手、親指と小指のさきをあわせて、中の三本を、前へのばしてる、それを、少年蒙古人も見ると、おどろきの眼を見はった。
赤魔は潜望鏡の中に、まばたきもせず眺めてる。（クロックが三本指の信号は、なにか？）
ああ三本の指が示す信号！
これこそ、神のごとき鉄人先生（てつじんせんせい）が、皆のために、同志の信号として、きめられたものだ。——正義、仁愛、武侠、この三つが、日本人の大精神である。これを、右手の三本の指で示しあうものが、日本をまもる興安嶺の同志であると、前に皆が、秘密信号として教えられた。
武侠嶺へ、雲遠き南洋の巌窟城（がんくつじょう）から、流星号を夜の空に飛ばせてきた本郷義昭と、その部下のものたちも、天佑谷の鉄人先生から、この正義、仁愛、武侠の同志信号を、教えられてるはずだ。流星号の皆が住んでいる嶺（みね）を、「武侠嶺」と名をつけたのも、そのためではないか！　と、これを、すぐに気づいた高村中尉は、目の前に、その信号を出して見せた西洋人の顔を、ジッと

ながめると、
「おお、あなたは、クロック将軍でありますか？」
と、思いあたってたずねると、こちらはクロック中将、伸ばした右手で高村中尉の肩を、ハタハタとたたきながら、ゆうゆうと笑いつつ、
「そうじゃよ、きみは天佑谷の人じゃろう」
「ハ、どうしておわかりになりましたか」
「なに、クロックはめくらじゃない。きみの顔つき、その少年の目の光、姿は蒙古人じゃが、どうしても日本人じゃからの」
宣彦少年は、いよいよおどろいた。（ああこれが、名まえを聞いてたクロック将軍か！）と、目を見はると、
「ウム、よい少年じゃの。名はなんというのかな？」
と、クロック将軍にたずねられた。
「藤山宣彦といいます」
「フジヤマ？　日本に神聖な富士山かの。ここにおるのは、インドの王子ルイカールじゃ。仲よくしてくれ！　よい友だちになるじゃろう？」
宣彦少年とルイカールは、また顔を見あわせた。ふたりとも同時に手を出すと、かたくかたく握りしめた。いままで両方からあやしみあってた。それが、きゅうにわかってみると、生死をち

から友だち同志ではないか！　ふたりは握手したまま、心から笑いはじめた。うれしいのだ。少年同志の血がわく。いまからもう親友だ。正義、仁愛、武侠の精神を、心にみがく親友だ。ルイカールがいいだした。日本語だ。本郷さんに習ったのだ。

「きみ、鉄人先生のところに、いるのか」

「ウン、きみのことをね、僕は、本郷さんから、聞いたことがあるぜ」

「そうか。巌窟城の話だろう？」

「ああ、きみたちが乗ってきた流星号は、武侠嶺にあるんか」

「ある！」「見たいなあ！」

「僕は、鉄人先生を見たい！」

はじめて会ったふたりだが、話はつきない。ぴったりと心の底から結びついてしまった。

このふたりを見て、高村中尉も愉快だ。

「閣下！　武侠嶺の複葉偵察機（ふくようていさつき）による閣下の通信筒を、鉄人先生の前へとどけたのは、わたくしであります。日本陸軍騎兵中尉、高村俊雄、おおいに閣下と力をあわせて働きたいと思います」

と、クロック将軍にいうと、

「いかにも天佑谷と武侠嶺とは、心も一つからだも同じものじゃ。きみたちも本郷をさがしにきたのか」

「そうであります！」

高村中尉は、凛として答えた。その顔は不屈、その目はたくましく、姿はパン売りの蒙古人だが、いかにも日本人だ。

## 怪人、地下に聞けり

クロック将軍は、凛たる高村中尉を見て、うなずきながらたずねた。
「わたしとルイカールは、自動車のあとをあやしんで、ここまできた。きみたちも、そうかの？」
「いや、閣下！　熱河軍司令部の衛兵長、林という少尉が、じつはわが日本人であります」
「おお、そうか」
と、さすがのクロック将軍も、おどろいて声を高くした。
ルイカールもまっ黒な目をかがやかして、そばに聞いてる、
「けさ、わたしたちは、あの司令部へ、パンを売りにゆきまして、林衛兵長に会いました」
「そして、本郷のゆくえは？」
「ゆうべおそく、われらの本郷氏は蒙古人運転手に変装して、熱河軍司令部から赤魔バザロフの

緑色自動車を運転し、正門の前の路を、北にでたという、それきり、本郷氏も赤魔も、ゆくえ不明であります」

その赤魔バザロフ、今しも潜望鏡（ペリスコープ）と聴音機（ちょうおんき）により、深い地下室にあって、地上の四人の姿を見きわめ、興安嶺にある鉄人先生をはじめ日本人の秘密を、また、武侠嶺と流星号のあることを、林衛兵長が日本人であることまで、皆、残らず聞きとっているのだ。

ドイツの軍事間諜団「七人党」の首領であったクロック中将は、森の外を、じっと見つめながら高村中尉にいう。

「バザロフが乗り、本郷が運転したという自動車、その輪のあとを、われわれは路に見てきたのだ。高村中尉、輪のあとが、森の外に消えとるのは、この森があやしいぞ」

高村中尉は、うなずいていう。

「そうです。この黒松の森に、私も目をつけてきました」

ルイカールが、さけびだした。

「この森の松には、力がない」

つづいて、宣彦少年もさけんだ。

「松が六本、枯れている」

見ると、まわりの松の葉が皆、ちぢまっていて、青い色にも力がなく、しかも、方々に枯れてる幹をかぞえると、六本もある、その枯れてる幹が、皆太いのだ。

「危険だ！　外へ出ろ」
クロック中将が、そういうと、森の外へ走り出していった。
（なにが危険なのか？）
高村中尉も、宣彦少年もルイカールも、「危険」と聞いて、あたりを見ながら、森の外へ走り出た。そこに、止まってる幌馬車の前へ、四人が集まった。すると、クロック中将が、声をひそめていう、
「気をつけろ、地下室じゃ」
これを聞いて、三人は森の土を見つめた。高村中尉がいう、
「わかりました。地下室は、よほど大きい。松にみな力がないのは、地下室のためだ」
「六本枯れてるのはなぜですか」
と、ルイカールがたずねる。
「あの松には、六本のうちに、なにか地下室から仕掛けてあるのじゃ。おそらく聴音機（ちょうおんき）か、潜望鏡（ペリスコープ）か、あるいは爆発の仕掛けか」
クロック中将が、そういううちに、四人は、するどく方々を見まわした。
（地下室の入り口は、どこか？）
土の色は、どこも変わっていない。
しかし、自動車の輪のあとが、森の外の土の上に、スッと消えてる、ここから、どこへ行った

のか？　不思議だ。地下室へ入った、とすると、輪のあとの消えてる所から、地の下へ入ったものに、ちがいない。入るなにかの仕掛けが、ここにあるのだ。宣彦少年が、きゅうにさけびだした。

「草があやしい！」

「僕もそう思う」

同時にルイカールもさけぶと、高さ五六センチメートルの草むらがつづいてる方へ、ふたりとも走っていった。この時、

「ふせッ！」

高村中尉が号令した。自分も伏せた。クロック中将も、足もとへ身を伏せた。それよりも早く、

ヒューッ……。

頭の真上を、かすめていった弾丸の音、つづいて二発。

ヒューッ、ヒューッ……。

また、弾丸が飛んだ。射撃の音は聞こえず、弾丸だけが森の中から、しきりに飛んでくる、宣彦少年もルイカールも、草むらに身を伏せたまま、頭だけあげて、森の中を見つめた。――森の奥に、枯れ松が二本ならんでいる、その方向から、弾丸がヒュッヒュッと飛んでくるのだ。

## 十四のスイッチあり

地下室の広い廊下のすみに、赤魔バザロフは、潜望鏡に両眼をあてながら、小声で命令していた。

「左下だ。約六メートル！」

赤魔の横の方に、細い鉄のはしごを壁のすみへかけ、上にのぼっているのは、ユダヤ人の丁殿九だ。右手を横へ出し、壁についている小さなハンドルを、グッと左へまわした。

ハンドルのまわりには、目盛りが黒くついてる、地の上の枯れ松の幹に、発射口があり、無声自動銃が、幹の割れ目から発射する。このねらいをきめるのが、丁殿九の握ってるハンドルだ。

ハンドルの右下についてるスイッチを、丁殿九は、いきなりおした。すると、スイッチの下に、今まで現れてた8の字がきゅうに変わった。今までに九発うったのだ。

「左すぎた。右へ！　約一メートル！」

赤魔が、するどく号令する。丁殿九は、ハンドルを右へまわした。スイッチをおす。下の数字が１０に変わった。

「クロックのやつ、フム、退却しおるか。丁殿九、急射(きゅうしゃ)！」

丁殿九は、すごい顔になると、スイッチをおしつづけた。下の数字が、37に変わった。三十七発うった。

「総司令、まだですか」

「馬車に命中した。今少しだ」

「地雷のところへ、行きませんか」

「やるのだ。四人一どきに！」

丁殿九は、右手を高くあげた。そこの壁に赤いスイッチがまるく見える、地雷を電気で爆発させるスイッチだ。しかも、それが左から右へ十四ならんでる、十四個の地雷が、森のまわりにうずめてあるのだ。

「丁殿九、第六爆発！」

赤魔の号令に、丁殿九は、左から六つ目のスイッチを、グッとおした。同時に電気が通じた。すごいひびきが、上から地下室の全体をふるわせた。

（地雷爆発！）と、本郷義昭は、ひびきを聞きながら、鉄格子の中に、腕をくんで立っていた。

鉄格子の外に、ふたりのシナ人が、近くならんで、本郷を見つめてる、ふたりとも右手に無声(むせい)拳銃(けんじゅう)をにぎり、今のひびきに顔いろをかえたまま立ちすくんだ。丁殿九の声が、廊下に聞こえる。

「総司令、見えませんか」
「……土煙だ！」
赤魔の声が、ゆうゆうと聞こえた。
すごい爆発のひびきと同時に、宣彦とルイカールの横から、ドッと黒く土煙が上がった。空気がふるえて、ふたりともおし倒された。
（地雷だ！）
ふたりとも、おもわず草をつかんだ。爆発した土煙に、全身をうずめられた。宣彦は右のほおを、飛んできたかたい土に破られて、がんと棒でなぐられたような気がした。流れる血を右手でおさえながら、左にいるルイカールを見た。黒い土煙の底に、ルイカールは草をつかんだまま、顔をあげてる。
「だいじょうぶか」
と、宣彦が、おちついてたずねると、
「なにを！　これでわかった。本郷さんは、地下室に捕らえられてるぞ」
と、ルイカールは、まっ黒な顔をかがやかしていう。
「そうだ！」
宣彦は、右ほおの傷をおさえたまま、草の中に立ちあがった。
（高村さんとクロック将軍は、どうしたか？）

右の方を見ると、風に散ってゆく土煙の中に、幌馬車が倒れてる。そこに馬も倒れ、シナ人馭者は見えず、馬車の向こうに、高村中尉とクロック将軍が、土の上に伏せたまま身動きもせず、じっと森の中を見つめてる。宣彦は、ルイカールにいった。

「馬車のところへ行こう。爆発したあとは安全だ」

と、走り出した時、宣彦は、草むらの中につまづいた。バッタリと前へたおれながら、左手に柔道の早わざ、土の上を打つと、また立ちあがった。足がなにかかたいものに、つまづいたのだ。

(なにか?)宣彦は、草むらの中を見た。

草の中に、白く丸い石が見える。そこに、ルイカールが走ってきた。

「おお、宣彦くん、傷をしたか、待ちたまえ」

ルイカールは、服のかくしから、ハンケチを取りだした。

「ありがとう!」

宣彦は、ハンケチを受けとると、ほおに流れてる血と傷を、シッカリおさえながら、左手で草の中を指さした。

「危険なものがある。変な石だ!」

蒙古の砂原に、石のあることは珍しい。しかも、この草むらに、白く丸い石が、かくれているのだ。それを、ルイカールも見た。うつむくと、その石を、上からさわってみた。

「やはり、石だ。が、動かないぞ、宣彦くん！」
「動かない」
宣彦も、その石の前へ、うつむいて見ると、おどろいていった。
「石じゃない。白い海綿を、かためたものらしいぞ」
（これがまた爆発するのではないか？）宣彦もルイカールも、さすがに顔いろをかえた。
（爆発するか？）
そう思った宣彦は、石みたいな丸い物を、いきなり、つかんでみた。が、地の下から出てるらしく、ビクとも動かない。ルイカールが、そばからいう。
「おしてみたまえ、上から」
「動かないぞ」
と、宣彦は、それを左手でまわしてみた。
すると、グルリと回った。アッとふたりが思うまもなく、立ってる地面が、グーンと下へ草といっしょに、下がりはじめた。剛胆なふたりは、顔を見あわした。
（ここが地下室の入り口だ！）
（警戒せよ、宣彦！）
と、ふたりの目と目がいう。――地面の昇降機だ。グングン下がってゆく。広さ四メートル四方の地面が、宣彦とルイカールを乗せたまま、音もなく下がってゆく。見ると四方は地下のコン

クリートの壁だ。

みるみる下がっていったふたりは、四方のコンクリートの壁が、鉄の格子に変わったのを見た。格子の外が暗い。なお下がる。スッと止まった。一方からあかりがさした。そこに、蒙古服とシナ服の男が五人、格子の外から、中のふたりを見すえると、

「ざまを見ろ？　自分で網にかかりやがった」

と、ふとってる大きなシナ服の男が、シナ語でどなった。

ルイカールは腕をくみ、宣彦は格子の外へ、シナ語でいった。

「開罷（カイバ）！」——開けろ！

「だまれ、ここで死ぬんだ」

ふとってる男は、そういうと、五人ともすごい目になって笑った。

（殺すか？　本郷さんが、きっとこの地下室にいるんだ）

ふたりは同時に、そう思った。この時、五人の向こうの方に、靴音が聞こえてきた。広い廊下だ。遠くに天井の電燈が見える。ツカツカと歩いてくる男、顔は西洋人だ。が、頭に白いきれをまき、青いシナ服を着ている。

「どけッ！」

その男がいうと、前の五人が両側へわかれた。格子の外へ来たシナ服の西洋人が、宣彦とルイカールを見ると、

「アッ、こいつらか。クロックと高村というやつを、ここへ下ろしたいと、総司令は考えていられたのだ」

と、唇をまげて、いまいましそうにいう。

（総司令――赤魔のことだ！）と、宣彦もルイカールも、すぐ気がついた。

赤魔バザロフは、枯れ松の幹から無声銃を射たせて、クロック中将と高村中尉を、この地面昇降機に乗せるつもりだったらしい。そして、ふたりを生けどる計略だった。それが今、宣彦とルイカールの二少年が、代わりに下がってきた。シナ服の西洋人はいまいましそうに、五人の男にいう、

「この二人のやつを、引きずり出して、第十七号と第六十三号へ、厳重に入れておけ」

地の上には、幌馬車が横に倒れ、馭者は左腕に負傷したまま、どこかへ逃げてしまった。黒い土煙の中に、クロック中将と高村中尉は、しばらく身をふせていた。

走ってきかけた宣彦とルイカールが、草むらの中に、うつむいたと思うと、きゅうに見えなくなった。高村中尉は、クロック中将にささやいた。

「閣下！　少年がふたりとも見えなくなりましたぞ」

「なに！　行ってみよう」

森の中から飛んでくる弾丸が、ふたりの右の方へヒュッヒュッとおちる。二人は左の方へ、立ち上がると走りだした。草むらの中へ入ると、

「おお！　……」
「これじゃ」
ふたりは、足もとの前を見て、同時にさけんだ。見よ、四メートル四方ほどの大きな正方形の穴が、下へ深く開いてる。高村中尉は、歯ぎしりしていった。
「閣下、やられました！」
「昇降機(エレベーター)じゃ」
と、クロック中将も、残念のあまり足ぶみしていう。
下を見ると、コンクリートの壁が垂直(すいちょく)に、四方とも崖のように下へのびてる。飛びこめば、自分たちも捕らわれる。ふたりは身をふせたまま、ジリジリと後へ下がりだした。地雷の爆発したあとがある。その大きな穴へ、ふたりは入った。ここだけが安全だ。どこにまだ地面の昇降機がかくれてるか、草の中ではわからないのだ。
「通信しましょう！　本郷氏も赤魔も、この地下室の中に、必ずいます。ふたりの少年も、今こそ危険です！」
高村中尉が、そういうと、クロック中将は、穴のはしから、森の方を見つめながら、おちついてたずねた。
「鉄人閣下へ、通信するのか」
「そうです」

と、高村中尉は、まだ持ってるパンの籠を、足もとへおいた。

「高村くん、これで本郷のゆくえもわかった。武侠嶺へ通信してくれぬか」

「しましょう！」

高村中尉は、籠をさかさにした。残ってるパンが、バラバラと皆落ちた。籠の底が、二重になっている。その底へ、すばやく右手を入れた高村中尉、すみの方にあるバネをおすと、カチリと音がして、籠の底が外へ開いた。すると、高村中尉は、開いた底の下から、片手で小さな機械をつかみ出した。無線電信機だ。それを見たクロック中将が、白い眉を動かしていう、

「おお、高村くん、電磁石の無線機じゃの」

「そうです。天佑谷へ、十分に達します」

「ウム、波長は？」

「閣下だけに申しあげましょう、極秘です。×××メートルです」

高村中尉は、そういいながら、電磁石無線電信機を、手早く組み立てた。爆発した地雷の穴が、今は敵の目から、かくれて、安全な通信所になった。クロック中将がいう、

「わしが森を監視しとる。鉄人閣下へ、くわしく報告するがよい」

高村中尉は、穴の土へ電線と鉄板を、深くさしこんだ。短い一メートルほどのアンテナを立てると、早くも発信のボタンを打ちはじめた。

（――●――●●●●――●天佑谷へ告グ、高村中尉ヨリ。タダ今、熱河ノ東々北、約六キロメート

ルノ黒松森林ニ、赤魔バザロフヲ監視チュウナリ。武侠嶺ヨリ来タレルドイツクロック中将ト協力シ、森林ノ地下室ヨリ、本郷義昭ヲ救イ、赤魔ノ一党ヲ一挙ニ捕ラエントス。不幸ニシテ、宣彦少年ト武侠嶺ノインド少年王子ハ、今ヤ敵手ニ落チタリ。ワレラハ二名、至急、飛行機ノ救援ヲ求ム)。

## 敵にも新機械あり

地下室に、赤魔バザロフは、潜望鏡に両眼をまだあてていた。
「二秒、丁殿九、貴様の、地雷スイッチをおすのが、二秒、おくれたぞ！」
そういう赤魔の声に、はしごの上の丁殿九はふるえた。そこに、廊下を、ひとりが走ってきた。丁殿九と同じすがたのシナ服を着てるユダヤ人だ。バザロフのそばへきていう、
「総司令！　敵の少年がふたり、昇降機に乗って下りてきました」
「わかっている」
「ハ、第十七号と第六十三号の死刑室へ、別々に入れておきました」
「よし！　監視しておけ」

「ハッ」
「やつらには、白状させることがあるのだ。厳重にしろ」
「ふたりずつ、監視につけてあります」
「よしっ利徳三(りとくさん)！」
「ハ？」
「本郷に気をつけろ！　行って見てこい」
「ハッ」
利徳三と変名してるユダヤ人は、本郷がとらわれてる廊下の方へ、ヒタヒタと走っていった。
はしごの上から、丁殿九がたずねる、
「総司令、やつらはなにをしていますか」
「二秒、貴様がおくれたばかりに、やつらは穴へかくれた。かこむのだ。熱河軍へ知らせろ、一個中隊を至急分遣(ぶんけん)せよと」
「ハッ」
丁殿九は、はしごを飛びおりた。廊下を走ってゆくと、右へまがった。そこにある階段をあがった。右側の扉を開けた。無線電信機室だ。丁殿九が、一歩入ると、すみのテーブルの上から、いきなり、呼び鈴がなりはじめた。丁殿九は立ちどまった。
（どこからか、電波を発している！）

どんな波長の電波でも受けてなる呼び鈴だ。丁殿九は、テーブルのそばへ行くと、そこにある受電検波器(じゅでんけんぱき)を見つめた。どこから発信してるか？　発信所の方向と距離が、この受電検波器ですぐわかる。丁殿九は、見てるうちにさけびだした。

「アーッ、近い！　すぐそこだ」

大興安嶺の天佑谷——

谷より谷へ森が茂り、森の深くに泉あり、水あふれて上は白く氷になってる。が、氷の下には、いつも水が流れて谷へおちてゆく。深い森の奥は、地の下が、あたたかいのだ。木の根が、こおらないからだろう。

泉の水が、下は氷にならずに音もなく流れてゆく。この水こそ、天佑谷に住んでいる日本人にとって、みんなの命の水だ。鉄人先生も、この水を毎日、谷から汲んできたまま飲まれる。いまも深い崖の奥に、神のごとき鉄人先生がただひとり、机にむかってアジアの大地図をひろげ、ジッとながめながら、コップにいっぱいの美しい水を、ゆったりと飲んでいられる。

静かだ。崖を切りひらいた大きなへやの中だ。天井も壁も黒い岩の崖だ。そこに張りまわしてある電線から、一つの電燈がさがっていて、鉄人先生の雪のような白髪と白髯を、神々しく照らしている。水を飲みながら鉄人先生は、まばたきもせず地図を見ていられる。いかにも静かだ。シーンとしてる。

この静けさの中に、遠くから足音が聞こえてきた。トンネルのような崖の路を下りてくる。ヒ

タヒタとひびいて、だんだんに近づいてくる。それが、あわててる足音だ。いまにも走りだしそうに、いそいで鉄人先生のへやへ入ってきた。立ちどまると、

「申しあげます。高村中尉から至急報告！」

毛皮の蒙古服をきてる日本人だ。靴も毛皮の長いのをはき、スックと突っ立ったまま、右手に一枚の白紙をさげてる。身のたけ二メートルもあろうか、りっぱな体格だ。しかも二十五、六の凛然たる青年だ。

鉄人先生は、地図を見つづけて、ふりむきもせず言われた。

「そうか。高村が、本郷を発見したというのではないかの」

「ハッ、そうであります。熱河の東々北において、……読みます」

青年は、右手の白紙に書いてきた至急電文を、朗々と読みだした。——読みおわると、ふといい眉をあげていった。

「この赤魔の一党を捕えるため、いまから熱河へ、ただちに出発を、どうかわたくしに……国司に、お命じ下さい！　お願いいたします」

鉄人先生は、しかし、水を飲みながら静かに言われた。

「本郷は、すてておくのがいいのじゃ」

「ハッ？」

と、国司青年は自分の耳をうたがうようにたずねた。すると、





「宣彦も、そのインドの少年王子も、本郷をさがしに行って、かえってじゃまになっておるようじゃの」

「しかし、敵は、おそるべき赤魔であります。いま捕らえねば彼らのシオン同盟が、なにをするかもしれません」

「本郷が、捕らえるじゃろう」

「……………」

国司青年は、だまった。

鉄人先生は、見よ、本郷義昭を、このように信じていられる。救いにゆくのは、かえってじゃまにゆくようなものだと言われる。

（しかし、おれは行きたい！　どうしても行きたいのだ、この天佑谷の最新式単葉機を操縦して、熱河へ今から！）と、国司青年は眉をあげたまま、鉄人先生の前を動かずに立っていた。

鉄人先生の前に、国司青年が動かずに立ってる時、大興安嶺の東南にわかれてる一つの山脈――武侠嶺の奥に、同じく高村中尉の無線電信を受けたものがある。――たれか？『亜細亜の曙』を読んだ人は知ってるだろう。遠く〇国の巌窟城から本郷義昭が、自発爆進の硬式飛行船「流星号」に乗り、アジアの曙の空へ、はるかに南から飛んできたのだ。流星号のゆくえはどこだったか？――大興安嶺へ！　本郷は、流星号の司令室にあって、満洲国の独立をラジオの受信に聞いた。そのとき、剣侠児の彼はさけんだ。

「世界の平和は、中華民国より破れつつある」
中華民国と満洲国との開戦を、本郷は飛びゆく流星号の大空から、すでに知っていた。両国の開戦地は、どこか？　熱河省の地だ！　と、これを早くも知った本郷義昭、雄大な流星号の行くさきを、熱河省の西北にそびえてる大興安嶺ときめた。「アジアの秘密山脈」といわれる大興安嶺、それが東南にわかれてる嶺の奥へ、自発爆進の流星号が、夜のうちにおりていった。その嶺から本郷は、北の天佑谷にある鉄人先生へ、すぐにラジオを発信した。自分の来たことを知らせたのだ。同時に、自分たちの新たに住む嶺を、「武侠嶺」と名をつけた。武と侠気の精神こそ本郷自身の生命だ。彼は武侠嶺の谷へ流星号を着陸させた、それから後の本郷は、どうしたか？　この「大東の鉄人」のはじめにあるとおり、北満洲のハルビンにとつぜんと現れた。流星号に積んできた無声飛行機に乗っていったのだ。そして、一度は天佑谷に鉄人先生を訪ね、いまや赤魔バザロフのために、熱河省の平原にある地下室へとらえられた。

本郷の行くさきは知れず、武侠嶺に残ってるものは、クロック中将とルイカールが、まず熱河へ本郷をさがしに出た。そこに、いま、不意に無線電信が、武侠嶺の奥へつたわってきたのだ。ひろい谷底の平地に、堂々と横たわってる流星号、その後部司令室に、木村、入江、岩崎をはじめ、服部と中島、日本人は五人だ。それに、○国人のホルムス大佐とスチムソン少佐、黒人のベンガル、その他のインド人、シナ人、南洋の現地人まで、みんなが本郷の行くさきを心配している。テーブルの上にある無線受電機が、細長い紙の上に音もなく受信する。暗号だ。木村が目

をかがやかして、暗号を読みながら、さけびだした。
「オオ、本郷さんが、……ルイカールも捕らえられたぞ。ふたりが同じ地下室に……ああッ、敵は赤魔のシオン同盟だ」
皆が顔いろをかえた。服部がきゅうにたずねた。
「発信人はだれだッ？」
「待て。……『武侠嶺ニ告グ、来タレ、ワレラハ本郷ヲ助ケ、ルイカールヲ救イ、赤魔トトモニ敵シオン同盟ノ一党ヲ、ココニ滅ボサントス。クロック』発信人はクロック中将だ。行こう！」
無線受電機が動かなくなった。受信を終わったのだ。木村は、スックと立ちあがった。
「来い、岩崎！」
「行くとも！」
岩崎も立ちあがった。
本郷さんの危機だ。だれも皆が行きたい。皆が立ちあがった。ホルムス大佐も、スチムソン少佐も、今は本郷義昭その人の武侠精神に、すっかり心から服従している。ふたりは顔を見あわすと、同時に言いだした。
「行こう！　自進爆発の小銃を、スチムソン、射て！」
「ホルムス！　無声飛行機を操縦せよ！」
「わたしも！」と、黒人ベルガンもいいだした。

赤魔の地下室に、丁殿九が、飛ぶように階段をおりると、廊下を走ってきた。
「総司令！」
総司令の赤魔バザロフは、潜望鏡から眼をはなして、死刑鉄室――鉄格子のはまってるへやの方へ、ゆうゆうと歩きだしていた。丁殿九の呼ぶ声を聞くと、だまってふりかえった。丁殿九は、あえぎながら、持ってきた黄色い受信の紙を、前にさしだしていう。
「いま、このとおり、外のやつが、無線電信を打ちました。たしかに、外のふたりです。すぐ近くだと、受電検波器でわかりました」
「フム、……」
赤魔バザロフは、その受信の紙を、受けとって見た。
暗号だ。線と点が長くつづき、また、きれぎれにはなれてる。
「オイ、丁殿九！」
「えッ？」
「きさま、熱河軍へ知らせたか」
「打ちました。外のやつのを受信しながら、一方の発信機で、たしかに打ちました。『一個中隊、至急に送れ』と。波長が、外のやつのとちがってますから、だいじょうぶです」
「返信はきたか」

「いや、返信を見てるよりも、この外のやつのを、早く総司令に知らせようと思って。なにを打ちやがッたのか、総司令、やつらの暗号をすぐとけないですか」
「あわてるな。……利徳三！」
「おお！」
おなじユダヤ人の利徳三が、閣下の奥から走ってきた。
「本郷は、どうしてるか」
と、赤魔がささやくと、
「やつ、腕をくんで立ってますぜ」
と、利徳三は、恐ろしそうに目を光らせた。
「フム、ふたり、監視してるのだろうな、十分に」
「ですが、本郷のやつ、笑ってやがるんで、……」
「なに、いまにやつを泣かすのだ。利徳三、きさまは外のやつを監視しろ、丁殿九、発射機へのぼれ。外のふたりが穴を出たら、すぐ射て、逃がすな！」
小声で命令しながら、赤魔は廊下を音もなく歩いてゆくと、右の方へまがった。どこへ行くのか？
利徳三は潜望鏡の前へ行くと、両眼をあてた。丁殿九は鉄の梯子をのぼった。無声自動銃のハンドルへ、手をかけると、すぐたずねた。

「徳三、おるか？」
「ウム、……ふたりとも、顔を出してやがる。こいつが、クロックか。オイ、ひとりは蒙古人じゃねえか」
利徳三は、潜望鏡のハンドルを、両手でさげた。
「ちがうぞ。ひとりは日本のやつだ。射つか？」
と、丁殿九は梯子の上から射ちたがった。

## 命に大小があるか？

宣彦少年は、鉄格子の中に、右のほおの傷を手でおさえたまま、するどく耳をすましていた。
（本郷さんは、どの辺にいられるか？）
これを、なによりも知りたいのだ。そこに、鉄格子の前の廊下へ、スッと黒い影がさした。と、思うと、音もなく出てきたひとり……白人だ。ジロリと宣彦を見た。青い目の光が、ゾッとするほどつめたく、蛇のような感じがする。
（こいつが、赤魔だな！）と、宣彦は、鉄格子のすぐ前へ、グッと歩いて出た。

すると、赤魔が、英語で言いだした。
「どうかね、ここの気もちは？　きさま、英語がわかるのだろうな、ノブヒコ！」
赤魔は、宣彦の名を知っていた。枯れ松の聴音器で聞いたのだ。
「きさまはバザロフだろう」
と、宣彦は、天佑谷で教わってる英語を使って、言いかえした。
蛇のような赤魔バザロフの眼が、宣彦の顔を鉄格子の中に、ジーッと見つめると、持ってる黄色い紙を、前にひろげて、宣彦の顔の下へさしだした。
（なにか？）宣彦は、それを見た。
無線電信の暗号だ。——●—●●●—●天佑谷を呼びだす注意暗号が、初めに打たれてる。宣彦は見ると、おもわず顔いろを動かした。
（高村さんが打ったな！）
と、動いた宣彦の顔いろを、赤魔バザロフが前から見つめてる。ハッと宣彦は心をしずめた。
赤魔が言いだした。
「よし！　知ってるな。言え！　この電文に、きさまの小さな命がかかっているのだ。この暗号をとけ！」
宣彦は、電文を読みながら、顔いろを動かさずに答えた。
「バザロフ、人間の命に、おおきいちいさいがあるか」

「フム、暗号をとけ！　きさまの死か、とくか？　いまだ！」
すごい殺気が、赤魔の声にあふれた。つめたく腹にしみいるような声だ。
「とこう、バザロフ！」
と、宣彦は一秒の間に考えた。
「よし、最初は？」
「ここにユダヤ人の赤魔バザロフあり！」
「なに？」
「熱河の東々北、約六キロメートルの黒松森林に、……」
「ウム、次ッ！」
「巨大なる地下室を有し、シオン同盟の一味を指揮す。これを全滅すべく、……」
「…………」
赤魔は、まばたきもせず、宣彦の顔いろを見つめた。
「われらは協力し、世界の平和と正義のため、ただちに日本空軍の威力をもって、赤魔の極東シオン同盟に、天誅（てんちゅう）を加えんとす」
と、宣彦は暗号電文を、大声で読みかえた。
（本郷さんもルイカールも聞け！　いまに天佑谷の飛行機が救いにくるのだ）
と、宣彦が読む大声が、うす暗い廊下にひびき、それと同時に、向こうからユダヤ人の声が、

いきなり聞こえてきた。
「総司令！　南から戦車が、二台……、三台だ。あッ、五色旗だ。満洲軍らしいぞ、四台です」
利徳三が潜望鏡(ペリスコープ)を見ながら、おどろいて報告したのだ。
地雷が爆発した穴の中に、高村中尉とクロック中将は、両方へわかれたまま、黒松の森を、そして近くのまわりを、すこしも気をゆるめず見わたしていた。
（なにか変わったことが起きるか？）
じつに危険だ。敵は地下室にあり、しかも、無声銃を森の枯れ松より射ち、近くに地雷を爆発させる。高村中尉は、電磁石(でんじしゃく)の小形無線発信機をもってきた。が、受信機は、宣彦少年がパン籠に入れたまま、敵の手へ落ちたのだ。中尉の発信機で天佑谷と武俠嶺へ、急を知らせた。
（両方から返信を、打ってはいないか？）
が、受信機なしに、それがわからないのだ。高村中尉とクロック中将は、前の森と近くを見まわすあいだに、北と西の空を、いくどもふりかえって仰いだ。
（飛行機が、大興安嶺の空に、武俠嶺の空に、あらわれないか？）
今、一秒も早くと、これを待つ。
（本郷と宣彦とルイカール、三人に異状なきか？）
これを、刻々(こくこく)に心配する地上の二人、一分すぎればそれだけ地下の三人に、危害がせまってると思わずにいられない。この地上の二人だけで、地下の敵をおそう。これこそ犬死にに終わるの

だ。
（来たれ、救援の飛行機！）
来たれば、空から地下室の爆発を、敵に信号して、赤魔とその部下を外へ出し、一挙にとらえるのだ。その時、本郷と宣彦とルイカールのひとりでも生きていれば、ただちに救う。赤魔を捕らえ味方を救う。勝つのだ。
（来たれ、早く！　救援のわが飛行機）
これを待ちに待って空を仰ぐ、高村中尉とクロック中将、またふりかえって森の方を、見ようとすると、
「閣下、のぼってきましたぞ」
心は急ぎに急ぎながら、高村中尉は、おちついて言った。
「そうじゃの。わしらにも乗れというのか、バザロフのやつ」
と、クロック中将も、横の草むらをながめた。
宣彦とルイカールを捕えた地面昇降機（じめんしょうこうき）が、草と土を厚く乗せたまま、音もなく下からあがってきた……あたりの草むらと同じ高さまで昇ると、スーッと元のように止まった。まるで近くと同じ草原になり、白い石に見える電気スイッチが、まるく草の中にかくれてる。クロック中将が、それを見て、つぶやいた。
「赤魔のやつ、さすがじゃの」

そう言った時、南の方に遠く、ムラムラと黄色くあがりだした砂煙を、クロック中将は見た。
「おおなにかの？　騎兵の行進ではないか」
「いや、戦車隊です、あの砂煙の低いあがり方は」
「双眼鏡はないか」
「持ってきませんでした。が、……閣下、おお来ました！　二機、武侠嶺の方向から、あれが、そうですぞ！」
と、さすがの高村中尉も、きゅうに早口でさけびだした。
来たのだ。西の青空に二機！　翼をならべて、見よ、すごい速度だ。しかも、爆音ちいさく、前の一機は無声らしい、二機そろって一直線に飛んでくる……。
（よし！）と、高村中尉は、無線発信機のアンテナに、自分の帯を巻きつけると、穴の中から高くふりまわした。
すると、この時、いんいんたる砲声が、向こうの戦車隊の方から聞こえだした。
（しまッた！　熱河軍の戦車隊が？　高射砲を射ちだしたか？）
と、高村中尉もクロック中将も、歯ぎしりして見ると、さらに西南の方熱河の方から、別の戦車隊が横に一列にあらわれ、これと前の戦車隊とが、両方から前進しつつはげしく射ちだしたのだ。
「や、閣下、これは、満洲軍と熱河軍の戦闘です」

「ウム？　いや、日本軍も加わっておらんか」
クロック中将がからだをあげた。同時に、ヒュッヒュッと森の中から、たちまち小銃弾をうちだした。そこに、早くも救援（きゅうえん）の二機が、高村中尉のふりまわしてる信号を見て、すぐ頭の上に近づいてきた。

請救（チンチュー）ッ――――！

「総司令！　熱河から呼んだ一個中隊が、戦車に乗ってきました。それと満洲軍の戦車とが、開戦です。飛行機が二機……なんだあ？　あッ、下で信号をはじめたぞ、畜生、射てッ、殿九！　出たぞひとりが！」
利徳三（りとくさん）が潜望鏡（ペリスコープ）を、動かしつつさけぶ。この時、本郷が捕らわれてる鉄室の方にも、必死のさけび声が廊下をふるわせた。
「請救（チンチュー）ッ――――！」
助けてえッ！　と、シナ人のさけび声だ。
地ひびき、土に深くつたわって、地下室をふるわせる。その奥の死刑鉄室に、腕ぐみしたまま

の本郷義昭、ジーッと眉をあげた。
（東だな）
土につたわる地ひびきによって、本郷は、それを東の方向と知った。鉄の格子の外に、無声自動拳銃をつかんで、本郷を見つめてるシナ人ふたり、これも地ひびきに耳をすますと、
「地震（チチエン）！」
と、ひとりが顔いろをかえた。
地下室で地震（じしん）にあうのは、おそろしい。土がくずれて、うずめられたら、それきりだ。その地ひびきが、ゴウゴウと強く近づいてくる。
（戦車隊だな、このふるえ方は……）と、本郷は、まだ腕ぐみしている。
すると、地ひびきが西の方からも、すごく聞こえてきた。天井も廊下もふるえ、コンクリートのかたまりが、バラバラと落ちだした。壁がうすいからだ。（地震！）と思ったシナ人は、いよいよ顔いろをかえた。そこに、いんいんと砲声が地上にとどろき、青くなってるシナ人がおどろいてふたりとも天井の方を見る。このとき、サッと本郷が腕ぐみを、はずした。目にもとまらず声もなく、鉄格子の中から、外へ突きだした本郷の両腕、左はシナ人の手くびへ、右は一方のシナ人の胸わきへ、のびた早わざの一瞬に、
「ムッ……」
うめいた右の方のシナ人、胸の急所を突かれて、そりかえると両手で胸をおさえたまま、ドッ

と後ろへ倒れた。
「総司令！　熱河から呼んだ一個中隊が、戦車に乗ってきました。それと満洲軍の戦車が、開戦です。飛行機が二機……なんだ？　ああッ、下で信号をはじめたぞ、畜生、射てッ、殿九！　出たぞひとりが！」
廊下の方に、ユダヤ人のさけび声が、総司令の赤魔を呼び、「殿九」という味方に発射を命じる。開戦……飛行機……信号、このさけび声によって地上の様子を、ただちに知った本郷、左手につかんだシナ人を、グッと引きよせた。
「請救（チンチュー）ッ――！」
この時だ、シナ人が必死にさけんだのは。が、剣侠児本郷の金剛力につかまれた手くびは、いきなり肩までしびれて、さけぶと同時に、シナ人は無声自動拳銃をもぎとられた。その手くびをはなされて、ハッと立ちすくむ胸の前に、
「鍵（かぎ）を出せッ！」
ズシリと体じゅうにひびく本郷の声、拳銃の黒い口が、シナ人の左胸――心臓へ、ピタリと向けられてる。
「ああッ！」
シナ人は両手をあげた。そのまま動けないのだ。
「なんだッ？　なんだッ？」

廊下にさけびながら、バラバラと十五、六人の靴音が走ってくる。
「さわぐな！」
赤魔のおちついてる声が、廊下の遠くに聞こえた。
「総司令！　外の日本人が、ああッ、飛行機ニヨッテ汝ラノ地下室ヲ爆撃ス。アト三分、なにッ、汝ラ一同地上ニ出ヨ。……黒松の森へきて、やつ、さけんでる。どうしますかッ？　あと三分だぞ……」
潜望鏡（ペリスコープ）を動かし、聴音機（ちょうおんき）の受話器を耳にかけてる利徳三が、これも顔いろをかえて報告しだした。

## 赤魔、降参するか？

地雷が爆発した穴から、黒松の森の中へ、敵弾の下を進んできた高村騎兵中尉、
（この近くに敵の聴音機があるはず！）
と地の上に伏せると、最後の談判をはじめたのだ。
「飛行機によって汝らの地下室を爆撃す。あと三分、汝ら一同、地上に出よ！」

この高村中尉の凜々たる声も、戦車隊の砲声にまぎれ、飛行機の爆音に消されようとする。

(出てくるか！　赤魔バザロフ！)

と、クロック中将は、地雷爆発の穴のあとに立ち、地面昇降機の草の上を、まばたきもせず見つめた。頭の上に低く百二、三十メートル、二機の飛行機が黒松の森をめがけてスーッと下りてくると、また上がってゆく。一機は爆音ちいさく、一機は高く爆音をたてて上がった、と見るまに、その一機が森の外へまた機首を下げた。さかさに草の上に、スレスレに下りてくると、前へ浮いてフワリと草の上を走りながら、たちまち止まった。その操縦席から、横へ出てきたのは、飛行帽とめがねに顔をつつみ、身のたけ二メートルもあろう、堂々と高くりっぱな体格だ。クロック中将は眼をみはった。

(日本人か？)

それがだれであるか、高村中尉は一目でわかった。このように凜然たる体格は、天佑谷の国司青年だ。

「おお、国司、ここだ！」

と、高村中尉は森の中から、手をあげてみせた。

すると、国司青年が、ゆうゆうと森の方へ歩きだしてきた。あぶない！　枯れ松の幹から無声弾が飛んでくる。だが、弾の下を走りもせぬ国司青年、地上に伏せてる高村中尉の横へくると、

「やあ、本郷さんは、どうしました？」

と、立ちどまってきく。
「伏せッ、国司！　あと一、二分の勝敗だ」
「宣彦少年は、安全ですか」
「わからん。敵の聴音機があるのだ。なにも言うな！」
「ハハア、日本語はわからんでしょう」
「敵は赤魔だ。各国語を知っとる」
「生け捕りましょう！」
国司青年は飛行帽をぬいだ。このとき、南方の空に、すばらしい爆音が聞こえてきた。その方をふりむいた国司青年は、はるかにあおぐと、機体でわかる日本軍愛国機の飛行隊だ。堂々と翼をならべて、光を切るように飛んでくる。空の皇軍の威風は地上をおさえて、今しもこの原野へせまってきた。地上の戦車隊は両軍ともに激戦をまじえつつ、たがいに砲火を発して勝敗なお決せず、しかも、熱河軍の戦車隊はきゅうに西の方へ全速力で走りだした。日本軍の飛行機を見て恐れたのだ。熱河の首府——承徳の方へ逃げようとする。これを追う満洲軍の戦車隊、五色の国旗をひるがえして、ただちに承徳へ、このまま敵を追うて前進しはじめた。これを森の中から見て、国司青年は、大声にさけびだした。
「高村中尉殿！　承徳にはもう日本軍が北の方から入っとりましたぞ。僕が見てきたんだ。軍旗と日章旗が城壁に立っていた。あの熱河軍の戦車は、承徳へ着いたら降参するでしょう」

「待て！」
高村中尉は、空も見ず、戦車隊の追撃も見ず、クロック中将ばかりを見つめている。そのクロック中将が、いきなり右手をあげた。地面昇降機が草といっしょに、音もなく下りはじめたのだ。それが、わずかに五十センチほど下ると、また止まった。（乗れ！　下りてこい！）というように見える。
（さては、赤魔！　飛行機の爆撃を恐れて、今こそ降参するか？　だが、本郷は？　宣彦は？　ルイカールは？）と、敵の地面昇降機を見つめながら、クロック中将は右手を上下にふって、高村中尉に信号する。（昇降機が動きだしたぞ！）と、その信号だ。
赤魔は、宣彦少年を鉄格子の中に見つめながら、蛇のような目をして立っていた。そこに、利(り)徳三(とくさん)が、「後三分、汝ラ一同、地上ニ出ヨ」と、森の談判を報告し、靴音みだして、本郷がとらわれてる鉄室の方へ、バラバラと手下のものが走ってゆく。この地下室の危機だ！　赤魔の蛇のような目が、ジロリと動いた。
「バザロフ！　天佑谷へ来い！」
と、宣彦は鉄格子をたたいて言った。
今さきに「さわぐな」と、おちついて言った赤魔、すこしもさわがず、唇のはしをビリリとふるわせると、「ノブヒコ、ここで死ね！」と、つめたく吐きすてるように言ったきり、廊下を歩きだしていった。その靴音、さすがに赤魔だ。おちついてる。

（あと三分だ！　もう二分だ！）と、宣彦は鉄格子の中から体じゅうの神経を両耳へあつめた。
すると、
「請(チン)……請救(チンチュー)ッ——！」
と、またシナ人のさけび声が遠くの廊下から聞こえた。
（本郷さんだッ！）とおどりあがった宣彦は、また別の方から呼ぶ声を聞いた。日本語だ。
「宣う彦——、おるかア？」
ルイカールのすずしい声だ。宣彦は呼びかえした。
「だいじょうぶだア！　待ってろ、あと二分だ！　気をつけろ！」
地ひびきとさけび声と靴音に、ふるえさわいでる廊下から廊下へ、宣彦とルイカールの呼びあう日本語が朗々(ろうろう)とつたわっていった。
（今だ。三分すぎたぞ！）と、潜望鏡(ペリスコープ)をのぞいてるユダヤ人の利徳三、耳の受話器をはずすと、下へ投げすてて言った。
「殿九ッ、今だ、爆撃されるぞ！」
「総司令は！」
と梯子(はしご)の上から、さけびながら飛びおりた丁殿九、一方の廊下をみると、いきなり青くなった。
今さきに走っていった十五、六人のシナ人が、あわてて引きかえしてくる。その数七、八、あ

とはどうしたか？　と見る、まがりかどの廊下に、壁の前へスーッと立ち現れたただ一人——本郷だ！　こちらを一瞬に見つめる目の光……本郷の目に、ハッと丁殿九はうたれて立ちすくんだ。

「総……総司令！　本……本郷だ！」

さけぶ丁殿九に横の利徳三もアッとふりむくと、

「出たッ、本、……本郷だッ！」

おどろきさけぶ殿九と徳三の前へ、七、八人のシナ人が、ころげるように走ってきた。その向こうに、見よ、本郷が無声自動拳銃を右手に、しかもシナ人からうばいとった鉄室の鍵を口にくわえて、ジッと立ちどまってる、さっそうとして日東の剣俠児、八方へ全身の気をくばった。

（赤魔は、どこに？）

手下の敵は見るにたらず、総司令の赤魔を捕えるのだ。このとき、遠くから呼ぶ声がつたわってきた。日本語だ。

「本郷さん——！　赤魔が今、ここを西へ行ったア！」

宣彦だ。「本……本郷だッ！」と二人のさけんだ声を聞いて、ただちに赤魔の行くさきを、宣彦が知らせた。愛する少年の報告を聞くと、本郷は微笑した。が、まだ動かず、向こうへ逃げてゆくシナ人とユダヤ人を見ながら、この地下室の上下四方の造り方を、地ひびきと方々の足音によって、またたくうちに知ろうする……と、なにを思ったのか、サッと身をひるがえして、後ろ

のまがりかどへ消えた、と、そこの廊下を風のように走りだした。

## 今こそ彼を追う

死刑鉄室（しけいてつしつ）の前に、十一人のシナ人が、黒く折りかさなって倒れてる。下になっているのは、本郷を見はってたふたりだ。ひとりは先に拳銃をうばわれ鍵をとられた。格子をはずして出た本郷をめがけて走ってきた十五、六人が飛びかかる三、四秒のうちに柔道の当て身を受けて、バタバタと廊下にたおされた。そのままだ。七、八人が逃げた。あとにたおれてる十一人の上を今しも風のように走ってきた本郷が、サッと向こうへ飛び越えると、なお走る。つきあたりは灰色の壁だ。が、その外に、いまさき一人の靴音が、かすかに聞こえたのだ。その靴音、階段をあがっていった。かかとに力があり、赤魔の靴音だ！　これを聞きわけた本郷、突きあたりの壁へ走ってゆくと、走りながら壁の上下四方を見た。

（開かぬか！）

この壁の向こうへきえた赤魔、なにかの仕掛けが壁になければならぬ。外の階段を、なにしに赤魔があがっていったか？

（この壁、開くはずだ！）

と、見あげる本郷の横から、このとき、

「ああ――ッ、ああ――」

と、あくびのような声が、不意に聞こえた。

見ると、ここにも横に鉄格子あり、中に、ひとりのシナ人が、グッタリと床の上へ腹ばいに寝そべってる。そばに長いきせるがころがっていて、阿片（アヘン）の毒の煙を、ここで吸ってたらしい。今は眼がさめていながら、ヌッと顔だけあげて、本郷を見ると、

「請開（チンカイ）！」――開けてください！

と、ささやく顔は、六十あまりに見える老人だ。

一秒もおしい危機だ。が、たのまれた本郷剣侠児、口にくわえてる鍵をとると、格子の鍵穴へはめて、ガチリと回した。はずれる格子を引いて倒すと、中のシナ人がヨロヨロと起きあがってきた。

「この壁があくか」

と、本郷がきくと、うなずいたシナ人、枯れ木のような手をあげて、壁のはしにつづいてる鉄格子の一本をつかんで引こうとする。が、力が阿片（アヘン）の毒にぬけていて、

「不能（プニエン）！」――だめだ！

と、言う青白い横顔が、黄色いシナ服の襟（えり）へ、グタリとうつむいた。

その鉄格子の一本を、グッと本郷が引いた。そこだけ一本、はずれると、通じてた電流が切れたらしい。電流にしまってた壁が、グーッとあがりはじめた。強いバネ仕掛けだ。その下を本郷は外へ一気にすりぬけた。前が階段だ。広い。

（赤魔！　ここをあがったのだ！）

捕らえるのだ、いまこそ赤魔バザロフを！　彼を捕らえて怪地下室の囚人を皆救おうとする、本郷義昭の全身に熱血あふれて眉あがり、飛ぶごとくに階段を昇っていった。

黒松の森を、高村騎兵中尉と国司青年が走り出てきた。

クロック中将の信号に呼ばれたのだ。

「や、これは？」

と、国司青年が、立ちどまった。

「敵の昇降機だ。閣下、行きますか」

高村中尉が、下がってる地面昇降機を見て、クロック中将にきく。上空を仰いでるクロック中将、またあがっていった無声飛行機を見ながら、

「高村くん、上から、本郷氏ハ安全カ、と、たずねとるのじゃ。まだ爆撃は、できんぞ！　本郷は安全か？　行こう、敵の地下室へ！」

高村中尉も国司青年も、下から見た。――武侠嶺の無声単葉機、操縦席にふたりがならび、ひ

とりが下へ手をのばし、まっ白な棒を横に振ってる。ゆっくりと長く振るときは線だ。短く振って止めたときは点だ。線と点との組み合わせで、さかんに信号してる。天佑谷で使う信号と同じだ。

(本郷氏ハ安全カ。巌窟城(ガンクツジョウ)ノ爆弾、五個アリ)

「巌窟城の爆弾とはなんですか」

と、高村中尉がきく。

「〇国の発明したものじゃ。ちいさいがの、爆発力は、地下室くらい一弾でよい。が、……」

と、クロック中将は、帽子をぬぐと、横に長く短く振って信号しだした。

(本郷ト他ノ二人ヲサガスベク、ワレラハ今ヨリ敵ノ地下室ヘ冒険ス)

この信号を、横から見た国司青年が、いきなり地面昇降機へ飛び乗った。つづいて高村中尉が、おくれじと飛び乗った。敵に談判した「あと三分」は、今なのだ。ふたりが乗った重さで電流が通じる昇降機、たちまち下へ降りはじめた。

「閣下、地上の連絡に、お残りください!」

と、高村中尉が降りてゆきながらさけぶ。

「ウム!」

と、うなずきながら、クロック中将は、白い髭をにぎりしめた。

(日本人は勇敢じゃが、気が早いの)





そう思うクロック中将、みるみる下へ消えたふたりのあとに、ただひとり、ゆだんなく四方を見はっていた。

すると、東の方から、黄色いほこりをあげて、まっしぐらに前進してくるのは、一列に長い自動車隊だ。遠くの山には、雪が残ってる。その雪に、自動車の上の日章旗がうつる。鉄兜（てつかぶと）をかぶってる日本軍の将兵が、ギッシリと自動車に乗り、幾台となく西南へ前進してゆく。みるみるうちに原を横ぎり、長い自動車の列が、先頭から西南の山陰（やまかげ）へ入ってゆく……。

武侠嶺の無声飛行機からも、大きな日章旗を振って、地上の皇軍を見送ってる。木村と岩崎の二人だ。

「オイ、熱河討伐の追撃隊だな」

と、岩崎が機上で言う。

「ウン、あの方向は、だが、承徳（しょうとく）じゃないぞ。もっと南だ」

「万里の長城へ出るか、山海関（さんかいかん）の方らしいぞ」

「どこだって、この爆弾でやれあ、一発で全滅だがな」

二人の足もとに、細長い筒（つつ）のさきが矢のようにとがってる爆弾五個、ならんで籠の中に入ってる。銀色の爆弾だ。が、まだ投下できないのだ。

(本郷さんは、どうしてるか？)

木村は下の方を見た。クロック中将が、ドッシリと穴の中に立ってる。

「オイ、何分待ツノカ、と信号してみろ！」

と、岩崎がさげ舵をとりながら言う。

二人とも機上に、今、気が気ではない。本郷さんを思い、宣彦とルイカールを思う。敵は赤魔のシオン同盟だ。上から一発の爆弾投下、日本の敵を、ここに全滅するのは、目の下だ。その黒松の森が、箱庭のように見える。木村は信号の白棒をふりだした。横の草の中へ、今さきに二人が、ふっと消えた。クロック中将だけ残ってる。

(今カラナン分待ツノカ)

クロック中将が、それに答えて帽子をふる。

(オソラク五分間)

「五分だ！」

と、木村が歯ぎしりして言う。

「五分間……だいじょうぶか？」

と、岩崎は、黒松の森の上を、操縦席からにらみつけた。

高さ二百八十メートル、低空飛行だ。

「おれはだいじょうぶだと思う、本郷さんだ」

と、木村は、心配しながら、安心して言う。

「だが、敵は赤魔だ」

と岩崎は、すごい相手の力を思って言う。
「なにを、赤魔も人間だ。やつ、あやしい知恵（ちえ）がある人間だ」
「ウム、本郷さん、ルイカール、天佑谷の宣彦少年、今行った二人、味方は五人だ。皆生きてれば！」
「地上にクロック将軍、空におれたちふたり、味方は八人だぞ」
「シオン同盟のやつは、地下室になん人おるか！」
「ああ五分間、いや、もう三分だ！」
空にジリジリして待つ。このとき、北の山陰がスーッとくらくなってきた。見ると、灰色の大きな雲だ。山の上へ一面にひろがってくる。雪雲だ。
「オイ、吹雪だぞ！」
と、木村がさけびだした。
「ウム、早いぞ。こっちへくるか？」
蒙古吹雪だ。山の上をかすめて、風といっしょに空をおそってくる。
「ヤッ、あれはなんだッ？」
雪雲を見てた木村が、きゅうに下の方を見て指さした。
黒松の外だ。岩崎も、その方を見た。
「下げろッ！　岩崎」

「ムッ、よし！」
グーンと機首を下げた操縦手の岩崎、黒松の外へ向けて、きゅうに一直線に降りていった。

## 横から連発する扉機関銃

本郷義昭は、地下室の広い階段を、音もなくあがっていった。今こそ赤魔を追う！　あがると、階段が右へまがってる。そこを、またあがった。黒い手すりが横にある。鉄だ、危険だ！　電流が通じてはいないか！　階段のまん中を、ツツッと一瞬にあがった本郷、正面に黒く鉄の扉が、ピッタリとしまってるのを見た。
（赤魔！　ここへ入ったか？）
この扉へ、さわるのは危険だ。ジッと見あげた本郷、同時に耳をすました。
（中になにものがおるか？）
かすかな物音でも聞きわける本郷の、するどい耳に、このとき、なにものか？　階段をあがってくる足音が、ヒタヒタと下から聞こえてきた。
（今さきの青白いシナ人か？）

ちがうのだ。弱い足音だ。が、あわててあがってくる。これを聞いた本郷、ふりかえって下を見た。――階段のまがりかどに、スッと出てきた蒙古服の男、だが、頭巾（ずきん）の横に髪が赤黒い。ユダヤ人だと、見た本郷、右手の無声拳銃を、そのユダヤ人の頭へ、ピタリとねらいさだめると、

「止まれッ！」

上から本郷の声をあびて、ハッとあおむいたユダヤ人、本郷を見て動けずに、階段のまん中へ、青白くなって立ちどまった。本郷が上から英語でいう。

「きさまは、バザロフをさがしにきたな」

「アッ、そう……そうです」

答えるユダヤ人の声がふるえた。

「よし。開け、この扉を！」

「わたし、開け方を、知らねエんで」

「偽（いつわ）るか、あがれッ、利徳三！」

「アアッ！」

名まえを知られてる利徳三、ふるえながら目を見はった。

前に廊下で潜望鏡（ペリスコープ）のそばから、さかんに報告してた利徳三、その時の声で本郷に名まえを知られたのだ。ふるえてる利徳三を、本郷は今や目の下に見ると、また言った。

「あがれッ！」

凛たる声、腹の底にしみとおって、そむきえない命令だ。利徳三は、ふるえながらあがってくると、本郷のすぐ下へ立ちどまった。

「あなたの持ってる鍵で、この扉は、中へあきます」

死刑鉄室と、この黒い扉と、おなじ鍵であくという。本郷は、さきにシナ人が捕らわれていた鉄格子をあけた、その時の鍵を、蒙古服のかくしからとりだすと、

「徳三、きさまがあけ！」

長い鍵を、ズッと前へさしだした。が、利徳三は、手も出さず、石のように突っ立っていう。

「あなたが、あけてください。すぐ、あきます」

赤魔を追うべく、一秒も惜しい本郷、うしろをふりむくと、危険をおかして、扉の鍵穴へ、長い鍵をグッと入れた。まわすや否や、手前へ引こうとする、このすきにサッと利徳三が身をかがめた。それを知った本郷、おなじく身をかがめて扉を引いた。と、柱と扉のあいだから、たちまち射ちだした一発……二発……三発、本郷の頭と肩の上をかすめて、無声弾が横の壁へピシピシとあたる。扉の動きが引き金のようになってる、拳銃でなく「扉銃」というべきもの――赤魔の計略だ。連発する弾と同時に、利徳三は、階段を下へ逃げ去ろうとする、その襟くびを、ムズと上からつかんだ本郷、階段に膝をつけたまま身をかがめて、扉の中を見た。と、すごく眉をあげた。

扉の中は、せまい、コンクリートの壁にかこまれて、へやではなく、四角い穴のようだ。と、

見ると、そこに、上からスーッと昇降機が降りてきた。――なにものが乗ってきたか？　否、鉄の細い格子の中に、だれもいない。からだ。

(赤魔、これに乗って、地上へのがれたか？)と、本郷は微笑した。

地上には、クロック将軍あり、天佑谷の日本人あり、なお、救援に来たれる飛行機二台、空から監視してるはずだ。それを、利徳三が潜望鏡から見て、赤魔に報告してたのだ。

「徳三、言えッ！　この昇降機に乗って出たものは、バザロフか」

「そ……総司令です」

「よし。この地下室に昇降機が、いくつあるか」

「七つ、ありますんで」

答える利徳三の茶色の眼で、ジッと本郷を見つめた。(ユダヤ人、あくまでもうそをいうか？)と、見ると、利徳三の目が、自分も地上へ出たいと、必死に願い、恐れにふるえてるのだ。

(さては、この地下室に、赤魔がなにかの危険を残していったか!?)

と、本郷は、利徳三の目いろによって、これを一瞬に知った。

地上へ出た赤魔は、クロック将軍その他の手に捕らえられる。今は、それよりも、宣彦少年とルイカール、そのほかの囚人を、一秒も早く救わねばならぬ。武侠熱血の本郷剣侠児、左手につかんでる利徳三をグッと上に引きよせると、

「立て！」

自分も立ちあがるや否や、利徳三を引きずって、扉の中へ入った。
昇降機の格子を、横へあけた。おどり入った本郷、そばに利徳三を立たせて、降りのスイッチを、グッと押した。
「アアッ、いや、上へ！」
と、利徳三がさけぶ。
「だまれ、手をあげろ！」
降りてゆく昇降機の中に、本郷は利徳三の蒙古服を、上から下へ、すばやく左手で調べた。すると、ダブダブの服の下に、腰へ吊ってるなにもののが、手にさわった。かたい。
「これを出せ！」
「…………」
利徳三は顔をしかめた。
このとき、下の廊下へスッと着いた。そこに昇降機をとめた本郷、あけてある格子のそとへ、おどり出た。灰色の廊下に人なく、向こうまで遠く見わたされる。両側は皆、死刑鉄室だ。暗い電燈の下に、鉄格子が太くならんでいる。
「徳三、服の下のものを出せ！」
本郷は、ふたたび命令した。
顔をしかめてる利徳三が、上衣の下へ手を入れた。なにか吊ってる。ほそい麻の綱を、ズルズ

ルと引き出した。その先についてるものは、肉色のマスクだ。小さな最新式の防毒面だ。これを見た本郷、すぐに廊下の向こうを見わたした。

(毒ガスの仕掛けが、この地下室にあるのだ。あやうし！　宣彦とルイカール、……)

赤魔の部下二十人あまりのユダヤ人とシナ人が、どこへ行ったのか？　この廊下に人影なく皆、毒ガスを恐れて、逃げたのではないか。本郷は日本語でさけんだ。凛々たる声がつたわってゆく……。

「宣彦、ルイカール、どこにおるか、本郷に答えよ！」

本郷が地下室の奥に、さけんでる時、地上には、黒松の森のそとへ、どこから出てきたのか、ひとりの男が、国司青年の飛行機をめがけて、すばやく走ってゆく。なにものか？　青色の洋服をきてる。が、帽子はなく、頭から顔へなにかをかぶり、覆面のように見える。

(奇怪だ！)と、クロック中将は、その男を、黒松の幹と幹のあいだに見つけた。

——走る。森の向こうだ。幹と幹のあいだから見える。飛ぶように走ってゆく奇怪な男、なにものか？　と、見つめるクロック中将が、ハッと顔いろをかえた。そこに、空をかすめて森の向こうへ、グーンと降りていったわが単葉機の空中滑走。……武俠嶺の無声機だ！　と、見るより早く、クロック中将は、つかんでた帽子を投げすててさけんだ。

「追えッ！　にがすな」

さけぶクロック中将も、地雷爆発の穴から走りだしていた。森の中へ、いっさんに走る。いま

しも木村と岩崎の単葉機が、スーッと草の上へ、おどるように機首をあげて降りた。着陸だ。なにか木村がさけんだ。その横を、奇怪な男が走りながら、いきなり右手を横へのばした。音もなく射ちだしたのは、無声自動拳銃か、射ちながら走り、三十メートルほど前にある国司青年の飛行機へ、近づくと見るまに、サッと操縦席へ飛び乗った。それを森の中から見たクロック中将、歯がみしながら、またさけんだ。

「し……しまった！　追えッ、キムラ！」

その木村と岩崎が乗ってる単葉機は、いましも草の上を滑走して停まった。おどり出たふたりが、同時に拳銃を取りだした。射つ！　向こうの操縦席に動いてる覆面の男へ、バラバラと射ちだした。その弾をあびつつ、向こうの飛行機は爆音たかく推進機まわり、早くも草をすべると見るまに、スッと上へ浮いた。垂直上昇……機首をあげて、まっしぐらに空へのぼる。敵ながらも、すごい上昇飛行に、木村と岩崎は、息をつめて見あげた。……が、味方の飛行機を、目のまえでうばわれたのだ。木村と岩崎は走った。自分の単葉機の方へ、そこにクロック中将が、いっさんに森を走り出てきた。

## 彼が赤魔か？

「にがすなッ！　おれも行く、追えッ！」
と、日本語でさけびつづけるクロック中将に、岩崎が青ざめていう。
「射たれました。機関部を！」
「なに？」
「僕たちよりも、機関部をねらった、やつの射撃は、たしかです。オイ、木村、すぐに修理だ！」
「ウム、……」
ふたりは無念のあまり青ざめながら、しかし、おちついていた。すぐに機上へ入ると、機関部を検査しはじめた。
「見ろ、射たれてる。ここだ」
「ここも！　やつ、なにものか」
ちょうど発動機のまん中へ、蜂の巣のように射ちこんだ連発の拳銃弾、しかも、奇怪な男は走

りながら射った。ねらいの正しい弾のあとを、木村と岩崎は見て、さすがに勇敢なふたりもおどろいた。
「すごい腕まえのやつ……なにものか」
「ここまで弾が、三重の鉄をとおってる。見ろ、これあ特別の弾だ」
「なおらんぞ、急には！」
無念にも、この発動機は、今、すぐに修理はできないのだ。木村と岩崎は、熱心に検査しながら、
「やられた！」
と、自分が負傷したよりも残念なのだ。
この飛行機のそばに、クロック中将は、おなじく無念の眉をあげて、西の空を見つめた。――敵は上昇すること約八百メートル、そのまま西へ、折りしも流れてきた雪雲の下をかすめて、遠く山また山のかなたへ、見る見る一羽の鳥のように小さくなっていく……。
「やつ！　上空をぬけ出た怪人、たしかに赤魔バザロフじゃ」
と、クロック中将はドイツ語でさけんだ。
「バザロフ」
と、この名を聞くと、木村も岩崎も顔をあげた。
「今のがバザロフですか」

「あいつが赤魔ですか」
と、ふたりが同時にきく。
「そうじゃ。赤魔のほかに、これだけの事をするやつがおろうか」
「では、本郷さんとルイカールは、どうしたか」
「宣彦という少年も、捕われているのじゃ、待て！」
と、クロック中将は、また森の中へ走っていった。
(本郷……ルイカール……宣彦、三人はどうしたか？　怪人赤魔が上空にぬけて出た。とすると、地下室の中は？　赤魔の部下のものが、大勢いるのだ)
これを思うクロック中将、黒松の森を走り出ると、地面昇降機の上へ、高い草をふんでいった。降りた高村中尉と国司青年のふたりが、昇降機を上げてはいないか？　クロック中将の自分も、今こそ敵中へ降りてゆく決心だ。見ると、草の中に、黒くあいてる昇降機の穴深く、――どうしたか？　と、下をのぞいたクロック中将、
「…………」
穴のふちに、足をふみしめて、ものをも言わず下を見すえた。
一方、地下室の奥には、本郷がさけび、その声を聞いて、廊下の遠くから、宣彦がさけびだした。
「ここです！　僕はだいじょうぶ、敵は皆、三分前ににげた」

つづいて、ルイカールのすずしい声が、なお遠くから聞こえてきた。
「僕もだいじょうぶ、バザロフをとらえたか？」
さすがにアジアの英雄児、宣彦は敵情を報告し、ルイカールは敵の首領のゆくえをたずねる。
しかも、ふたりともまだとらえられてるのだ。その声の方へ、本郷は走っていった。利徳三からうばいとった防毒面を左手にさげ、右手に無声拳銃をにぎり、長い廊下を、一気に走りぬけると、広い四つかどへ出た。そこに、天井が上へぬけてる。と、仰ぐと、なお上に高く一台の昇降機が、黒い底を見せて、中途に下がってる。電流を止められたのだ。なにものが乗ってるのか？と、一瞬、本郷は立ちどまった。その足音と今さきのさけび声が、上に聞こえたか、昇降機の中から、いきなり太い声がいいだした。
「本郷さんじゃないですか？」
日本語だ。すぐに本郷が答えた。声でわかる、天佑谷の国司青年の太い声だ。
「国司くんだな。」
「は、高村中尉もおります」
この危機に、本郷は笑いだした。
「ハッハハハ、おろしてやろう」
そこに、利徳三が追いついてきた。英語でいう、
「この昇降機で、すぐ上がらねエと、……危険です、皆、あなたも！」

「言えッ、毒ガスか？」
本郷は柱についてる電流スイッチを押しながら、利徳三にたずねた。
「ガス！　そして、爆発です」
「止めろッ、その仕掛けを！」
「だ……だめです。総司令が、仕掛けていった。わたしは、止める仕方を、知らねエです。早く！」
昇降機が降りてきた。本郷は利徳三に命令した。
「おれの服から鍵を出せ。二少年をはじめとらえられてるものを、皆、鉄室から出せ！」
利徳三はまたふるえた。本郷は、うしろ向きに立っている。
「鍵を出さんか。かくしにあるのだ。……オオ、高村中尉、国司くん、どうした？」
大きな昇降機の中に、高村中尉が、苦笑いしながら言う、
「やられました、赤魔のやつに！」
国司青年が、残念がって言う、
「本郷さん？　あなたを救おうと思って、あなたに救われました」
この時、はるかに上の地面から、クロック中将の声が聞こえてきた。
「安全か？　……今さきに、赤魔はぬけた。敵の部下十数名、今、自動車に乗ってあらわれ、西へ逃走中だ。本郷は安全か？」

考えてみたまえ！

今や地上へ、味方の皆が地面昇降機に乗ってくると、梯子（はしご）のようになってる格子をあがり、草の中へ下からあらわれた。本郷義昭をはじめ、宣彦、ルイカール、高村中尉、国司青年、味方は五人だ。それに、ユダヤ人の利徳三、青白いシナ人、ほかに捕われた蒙古人とシナ人が八名、その中に、けだかい顔をしてる蒙古少女が一人いる。この皆が、本郷に救われたのだ。――本郷の手をにぎりしめて、クロック中将がいう、

「あれだ！　あの自動車だ、やはり、昇降機によって向こうへあらわれた。本郷、赤魔はぬけたぞ！　西へ！」

その西の方へ、二台の自動車が、全速力で野原を走ってゆく。地下室をぬけ出たシオン同盟の一党だ。どこへ行く？　二台の上へ、いっぱいに乗り、ひとりが後に立って双眼鏡を目にあて、こちらを見ながら、ほこりの中にゆれてゆく。すると、利徳三が、サッと走りだした。と思うと、地雷が爆発した穴へ、ころぶように飛びこんだ。

「集まれッ！」

本郷がきゅうに命令した。
皆が本郷を見る。
「危険だ。穴へ！」
と、利徳三の飛びこんだ穴を、本郷が指さしつつ走りだした。
皆も走った。なにが危険なのか？　と、思う一秒に、黒松の森をかこんで、四方からドッと各所に爆発した、黒い土煙……炎……ふきあがった地雷の爆発に、あたりが震動して皆が草へ伏し、土煙の中にシナ人と蒙古人が泣きさけぶ。傷ついた蒙古人の男が、もがいて倒れ、二人のシナ人が、ふき飛ばされて向こうへ折り重なると、そのまま動かなくなった。
穴の中へ、利徳三は早くも身を伏せ、そこに、本郷、宣彦、ルイカール、三人が飛びこんでいた。上の草に、全身を伏せてる国司青年が、スックと立ちあがった。高村中尉も起きあがった。
クロック中将が膝をたてていう、
「赤魔じゃの。やつ、遅発装置の地雷を、みやげに置いてゆきおった。皆、けがはないか」
遅発装置――時間をおいて遅く爆発させる仕掛けだ。立ちあがった皆が、降ってくる土の中から、本郷の方を見た。本郷は穴の中に、宣彦とルイカールを左右へだくようにして、西の方を見つめてる。足もとにまだ伏せてるのは、ユダヤ人の利徳三だ。宣彦がいう、
「本郷さん！　赤魔バザロフは、どこへ逃げたのですか」
「ウン、今のところ、きみの判断にまかせよう。きみたちふたりで考えてみたまえ」

と、本郷は、いつものように微笑して言った。

国司青年が森の向こうを、すかして見ると、クロック中将にききだした。

「閣下、僕の飛行機は、どこへ行ったのです。僕の愛機は？」

うばわれたのだ！　天佑谷の愛機一台、ここまできてうばわれたのだ。これを、クロック中将から聞くと、国司青年は、草の上に突っ立ったまま歯がみし、カッと憤り(いきどお)に顔が赤くなった。しかも、見よ！　森の向こうに、武侠嶺の無声単葉機が動かず、ふたりが機関部の上に立って、こちらを見てる。木村と岩崎だ。岩崎が両手をあげて上下に振り、信号しはじめた。

（本郷氏ハ安全カ）

これを見た宣彦が、穴の上へおどりあがって信号を返した。

（安全ダ。来タレ）

（待テ。発動機(ハツドウキ)ヲ破壊(ハカイ)サレテ動カズ）

この信号に、宣彦も国司青年も高村中尉もルイカールも、ハッと顔いろをかえた。ただひとり、本郷は信号も見ず、両腕をくみしめたまま、ジッとなにごとか深く考えをこらしている。静かに、すみきってる目が、足もとに伏せてる利徳三を見つめてる。——ああわが日東の剣侠児、ここに今、なんの考えをこらすか？　本郷は皆を救った。が、赤魔は遠くのがれた。彼のためにわれは一歩、やぶれたのではないか？

宣彦が、静かに言いだした。

「高村さん！　鉄人先生へ、早く報告しましょう」

「ウム、そうだ」

大興安嶺の奥ふかく、天佑谷の岩屋に、神のごとき鉄人先生がいられる。われらの本郷さんが無事であったことを、そして、敵の赤魔バザロフが、西の上空へのがれ去ったことを、だれよりもまず鉄人先生へ、一秒も早く報告しなければならぬ。高村中尉は、地雷の爆発にくずれてる無線電信機を穴の底に、手早く組み立てはじめた。宣彦が、そばへきて手つだう。すると、ルイカールも走ってきて、さけびだした。

「武俠嶺のものへも、知らせてやってくれたまえ。同じ暗号を使って！」

「よし、空中線（アンテナ）をふたりで立てろ」

と、高村中尉が、電池を検査しながら言う。

宣彦とルイカールは、倒れてる空中線の細い柱を、グッと起こすと、土へ深く突きさした。

――残念だ！　赤魔を逃がしたのは、まったく残念だ！　だが、本郷さんは無事でいられた。しかも、あの怪敵の大地下室を征服したのは、やはり、僕たちの本郷さんだ！　と思ってる宣彦とルイカール、ふたりは空中線（アンテナ）の柱を突きさすと、顔を見あわせて、

(残念だけれど愉快だね）と、同じことを思う目と目で笑いあった。

ふたりとも眼が黒い。同じアジア人だ。

しかし、だれよりも残念なのは、国司青年だ。愛機を敵にうばわれた！　このまま天佑谷へ……

……鉄人先生の前へ帰れるか、断じて帰れない。愛機は飛行士の生命だ。

（おれは帰らんぞ！　赤魔を捕えるまでは、鉄人先生のお顔を見んぞ）

腹の底から、これを覚悟した国司青年、飛行服の腕を組んだまま、西の空を見つめて、身動きもせず、その耳へ、カタカタカタカタとひびいてきたのは、高村中尉が打ちだした無線電信機だ。

（ああ高村中尉、飛行機がうばわれたことも、報告するか）と、国司青年は、顔をまっ赤にした。男子の恥を知ってるからだ、否、（赤魔を捕らえずば帰らず！）と、覚悟したのは、男子の意気だ。国司青年は、グッとふりむくと、本郷の足もとに倒れてるユダヤ人を見つめて、いきなりシナ語が言いだした。

「オイ、きさまの総司令バザロフのゆくえを言えッ！」

利徳三は、ジーッと顔をあげた。その青白い顔いろを、本郷が上から見つめている、と、気がついた利徳三、ハッと顔をまた伏せた。国司青年が、本郷に願って言う、

「こいつは、あなたを恐れているようです。すこしはなれていらしてください。僕がきいてみますから」

「いや、国司くん」

と、本郷は微笑して、

「だれがきいても、このユダヤ人は、バザロフのゆくえを、断じて言わないだろう」

「なぜですか。こいつは赤魔の有力な部下じゃないですか」
「しかし、ユダヤ人は、死んでも秘密を言わないのが、ほこりだ。これだけは、感心な人種だ」
クロック将軍が横から、うなずいて言う、
「ウム、そうだ。本郷の言うとおりじゃ。が、赤魔のやつ、西へ行きおった。これだけは、わしが見たからの」
ルイカールが、そばからたずねた。
「閣下は、赤魔の顔を、ご覧になったのですか」
「いや、彼は覆面(ふくめん)しておった」
「アッ、では、赤魔じゃないかもしれない。宣彦！　きみは、どう思う？」
宣彦は、剛胆(ごうたん)な眼をかがやかした。しかし、だまっている。めったなことを言わない宣彦だ。
すると、クロック将軍が、髭をふって言う、
「やつが覆面しとったのは、空の途中で、日本軍の飛行機に、自分の顔を発見されないためじゃよ。本郷、きみは、そう思わぬかの？」
「…………」
本郷は、微笑しつづけながら、なんとも答えず、すみきっている瞳が、まだ足もとにいる利徳三を、まばたきもせず見つめている。
味方の皆が、なお思った。

（怪敵！　赤魔はどこへ行ったか？）

## アジアの毒の根

昼なお暗き千古の森林にかこまれて、天佑谷の奥は静かだ。岩屋の中の広間に、白木の大きなテーブルを前にして、神のごとき鉄人先生が、ゆったりと木の椅子へもたれていられる。一方の岩壁に上から聖くたれているのは、見るも気だかい日章旗だ。

鉄人先生の前に、テーブルへ向きあって立っている偉丈夫はだれか。黒い蒙古服を着ているが、不屈の顔は岩をきざんだようだ。燃ゆるごとき瞳がちえの深さを思わせる。しかも、鉄人先生の前に直立不動の姿勢をとったまま、つつしんで立っている。机の上には、満蒙と北シナの大地図がひろげられ、そばに二枚の紙が、二枚とも鉄人先生の目の下にある。今、偉丈夫が先生の前へもってきた報告書だ。一枚は、高村中尉が無線電信で打ってきた至急報告だ。また一枚は、関東軍司令部の飛行機が、通信筒でおとしていった熱河戦の秘密報告だ。

二枚の報告書を、静かに見ていられる鉄人先生は、ただ一言、

「よし！」
と、言われた。
静かだ。遠くに水の流れてる音が、この深い岩屋の奥へつたわってくる。偉丈夫は腕をのばして、二枚の報告書を、静かにたたむ。たたみながら、重々しい声で言いだした。
「これで見ますと、バザロフはじめシオン同盟の一党は、北平方面へのがれたものと思われます。しかし、今後、赤魔のゆくえがわかりませぬと、彼は満洲国へ、ふたたび手をのばして、国内を乱しにかかりましょう。今ならば、本郷も、国司も、高村も、また宣彦少年も、熱河に集まっております。赤魔を捕らえるため、ここに先生のお指図を、お願いいたしたいと存じます」
そうなのだ。偉丈夫が言うとおり、本郷をはじめわが四人は今、同じ所にいるのだ。鉄人先生から四人へ命令していただき、それを天佑谷から無線電信で四人へ打ち、あくまでも赤魔バザロフを捕らえねばならぬ。彼を捕らえることは、アジアの土から毒の根を切りとることだ。
鉄人先生の雪のごとく白い眉が、ズッと上に動くと、
「満洲国内を乱すよりも、赤魔の目的は日本を襲うにある」
ゆったりと言われる声が、岩屋の中に重くひびいて、
「日本の正義を、彼は呪う。日本がひとたび、義によって白人と戦うとき、彼バザロフの指揮するシオン同盟は、白人に味方して日本を襲う。襲う準備の地点を、彼は前もって、満洲蒙古の中に置こうと計画しておるのじゃ。おそらく彼は、満蒙の外にある北平へ、飛び去ることはあるま

い」
鉄人先生が「日本」と言われるたびに、その声が力にあふれてひびく。国を愛する偉人熱誠の力は、声にもあふれる。しかも、今、日本を敵とする赤魔バザロフは、まだ満蒙の中にひそみ、けっしてシナの北平方面へは行かぬと、指さすように言われるのだ。
偉丈夫は目の下の大地図を見た。高村中尉の至急報告は、しかし、赤魔が国司青年の飛行機をうばって、西の方、北平の方向へ飛び去ったと、その時間まで知らせてきたのだ。
「しますと、……」
と、偉丈夫は、大地図の上を、さぐるようにながめながら、
「今後、どの方面へ、本郷をはじめ四人を出動させてよろしゅうございましょうか」
これを、鉄人先生にたずねた。
すると、鉄人先生は、また一言いわれた。
「本郷にまかせておくがよい」
「ハッ」
偉丈夫はだれか。天佑谷の参謀長、東条靖弘という人だ。
天佑谷には偉丈夫が多い。皆、鉄人先生につかえて、満蒙露支の大陸に動く天下の形勢を、大興安嶺の奥から見ている。日本の全陸軍がアジア大陸に戦うとき、天佑谷の日本人が、たちまち立って祖国の生命線を、北と西へ伸ばそうとする。この雄大なる護国の準備を、偉丈夫の皆が鉄

人先生の下にあって、大興安嶺の奥にととのえている。この大いなる秘密を知ってるのが、敵のシオン同盟の総司令バザロフだ。してみると、かの怪敵赤魔が、熱河の大地下室をのがれ出たとはいえ、どうして遠く北平（ペーピン）へ飛び去ろうか。まして彼は、蛇のごとき瞳をかがやかして、本郷に言ったのだ。

「今に見ろ。否、今から四十九日のあいだに、天佑谷の日本人を、おれの手で全滅させるのだ。それをきさまの目のまえに見せてやろう！」

赤魔の誓いだ。彼は天佑谷をめざしている。神のごとき鉄人先生を倒そうとする。これを鉄人先生は知っていられるだろうか。高村中尉は、赤魔のおそるべき誓いを、報告してこない。本郷が言わなかったからだ。なぜか？　本郷剣俠児は、自分の手で赤魔バザロフを、かならず捕らえようと覚悟し、その計略を本郷ひとりで立てているからではないか。

「本郷にまかせておくがよい」

鉄人先生は、あくまでも本郷を信じていられる。ただ一言、そういわれたまま、なおも大地図の上を、静かに見ていられる。参謀長の偉丈夫、東条靖弘は、つつしんでおじぎをすると、たたんだ二枚の報告書をもって、先生の前をさがっていった。だが、岩屋の石段をあがってくるとき、太い眉をひそめた。

（敵は赤魔だ。本郷の好敵手だ。本郷と赤魔、どこまで戦うか。勝っても本郷が傷つきはせぬか）これを、東条参謀長は、親友本郷のために、ひどく心配したのだ。

## 皆が目を見はった

熱河省の都を「承徳」という。

承徳へ！　承徳へ！　日本軍の挺進自動車隊が、朝早く、承徳の北の方からまわってきた。すごい速度だ。つづいて戦車隊が、東の路から進んできた。

本郷は前にシナ兵に変装し、熱河軍司令部へ、バザロフを捕らえるために入っていた。その司令部には、もう一兵のシナ軍もいない。日本軍来たる！　と聞いて、司令官の湯玉麟という将軍が、まっさきに姿をかくした。逃げたのだ。司令官が逃げて、軍隊も逃げた。そのとき、空には高く日本軍の爆撃機が、早くも承徳の上に爆音をとどろかし、地上の挺進隊が承徳へ入城すると、近くの広場へ着陸した。

城門の上に、市街の方々に、日章旗がひるがえった。五色の満洲国旗も、ならべて立てられた。

このとき、爆撃機が着陸してる広場へ、一台の古い幌馬車が、町の外から、ガラガラとゆれながら入ってきた。一頭の小さな蒙古馬が、重そうに引いている。馬車の上には、蒙古人、西洋人、顔の黒い少年など、ギッシリと乗っている。日本の飛行将校は、この馬車を遠くから見たと

き、ちょっとおどろいた。
「なんだ、西洋人も乗ってるぜ。逃げていた人民が、もう帰ってきたのか」
その幌馬車が、広場を警戒している歩哨に、入り口で止められた。
「だれか！」
鉄兜の下からさけぶ声が、ズシンとひびく。すると、若い蒙古人が、馬車の上から飛びおりて言う、
「飛行隊長殿に、お目にかかりたい。ぼくは日本人だ」
「なに？」
歩哨もおどろいた。
「どこにいられるか、飛行隊長殿は？」
蒙古人がりっぱな日本語で言う、
「ぼくは高村騎兵中尉、天佑谷の鉄人閣下の部下だと、飛行隊長殿に、すぐ報告してくれ。至急だ」
いよいよ歩哨はおどろいた。そこに飛行将校が走ってきた。少尉だ。
「オイ、歩哨、どうしたんか」
「ハッ、この蒙古人が、日本の騎兵中尉殿だと言うのであります」
「中尉殿だと？」

目を見はった飛行将校に、高村騎兵中尉は微笑して言った。
「まちがいなく、ぼくは高村騎兵中尉、馬車の上におるのは、皆、重大任務をもっているものです。至急に、飛行隊長殿にお会いしたい！」
「いや、とにかく、お待ちください。そう言ってきますから」
上空で蒙古の吹雪に会ったときより、まだおどろいた飛行将校、目を見はったまま、広場の方へ、いっさんに走っていった。
馬車の上から、皆がおりた。クロック将軍、ルイカール、国司青年、宣彦もいる。最後におりたのは、本郷だ。馭者台の上に残ってるのは、ほんとうの蒙古人だ。そこに、町の方から、またひとりの蒙古人が走ってきた。と思うと、
「高村中尉殿ッ！」
この蒙古人も、日本語でさけびだした。歩哨は、ますますおどろいた。高村中尉が振りかえると、
「ヤア、きみか。おめでとう！」
「ハッ、いよいよ万歳であります、ハハハハ」
とても愉快に笑いだした。熱河軍司令部の衛兵長をしてた林だ。ほんとうの名は林正虎、日本人だ。しかも、天佑谷から熱河軍へ間諜に入っていたひとりだ。
「ハハア、きみは逃げなかったのかね？」

と、高村中尉が、ひやかして言うと、
「なに、僕の逃げるよりも、湯玉麟の方が、自動車で不意でした。おしいことをしました。いっしょに逃げて、行くさきを、どうしても突きとめてやろうと考えていたのですが、ヤア、宣彦くん！　きみの売ってくれたパンは、そううまくなかったぞ。……アアッ、この人は？」
と、本郷を見て、林正虎も目を見はった。前に自分の衛兵の中にいたシナ兵だ。それが、バザロフの自動車の運転手を気絶させ、便所の中へ置いていった人だ。
本郷のさわやかな目が、なつかしそうに笑うと、
「衛兵長、きみは僕が居眠りをしていても、しからなかったね」
「ハハア、いやどうも、あなたは、いったいどなたです？」
「本郷さんだよ、林くん！」
と、高村中尉が言うと、
「ヤッ、これは！　……すると、僕は一生、いばれるぞ、本郷さんを部下にしたんだからな。どうだい、宣彦くん！」
宣彦も目を見はって言った。
「林さんは、どうしてそう、おしゃべりになったんです？」
「それア、僕だって、日本語が言いたくて、言いたくて。熱河軍の中にいたのは、もう一年あまりじゃないか。だから、ここで一時に、一年ぶりを、しゃべるんだ。ハッハハハハ」

だれよりも目を見はってるのは、歩哨だ。いろんな日本人が、少年まで、蒙古人になっている。そこに、今さきの飛行将校が、これも目を見はって走ってきた。

皇軍の飛行隊を、なにしに皆が、承徳の着陸場へ訪ねてきたのか。武侠嶺の無声単葉機が、機関部を敵に破壊された。その修理の品を至急に借りるためだ。なお一つ、覆面せるひとりの操縦手が、西の方の上空へのがれた。その飛行機を、皇軍の爆撃機が熱河討伐の空に発見しなかったか。これを、たしかめるためだった。

(本郷義昭少佐来たる!)

飛行隊の将兵が、承徳占領とともに、二重に万歳をさけんだ。そればかりか、本郷といっしょに来ている皆が、とても歓迎された。クロック将軍も、ルイカールも、はじめて日本軍の将兵を見て、これまた目を見はった。

(こんな質素で勇敢な軍隊が、世界にあるだろうか)と、心からおどろいたのだ。

機関部の修理の品は、すぐに貸された。だが、覆面せる操縦手の飛行機は、発見されなかったという。すると、赤魔バザロフは、はたして北平へ飛んだのではない。吹雪の雲を突いて、西へのがれると見せたまま、どこかへ方向をかえたのだ。

利徳三とその他、地下室から救われた蒙古人やシナ人は、地雷に負傷した二人とともに、本郷が皇軍の輸送隊にたのみ、東南の錦州へ送った。錦州には、このとき、武藤大将の関東軍司令部が、秘密にきていたのだ。こうして、赤魔の怪地下室は、ついに征服された。ところが、この

夜、地下室の上の黒松の森に、スッと浮きあがるように、人影があらわれた。——森の奥だ。昼すぎから降っていた吹雪は晴れて、蒙古の月が西へ沈みかけている。青白い光に森の影が、まっ黒く雪の上へうつって、あざやかな墨絵のようだ。その影から影へ、スルスルと動いているのは、なにものか？　ただひとり、なにをしているのか？　立ちどまると、森の外を、すかしてみるらしい。ジッと動かずにいる。

　武俠嶺の無声機は、すでに修理を終わって、今は影もない。森の外に、ところどころ地面が高くもりあがってるのは、地雷爆発のあとだ。——遠くに車の音が長くつづいて、月光のうちに聞こえる。日本軍の輸送隊が、弾薬や食糧を承徳へ送ってゆくのだ。——立ちどまった黒影が、また動きだした。あたりを見まわしながら、枯れてる松の下へ出てきた。そこに、上から月の光をあびた。するどい青白い顔……赤魔だ！　ただひとり、怪地下室へ残っていたのだ。

　部下のユダヤ人である丁殿九に、覆面させて、天佑谷の飛行機をうばわせ、どこかへのがれさせた。赤魔は自分の身がわりに、丁殿九を使ったのだ。なお、シオン同盟の一党を、二台の自動車に乗せて、まず西へ逃げさせた。が、自分はひとり、地下室に残り、電気地雷を爆発させた。本郷に捕えられたのは、利徳三ひとりだ。

（バザロフは、どこに？）

　これを、利徳三の顔いろから、読みとろうとして、本郷は、あくまでも利徳三を見つめていたのだ。——今ここに、深夜、赤魔バザロフが、地下室の上に、月下の森の中に、ただひとり、な

にごとかたくらんでいる。本郷は、これを知らずにいるだろうか？……

空には蒙古の月が、青白く西にかかり、地には熱河平原の雪が、月の光に照らされて、まっ白にかがやいている。天にも地にも光がしずんでいる。満蒙大陸の夜だ。

怪地下室の上に、黒松の森がしげって、その下の陰から陰へ、スルスルと動いていった赤魔バザロフ、松の枝と葉からもれる月の光に、チラリチラリと姿があらわれる。それがスッと幹の下へかくれた。またも昇降機（エレベーター）によって、音もなく地下へ降りたか。あやしい彼の影が見えなくなった。

暗い。見えなくなった。が、またチラリとあらわれた。いるのだ。枯れ松の幹の下から、スックと上へ両手をのばし、たくみに両足を動かして、蛇のように幹をのぼってゆく。枝の上へ出るとなお上へのぼる。黒く動いて、グッと枝の上に立ちあがった。幹にそうて黒い影が、かくれてはあらわれ、またのぼる。高く幹の上へ出ると、そこに、ジッと動かなくなった。ちょうど赤魔が一本の松の枝のように見える。怪人、なにをするのか。

月下に風強く、西北から吹く。見わたすかぎり大陸は月に照らされて、静かな海のように青白い。熱河の都・承徳へ、弾薬（だんやく）や食糧を送ってゆく日本軍の輸送隊が、まだ長くつづいてる。その車の音が風につたわって、南へ南へと消えてゆく。この夜ふけに、かすかに別のひびきが、風の中に聞こえてきた。ふるえてくる音……上空だ。それが西の方から、近づいてきた。飛行機だ。

――すごく早い。たちまちおおきくなってきたひびき、そこに月の光をかすめて銀色の翼が、ス

ーッとかたむいて、上空をまわろうとする。このとき、幹の上に青い光が、パッとかがやくと、すぐ消えた。
（ここだ！）と、赤魔の発光信号だ。
信号の青い光は消えた。が、黒松の森は、やはり（ここだ！）というように、こんもりと地上に立っている。それへめがけて、飛行機が上空に、ひびきを止めると、たくみに空中をすべってきた。スレスレに森を越えて、向こうへおりてゆく。――これこそ、天佑谷の国司青年が前にうばわれた、うらみの飛行機だ。（降りた！）と、見ると、幹の上から赤魔の黒影が、スルスルと下へすべり、森の外へあらわれた。すばやく草の上を燕のように走ってゆく。飛行機の中からも、人影が出てきた。草の中に立ち、ギロギロと目をかがやかして、あたりを見まわす。ほお骨の出ている顔は、名もすがたもシナ人にかえてるユダヤ人の丁殿九だ。前へ走ってきた赤魔を見ると、
「総司令！　どうしたですか、本郷のやつは！」
のろうように言う丁殿九、おそるべきは日本人本郷なのだ。しかし、赤魔バザロフは、ビクとも顔いろを動かさず、大形の懐中電燈を右手にさげたまま、ジッと目をあげて、丁殿九を見つめると、
「持ってきたか、たしかに？」
と、耳の底へしみとおるような冷たい声で、ききかえす。

「無論です、総司令」
丁殿九が、ささやいて答えた。
「何本か」
「七本です。二つの籠に入れてきました」
「よし。ガソリンも十分か」
「この飛行機は、すばらしいですぞ総司令、一時間四百キロは、私の腕でだいじょうぶだ。ガソリンも十分、入れてきました。たしかです」
「フム、これからだ。丁殿九、行けッ」
赤魔は丁殿九をつれて、飛行機の横へ歩きだしていった。夜あけまでには、まだ三時間あまりある。うばった飛行機に乗って、深夜の上空を、ふたりの怪ユダヤ人が、どこかへ飛んでゆこうとする。

## 月下の上空追跡（じょうくうついせき）！

（赤魔バザロフは、怪地下室に残れり！）

これを、彼の部下である利徳三の顔いろから、昼に黒松の森のそばで、本郷は、あきらかに知った。しかし、国司青年は愛機を、赤魔にうばわれたという。

だが、ふたりの赤魔はいないのだ。飛行機をうばって西の空へのがれ去った覆面の敵は、断じて赤魔ではない。本郷は、ひとり、これを知っていた。しかし、彼を怪地下室に捕らえるのは、今やわが大勢のために危険だ。毒ガスの仕掛けありと、利徳三が本郷に告げたのだ。赤魔を地上へ出した方が、味方のために安全だ。彼の武器は、怪地下室だ。

(天佑谷の日本人全滅をちかった彼は、怪地下室を出て、大興安嶺へ行くだろう！)

本郷は、これを判断した。しかし、熱河の地は今や、日本軍と満洲国軍が前進中だ。すがたをあらわせない赤魔は、昼に怪地下室へひそみ、夜に大興安嶺へ急行するだろう。それには、部下にうばわせた飛行機を、夜にふたたび地下室の近くへ飛び帰らせ、それに乗って大興安嶺の上空へ飛ぶ。これが赤魔バザロフの計略ではないか。本郷は、この判断によって、わざと地下室を見すてると、承徳へ馬車に乗っていった。日本軍の爆撃飛行隊に頼んで、武侠嶺の無声機を修理してもらい、それを承徳まで木村と岩崎が操縦してきた。だが、うばわれた飛行機を、うばいかえすのは、うらみをのんで死を決してる国司青年にやらせたい。本郷は承徳で皆に言った。

「無声機には今から、国司くんが乗れ。僕も行く。クロック閣下、高村中尉、木村、岩崎、ルイカール、宣彦、六人は日本軍の飛行機二台を借りて、すぐに天佑谷と武侠嶺へ帰るよう、飛行隊長の辻大佐殿へ僕が頼んでみよう」

これを聞くと、だれよりも変な顔をしたのは、宣彦とルイカールのふたりだ。ルイカールが日本語で言いだした。

「僕は、だめですか、本郷さん！」

宣彦は、だまっていた。けれど、不屈の眼をかがやかして、本郷さんの顔を下から見つめてる。宣彦もルイカールも、ふたりとも無声機に乗って、本郷さんといっしょに、どこへでも行きたいのだ。武侠熱血の冒険を手つだいたい。ふたりの熱心な顔いろを見て、本郷は、おもしろそうに笑うと、ほがらかに言った。

「静かだよ、無声機は、いっしょに乗せてやろう」

「バンザーイ！」

ルイカールがさけび、宣彦は微笑した。うれしいのだ。

夜になった。武侠嶺の無声機を国司青年が操縦し、本郷と宣彦とルイカールの三人が乗り、承徳からまた怪地下室の方へ飛んできた。最新式の無声機だ。なんの音も聞こえない。黒松の森から千七百メートルあまりはなれて、斜面の下へ着陸した。夜ふけまで待った。月かたむいて蒙古の方に流星が飛ぶ、その空に、ふるえてきた爆音、と聞くと、国司青年が太い眉をあげた。

「や、本郷さん、きたですぞ、この爆音だ」

「待て。赤魔が出て乗る。なにをするか。さいごに捕らえて、彼のいう全滅計画を、一挙に破るのだ」

宣彦とルイカールは、おどりあがって顔を見あわせた。いよいよ相手は怪人赤魔だ！

天佑谷の飛行機に、赤魔が黒松の森を出て乗った。はたして覆面のユダヤ人が操縦してゆく。

――北へ、北へ、これを武侠嶺の無声機が追跡した。上に約三百メートル、前に約二千メートルをはなれて、音もなく追いつづけた。さすがの赤魔も、これを知らずにいるらしい。不敵にも大興安嶺の上へ出た。天佑谷の真上へ飛んだ。その空にかがやき出た一条の光は照空信号――白――黄――白！　信号の意味はなにか？

（ワレニ用意アリ。鉄人）

おお鉄人先生の信号だ。昼に高村中尉が、日本軍の飛行機に乗って、天佑谷へ帰っている。鉄人先生は中尉の報告を聞いて、知っていられるのだ。

「シオン同盟の赤魔バザロフ、うばいとった飛行機に乗って、天佑谷をおそうであろう。本郷義昭、これを捕らうべく無声機によって追跡し来たるであろう」

高村中尉は本郷に教えられて、これを鉄人先生に報告した。《ワレニ用意アリ。鉄人》照空信号は本郷に、鉄人先生が発せられたものだ。

「ウム、……」

本郷は、白――黄――白の信号が消えると、うなずいた。赤魔と丁殿九の乗ってる飛行機が、グーンとおりはじめた。谷の気流にあおられて、ズズズと浮いては沈みつつ、おおきくまわろうとする。このとき、夜間望遠鏡を目にあててる宣彦がさけびだした。



「赤魔が落下傘を背おってる！　出た。降りようとする。こちらを見た」
「射ちますか、今！」
と、国司青年が、うばわれてる愛機を見つめて、きゅうに下げ舵をとった。
ルイカールが機関銃のねらいをさだめて、引き金に手をあてた。
「射つな、捕えるのだ！」
と、本郷は、このとき、立ちあがると、自分も落下傘をはずして、背おいながら操縦席へ出ていった。
愛機をうばわれてる国司青年は、義憤にもえて、下へ全速度をかけた。うずまく気流の中にさけぶ。
「やつ、飛び降りますぞ！」
「追え、下へ！　地上で捕えるのだ」
下は暗く谷また谷の流れだ。
「飛んだッ！」
と、宣彦がさけんだ。
赤魔バザロフ、ついに機上から下へ、黒くスッと飛んで消えた。そのまま見えず、――一秒……二秒……三秒、開いた落下傘が、パッと灰色にまるく下へただよいながら、ゆれて降りてゆく……それへ目がけて、機首をさげたわが無声機、義憤必死の国司青年が操縦に、宣彦もルイカー

ルも、前にのめって支柱をつかんだ。本郷は操縦席のはしに立ちあがり、ほとばしるような声をかけた。
「国司くん、きみは愛機をとりかえせ！　おれはバザロフを捕る」
「ハッ！」
飛行機の空中滑走は、落下傘の降りるよりも無論早い。今しも降りてゆく赤魔の下へ、わが無声機がさかさに滑走していった。
（来たな！）
赤魔は、そう思ったであろう。つなを右手ににぎり、左手にバスケットをだきしめ、前にめがけた森の上へ、風に流されて斜めに行く……。そこに、無声機が下からきゅうに機首をあげた、この一瞬、サッと横へ飛び出たのは、本郷義昭だ。これを赤魔は下空に見た。
（なにものか？　彼……本郷だ！）
本郷のほかに、ここまで追ってくるものはない！　赤魔は右手をつなから放した。腹の革帯にはさんでる自動拳銃を、つかみだすや否やグッと下を見つめながら、なおも横に流されてゆく……。
上に赤魔、下に本郷、つなを引くとグーンと本郷のからだが、一瞬空中に止まった。落下傘が開いたのだ。それをねらっていた赤魔、右手をのばすと、空中にさけんだ。
「死ねッ、本郷！」

赤魔がのろう空中宣言だ。上から本郷の落下傘をめがけて、たちまち自動拳銃を射ちだした。下に流れてゆく本郷、赤魔よりも早く地上へ降りようとする。そこにはげしく拳銃弾をあびた。つらぬかれ破れた落下傘が、ふいに速度をまして真下へ降りだした。つなが切られた、あやうし！　なお赤魔は射ちつづけ、本郷は破れた落下傘といっしょに、矢のごとく降りはじめた。墜落(ついらく)だ！……。

「アアッ、本郷さんが！」

剛胆(ごうたん)な宣彦も、顔いろをかえた。ルイカールが赤魔の落下傘をめがけて、横から機関銃を射ち、ほとばしる一分間六百発の弾に、赤魔もまた落下傘を破られて、一直線に降りはじめた。墜落だ！……。

一方丁殿九の操縦する飛行機は、にわかに上へのぼると、西南さして遠く月の光にかすんでゆく。総司令をすてて、どこへ飛ぶのか？

## 地霊(ちれい)の森を囲(かこ)め！

天佑谷の着陸場には、わざと光を発せず、大勢の日本人が蒙古服をきて、皆、空を仰いでい

た。まん中に立っていられるのは、星あかりに、雪のごとき白髪の鉄人先生だ。うしろに東条参謀長が、スックと岩のように立ち、横に高村中尉も、空を仰いでいる。千古の森林が、暗く空をくぎって、向こうに星がまたたいている。北の上空に、今しも一機が方向をかえて、西南へのがれてゆき、無声機が機関銃を射ちつつ横にまわる。下には二つの落下傘が、スーッと墜落しはじめた。さきに落ちたのが、無声機から降りた本郷だ。その上から横へ流れたと思うと、一直線に、落ちはじめのは、赤魔バザロフだ。

森の向こうへ、ふたりとも墜落して消えた。が、それを見ながら、だれもだまっている。鉄人先生がなんとも言われないからだ。おどる血をおさえて、皆がだまってる。高村中尉は足ずりした。そこに、

「捜査！」

ただ一言、鉄人先生が静かに命令された。

さがすのだ。本郷を救い、赤魔をとらえるのだ。鉄人先生の命令に、つづいて東条参謀長が命令した。

「地霊の森をかこめ！」

「地霊の森」とは、どこか。天佑谷の西北に、谷から谷へ、こんもりと白樺の森がしげり、その北の峰へかけて、ひときわたかく杉の大森林が、スクスクと空にそびえている。この大森林を、天佑谷の日本人たちは、「地霊の森」と名をつけた。その森の奥から、流れてくる清水が、方々

の谷間へおち、土の中をもぐって、天佑谷の岩屋へ流れあつまってくる。この清水を、皆が飲む。生命の水だ。しかも、夏はつめたく、冬はあたたかい。大地の霊のような水だ。それが流れでてくる森だから、「地霊の森」という。

本郷義昭が落下傘とともに落ちた。つづいて、赤魔バザロフが同じく落ちた。月かげをかすめて、白樺の森の向こうへ……北の峰へふたりが落ちた。そこが、地霊の森だ。

「地霊の森をかこめ！」

東条参謀長の命令一下、このときそばに立っていた日本人は、鉄人先生のほかに三十八名、中の六名が鉄人先生を守って残り、三十二名が、地霊の森をさして、天佑谷の中の平地から北へ、いっさんに走りだしていった。月に影と足音みだれて、早くも白樺の森の奥へ消えてゆく。

鉄人先生は、しずかに空を仰いでいられる。はるか上空に爆音遠ざかる敵の飛行機は、国司青年がうばわれた愛機だ。方向は西南……どこへ行く？

（西南……北平へのがれるか？）と、東条参謀長も、鉄人先生のそばに立ち、遠ざかる爆音に耳をすました。が、偉丈夫の東条参謀長も、今は、さすがに胸さわぎして、ジッと眉をしかめている。

（本郷は安全か？）

ああじつに心配だ。地霊の森は深い。一直線に墜落した本郷と赤魔が落ちてどうしたか、死か生か？

(安全なれ！　われらの本郷義昭！）

祈る！　東条参謀長ばかりでなく、ほかの五名が皆、だまって祈りながら、月青白き上空を見つめてる。そこに、音なく左の方からまわってきたのは、武俠嶺の無声機だ。翼をかたむけて、地霊の森の上空へ、低くまわってきた。

武俠嶺の無声機に、国司青年は、操縦桿をにぎりしめ、はるか下に暗い地霊の森を、上空から見つめていた。

(どうしたか、本郷さんは？）

消えたのだ、赤魔もまた、落下傘とともに森の奥へ、上から消えた。

赤魔の落下傘へ機関銃を射ちつづけたルイカールも、下を見ながらさけびだした。

「国司さん！　着陸する所は、ないんですか。助けにゆこう、本郷さんを！　すぐに」

(本郷さんは生か死か？）

着陸所は近くにないか？　だが、本郷さんは、飛びおりる前に、なんと言ったか、

「国司くん、きみは愛機をとりかえせ！　おれはバザロフを捕る！」

本郷さんの断然たる命令だ。国司青年は、愛機をとりかえすべく、上空追跡をつづけねばならぬ。しかし今、本郷さんは墜落した。生か死か？　これを見すてて行けるか、国司青年の操縦桿をにぎってる手が、ふるえだした。迷ってふるえる。着陸所は近くの平地にある。白——黄——白の照空信号が今さきにかがやきでた、その平地だ。着陸するか、否、敵を上空に追跡するか、

迷う国司青年の後ろの席に、だまって唇をひきしめてた宣彦が、スックと立ちあがった。右手にもってる夜間望遠鏡を、席へおいた。左手は支柱をつかんだ。その支柱の下に、白くたたまれてるのは、なお一つの落下傘だ。

「国司さん！　愛機を追跡！　僕は飛びおりて本郷さんをさがす」

爆音なき無声機の上に、宣彦のさけぶ声が、朗々と風に散っていった。必死の声だ。しかも、おちついている。これを聞いて、ルイカールは顔をかがやかした、(しまった)と、思ったのだ。自分こそ行きたい。が、落下傘は今一つしかない。国司青年も顔をかがやかした。

「ウム、行くか、宣彦！」

「…………」

答えるよりも宣彦は、支柱の下にある落下傘を、取りあげると両肩へ背おい、胸帯と腹帯を引きしめた。行くのだ、地霊の森へ、本郷さんをさがしに！　赤魔を捕らえに！　決死の落下！

と、宣彦は横にいるルイカールに言った。

「クロック将軍に、よろしく！」

ルイカールは宣彦の手を、ヒシとにぎりしめて言った。

「また会おう、宣彦！」

無声機上に別れを告げる二少年、生別か死別か、ふたりは月の光の中に目を見あわして微笑した。風は西北だ。国司青年は地霊の森の西北へまわりながら、操縦していった。

（死ぬな、宣彦！）
祈る国司青年の後ろに、宣彦は翼の下へ、落下傘を背おってるからだを突きだした。風烈し、左手に支柱をつかみ、右手はつなをにぎって、青暗く見える下界の森を見つめた、この一秒に、サッと横へ飛んだ。球のように空へ落ちた瞬間、かねて国司青年に教えられた落下の練習のとおり、おちついてグッとつなを引いた。上に開いた落下傘が、このとき、下の平地に立っている鉄人先生と東条参謀長の五名の日本人に、パッと白く見えた。
「だれか、下りたぞ」
東条参謀長が、仰いで見つめる上空に、西北から斜めに流れおちてくる、風はげしく落下傘を突いて、その下にゆれながら来る小さな人影、これを見て皆がさけびだした。
「子どもだぞ、ちいさい！」
「宣彦じゃないか」
「地霊の森を、目標にしてるらしい」
「森の外へ、うまく下りるか」
「引っかかると、いかんぞ！」
鉄人先生が、しずかに言われた。
「森を照らしてやれ」
平地にある照空燈が、電気スイッチをおされて、カッとまっ白にかがやき出た。すごい光が、

ギラリと地霊の森の方へ向けられた。白くやみを破って滝のような光だ。それが、はるか向こうの杉森を照らす。その森のいただきへ、宣彦がスレスレに下りてきた。なおその上空に、武侠嶺の無声機が、宣彦のために照空燈の光を感謝するごとく機首をさげた、と思うと、たちまち上へ一転して西北の方へ、速度をましてすごくのぼっていった。上空追跡！　遠く逃れ去った敵を、国司青年とルイカールが、あくまでも追ってゆく。かすかに聞こえる敵の爆音……遠くの爆音を聞きうるのは、わが無声機だからこそ。星の下をかすめ行く、その単葉の機影が、西北の方へ音もなく消えた。

かがやき出た照空燈のまっ白な光に、宣彦は空中でつつまれて、まぶしく下を見た。照らし出された森の緑が、すぐ足の下に見える。飛びおりたとき、はじめに飛行機の高さと風の速度を考えて、森の東南へ着陸する決心だった。胸帯と腹帯を、宣彦は今やはずしかけた。地面へ着いたら、すぐはずすのだ。そうしないと、落下傘に引きずられて、平地でも危険だ。まして今は、森あり谷あり崖あり、もっとも危険な場所だ。地霊の森はおおきい。その上をスレスレに下りてくると、宣彦は両足をちぢめた。風にあおられた落下傘が、グーンと宣彦のからだを上におどらせた。その一瞬、森のはしを越えた。東南へ……谷間へ、ななめに下りてゆく。下はまっ暗な崖だ。きゅうに風の音が聞こえてきた。森にあたる風が、谷へおりて舞いあがる。宣彦は、またおどらされた。と思うと、谷風に吹きあげられた落下傘が、きゅうにおりだした。

（今だッ！）

と、また両足をちぢめた剛胆な宣彦、両手を胸帯（むねおび）へかけた。

崖のはしへズシンと両足がついた、そのとき、すばやく胸と腹との革帯をはずしながら、宣彦は崖へころんだ。今にも落ちかける、ズズズと落下傘のつなに引きずられて、そこに突き出てる岩のかどを、両手にだきしめた。このとき、革帯（かわおび）がはずれた。サーッと吹きあげてきた谷風に、また舞いあがった落下傘が、宣彦のからだを放れたつなと革帯を引いて、向こうの白樺の森の方へ、ゆらゆらと流れてゆく。宣彦はだきしめてる岩の横へ、ようやく立ちあがった。同時に声のあるかぎりさけびだした。

「本郷さん！　どこですかア？」

この声が、森の奥へ遠くひびいていった。が、答える声は聞こえず、風の音だけが地霊の森をかすめて、遠くの方から、鈴（すず）のなってるような、かすかな音が風につたわってきた。谷へおちてる水のひびきだ。

## 夜あけまで休戦だ

三十二名の日本人が、鉄人先生と東条参謀長の命令によって、天佑谷の平地から白樺の森をぬ

け、地霊の森へ入ってきた。
森の上を、今や照空燈のまっ白な光が、あかるく照らし出してる。いただきの葉から枝へ幹へ、かがやく光が照りかえして、ひろい森の中が、ぼんやりと明るく見える。皆の走る足音が四方へわかれて、森の中をかこもうとする。その足音を、宣彦は崖の上で聞いた。
(ああ天佑谷の人たちがきた!)皆、宣彦の知ってる人たちだ。しかし、宣彦は、自分の助けを呼ばず、(これで、地霊の森は、だいじょうぶだ!)と、まず安心すると、自分は、崖の下の方を、ジーッと見まわした。
うす暗い。月の光は森にさえぎられ、かげになってる崖の下……谷底は、深さも知れず暗い。上の方の土だけが、ボーッと赤黒く見えるのは、照空燈の光を森が照りかえしてるからだ。崖の向こうも谷、その向こう岸も崖だ。見ると、そこに、なにか黒いものが、ジリジリと向こう岸の崖を登ってくる。人だ。宣彦は、目を見はると、ハッと岩かげに身をひそめた。
人影が登ってくる。動かなくなった。黒い。ジッと岩のかたまりのように見える。それが、また登りだした。崖の草か木をつかんでくるらしい。ななめに右の方へ、また左の方へ、よろめくように登ってくる。
(本郷さんを赤魔か?)と、宣彦は、岩かげからソッと出ると、崖のはしを向こう岸へ、身を低めながらまわっていった。今や胸さわぎしてきた。
地霊の森の方に、大勢の足音が、奥の方へはいってゆく。それを宣彦は聞くと、

（呼ぼうか）と、すぐ思いかけた。

が、今が大事だ。崖を登ってくるものが赤魔だと、声を聞いて逃げたとき、また捕らえられない、向こう岸は、遠いのだ。

（今すこし近づいてやろう！）と、宣彦は、おどる熱血を胸におさえて、グッとおちついた。

崖のはしが、すり鉢のようにまるくなってる。その上を、宣彦は、向こうの人影の方へ、足音もたてずまわっていった。身を低くし目をさだめて、今こそ上から見きわめようとする、そこに、

「宣彦！」

下から呼んだ小声は、おお本郷さんだ。

「……！」

声も出ず、宣彦はよろこんで立ちあがった。

「静かに待て」

崖を登ってくる本郷義昭、上にいる宣彦に言いながら、そばに生えしげってる岩松を左手につかみ、ジリジリと崖のはしへあらわれると、宣彦の前へ、ゆうゆうと立ちあがった。

ふたりは、うす暗い中に顔を見あわせた。

「宣彦、きみは、もう少しで崖へ落ちるところだったな」

と、微笑してささやく本郷は、左手で自分の蒙古服の胸をつかむと、そばにある岩へ腰をおろした。

宣彦は、ジッと本郷さんの顔を見ながら言った。
「崖の下へ、僕よりも、あなたが落ちてたんじゃありませんか」
「ウム、無声機からきみがおりるところも、見ていたのだ。空は谷の底から、よく見える」
「あなたの落下傘は、どうしました？」
「地霊の森に引っかかった。つなが切れて、枝の上から、おれは墜落したが、やられた！」
「どこをです？」
と、宣彦は顔いろをかえた。
「なに、左の腕だ」
「折れたんですか」
宣彦は、服の上をつかんでる本郷さんの左腕を見た。
「まず折れたろう。宣彦。大きな声をするな、バザロフが近くにおるらしいぞ」
と、本郷は平然としてささやく。
宣彦は、あたりを見まわした。ここは地霊の森の南にある崖の上だ。怪人は生きてるのだ。
「赤魔のやつ、崖へ落ちたのですか」
「落ちるよりもにげた。彼は森のはしへ引っかかった。僕が森の中から、走ってきたときだ。崖をめがけて、バザロフは落下傘のつなを持って飛びこんだ」
「深いんでしょう、崖の下は？」

「約二十メートル、谷底を今までさがしてみたが、さすがにおらん。この近くへ登ったか。夜あけまで待とう」
「天佑谷の人たちが、地霊の森をさがしています」
「ウム、鉄人先生のご命令だろう。バザロフが森にひそんでおれば、今に発見されるぞ。宣彦、きみも腰をおろして休め。まず夜あけまで休戦だ」
ゆうゆうたる日東の剣侠児、折れたという左腕を胸にかけたまま、宣彦をいたわって、足もとへ腰をおろさせた。
(本郷さんは、宇宙の力が人間になったんだ!)
宣彦も立ちあがった。いよいよ戦うんだ。が、敵の怪人赤魔は、どこにひそんでるか。
「本郷さん、赤魔をさがしましょう!」
崖の下を見ると、けわしい岩また岩が赤い土から突き出てる。松と雑草と雪が下の方までつづいて、底が見えず、シーンと谷じゅうが静まってる。宣彦は、ささやいた。
「この崖の下から谷をつたわって、赤魔のやつ、夜のうちに遠くへ逃げたのでしょうか」
「いや、彼は逃げる男ではない」
「では、近くにいるんですか。捕らえましょう」
「どこにおるか。……」
と、言うと、本郷の瞳(ひとみ)がすみきって、向こう岸の崖を見つめた。

今までからだは休戦していた。が、心は一秒も休まず、本郷は赤魔のゆくえを、心で追跡していたのだ。

(天佑谷の日本人全滅を宣言した彼！　はたしてなにをするか？)これを考えさぐっていた本郷義昭、向こう岸の崖を見つめながら、左腕を自分の胸にかけたまま、しずかに言いだした。

「バザロフがねらっているのは、僕よりも鉄人先生だ。彼は鉄人先生を倒して、シオン同盟の勝利を、僕に見せようとする。今、危険なのは天佑谷だ」

本郷がそう言ったとき、地霊の森の中から、さけびながらひとりの日本人が走ってきた。

「そこにいられたのですか！」

高村騎兵中尉だ。よろこびとおどろきに目をかがやかして、いっさんに走ってくると、

「宣彦、きみも！　いつおりてきたのか」

本郷は高村中尉にたずねた。

「地霊の森に、バザロフの足あとでも発見したか」

「いや」

と、高村中尉は失望したように、

「落下傘が二つ、森の中と外に、幹へ高く引っかかってるだけです。あなたも赤魔も見えないので、皆が今、森の中で相談してるところです。向こうへ、いらしてくださいませんか」

「僕が行くよりも、すぐに諸君が天佑谷へ帰るがいい」

「赤魔をさがさずにですか」
「彼が落ちてから、二時間あまりすぎてるぞ。高村中尉」
「そうです。しかし、どこかに倒れてると思うのです。墜落して」
「そうではない。僕も倒れていないではないか。すでに二時間、危険なのは天佑谷だ。諸君は帰って鉄人先生を守れ！　僕は宣彦をつれて赤魔を捕る！」
本郷の命令だ。が、どうして天佑谷が危険なのか？　高村中尉はわからずに、ふと口をつぐんだ。このとき、崖の下を見まわしていた宣彦が、きゅうに指さしてさけびだした。
「あそこの草の中に、あんなものが落ちています」
本郷も高村中尉も、その方を見た。崖の中途の草むらに、キラリと光ってるもの……細いガラスの管（くだ）だ。試験管のようなものだ。それを、ジッと見すえた本郷が、どうしたのか顔いろをかえた。
（本郷さんが顔いろをかえた！）と、宣彦も高村中尉も、ハッと息をつめた。

## 斜面寒天（しゃめんかんてん）のバイキン

「宣彦！　あれを拾ってこい」
顔色をかえた本郷が、すぐ平生の凛然たる顔になって、静かに命令した。
「ハッ」
宣彦は、すぐに崖をおりはじめた。
岩につかまり、足もとの土をふみしめて、草むらの上まで行くと、宣彦は、大きな「狐の牡丹」という毒草の葉の下に、キラリと落ちてるガラス管を拾いあげた。上の口のところがこわれて、下だけが残っている。それを持って、宣彦は崖をよじあがってきた。ザラザラと赤土がおちる。
「これです」
さしだした宣彦の手から、ガラスの細い管――こわれてる試験管を、本郷は受けとると、空にすかしてみた。高村中尉も宣彦も下から見た。
管の底に、白いものが入ってる。動かない。上がななめになってるから、液体ではない。高村中尉がきく、
「なんですか、これは？」
「寒天だ。上が斜めになってる。斜面寒天というのだ」
と、本郷が説明する。
「赤魔ですな、こんなものをおとしたのは？」

「無論だ。ここの崖を飛びおりるとき、この一本をおとしたのだ。ほかに幾本もっておったか。……高村中尉！」

「ハッ」

「すぐに天佑谷へ行け。鉄人先生に報告せよ、『バザロフが地霊の森の谷水へ、おそるべきバイキンを流しました』と、大至急すぐ行け！」

「ハッ」

サッと顔いろをかえた高村中尉、身をひるがえすと、たちまち白樺の森の方へ走りだしていった。

宣彦も顔いろをかえた。

「本郷さん、その試験管の中に、バイキンがいるのですか」

「この斜面寒天が、バイキンを養うのだ。空気にさわる上の面を、斜めにして広くする。バイキンは寒天で育つ」

「なんのバイキンですか、コレラ、ペスト、そういう毒のバイキンを赤魔が、……本郷さん、鉄人先生は、いつも水を飲まれるんです」

と、宣彦の声がふるえた。

じつにおそるべき赤魔のたくらみだ。彼が墜落して、三時間ちかくすぎてる。地霊の森の谷水は、天佑谷の岩屋へ、すでに流れていってるのだ。赤魔は幾本の試験管を割って、谷水の流れへ

投げたか。たとえ一本でも、何億というバイキンが、天佑谷へ流れていったのだ。
「宣彦、森へ行って皆に言え、だんじて水を飲むなと」
本郷は、そう言うと、目をとじた。
天佑谷の照空信号場の平地から、鉄人先生は、東条参謀長と五名の日本人をつれて、岩屋の中へ、帰ってこられた。
石の階段を下り、岩壁のトンネルのような廊下をとおり、奥の方にある広いまるい一室が、鉄人先生のへやだ。すみの方に、木で造ったそまつな寝台がある。遠く、かすかに聞こえるのは、地霊の森から流れてきた谷水の音だ。鉄人先生は、へやへ入られると、正面の岩壁にかけてある大きな日章旗へ、雪のような白髪の頭をさげて、ジーッと敬礼された。ついてきた東条参謀長も、神聖な国旗に敬礼した。五名の日本人は、岩屋の入り口と廊下の要所要所へ、歩哨に立った。
これも木でつくった大きないすへ、鉄人先生は、しずかに腰をおろされた。前の机に、満洲と蒙古とシナの大地図がひろげられている。そばに立ちどまった東条参謀長は、直立不動の姿勢をとって言った。
「本郷と宣彦の生死をたしかめに、わたくしも、地霊の森へ行きたいと存じます」
「きみは、……」
と、鉄人先生は、眼の下の地図を見ながら、しずかに言われた。

「ハッ？」
「バザロフをさがせ」
「赤魔は、本郷と、ほとんど同じ所へ落ちたと存じますが」
「参謀長、夜じゃ」
「ハッ」
東条参謀長は、かしこまった。
夜だ。本郷と赤魔が、ほとんど同じ所へ落ちたとしても、やみの中に、ふたりは地上で、はなればなれになってるかもしれない。すでに今まで、地霊の森から、なんの報告もこないのは、本郷も宣彦も、なお、赤魔も、まだ発見されないからだ。しかも、地霊の森を囲(かこ)みにいってる日本人は、その数三十二名、大勢だ。東条参謀長は、凛として言った。
「わたくしは、バザロフをさがし、生きておれば、捕らえてまいります」
(三十二名の大勢が、今までなにをしておるか？) これを思う東条参謀長、自分が行って三十二名を指揮すべく、バザロフの捕獲(ほかく)を、鉄人先生にちかって、そのへやを出てきた。
廊下へ出てくると、そこに、立ってる歩哨の幸田歩兵少尉が、蒙古服のまま手をあげて敬礼した。東条参謀長は、同じく蒙古服のまま答礼しながら、
「幸田少尉、僕は、外へ出てくる」
「ハッ」

「閣下の守護をたのむぞ」
「ハッ」
幸田少尉は、唇をひきしめて、うなずいた。
怪人赤魔が近くへ墜落した。死んだか、生きてるか、赤魔来たる。わが鉄人先生——尊き閣下のために、岩屋の守護を、なお十分に厳重にしなければならぬ。歩哨に立ってる幸田少尉の責任は、じつに重い。
「たのむぞ！」
と、かさねて言った東条参謀長は、
「閣下に、水をさしあげておいてくれ。ゆうべから、おつかれだろう」
と、言いながら、階段をあがっていった。
廊下の岩壁のあいだに、石をくりぬいた棚がある。幸田少尉は、その棚の上から、コップと盆を取り出した。一方の廊下へまわってゆき、谷水がおちてる小さな滝から、すきとおるような清水をコップへ受けた。そして、鉄人先生の前へ、しずかに持っていった。
「閣下、水をもってまいりました」
「…………」
地図を、ジッと見ていられた鉄人先生、コップを盆の上から受けとって、机の上へ、そのまま置かれた。

## 毒蛇、草にひそむ

ドイツの国に、ハンブルクという大きな都会がある。そこの水道の一ヵ所に、ある年、あやまってコレラ病のバンキンがおちた。すると、その一ヵ所から流れてくる水を、方々で飲んだものが、たちまちコレラ病にかかり、ハンブルクの市中は、大さわぎをした。大勢のものが、おとなも子どもも、コレラ病のために死んだ。これは、お医者の学問の歴史に、今も書かれていて、有名なことだ。たとい少しのバイキンも、ふえるときには、幾億、幾十億と、すぐにふえる。おそろしいのは、病毒のバイキンだ。

ハンブルクとコレラ病のことを、本郷義昭は、今、天佑谷の鉄人先生の上に思い出した。

(残念！　残念！　残念！)本郷が、このときほど、残念に思ったことはない。

(神のごとき鉄人先生が、赤魔バザロフのために倒れられたら、……高村中尉、行け！　一秒も早く、鉄人先生の前へ走れ！)と、本郷は、歯ぎしりして祈った。全身の気力をこめて祈った。

高村中尉は、この時、必死に走っていた。白樺の森をくぐりぬけ、岩を飛びこえ、また崖を下

り、自分のあぶないのを忘れて、いっさんに走りに走る。天佑谷の岩屋へ……！　高村中尉の心は、鉄人先生の前へ飛んでいた。道なき近道だ。谷のあいだを、ひた走りにおりてゆく。はだしの足が岩かどに傷つき、つかんだ木の幹や草に手も傷つき、流れる血もそのままに、走りながら、

(高村中尉、行け！　一秒も早く！)と、本郷さんの力ある声を、中尉は耳のそばに、聞いたように思った。――一秒も早く！　ハッと中尉は、目のまえの崖を飛びおりた。草むらを走る。この一秒こそ、日本のため、満洲国のため、アジアの平和をまもるため、鉄人先生の安全のために、一秒の早さをあらそう。

谷間に草深し。いよいよ天佑谷が下に近く、この谷底を右へまわれば、岩屋の入り口だ。高村中尉は、息をきって走りながら、ガックリと岩につまずいた。(なにを！)と、足をのばしてまた走る、そこに、すぐ前の草むらから、スックと立ちあがった人影、と、目のまえに見た高村中尉は、アッと立ちすくんだ。

(赤魔！)

「タカムラ、どこへ行くか」

日本語を赤魔が言った。蛇のごとき瞳が、高村中尉を見つめて、顔色は死人のように青白く、右手に無声拳銃をにぎりしめて、

「フン、ここは通れんのだ」

あざ笑う怪人バザロフ、天佑谷の近くにひそんで、岩屋へ報告にくるものを、ここにふせぎ止

めようとする。あくまでも鉄人先生と日本人を、岩屋の中に倒そうとするのだ。
一秒の早さをあらそう。高村中尉は青くなった。今、手になにも持っていない。素手だ。赤魔は無声拳銃を、ジリジリと中尉の胸へむけながら、しかも、あざ笑う毒蛇のごとき怪人バザロフ、
「貴様も、鉄人といっしょに死ね！　それが、フム、望みだろう」
「…………」
高村中尉の青ざめてる顔に、タラタラと冷や汗が流れてきた。自分の死をおそれず、鉄人先生の死をあやぶむ、中尉は冷や汗を流したまま、ふるえだした。
青ざめふるえてる高村中尉を見て、赤魔は、なお、あざ笑った。拳銃の黒いさきを、中尉の心臓へ、ピタリとねらいさだめたまま、日本語でささやく。つめたくこおるような声だ。
「見ろ、本郷も、今に死ぬのだ。皆、おれの手によって、この世界とながくサヨナラをする。おれのシオン同盟に、手向かった罰だ。だが、タカムラ、きさまだけは、ここでシオン同盟につけ！　死をのがれる条件として、鉄人とはなにものか？　それを言え、言えばタカムラ、きさまの死だけは、許してやろう。鉄人とはなにものか？」
青い炎をはくような瞳をきらめかし、バザロフは高村中尉を見つめて、
「動くな、言えッ！　死ぬか」
グッとせまってきた、赤魔の顔を見かえして、高村中尉は、あえぎながら、





「言おう、バザロフ！　待て！」
と、自分も日本語でささやいた。
「ウム、命をおしめ、タカムラ、鉄人とはなにものか？」
「鉄人先生は、……」
「本名を言え！」
「日露戦争の時に、戦死された、そのときから、……」
「なに？」
「戦死されたときの名は、……」
ますます小声になった高村中尉、耳をすますます赤魔が、まばたきした一瞬に、サッと下へ身をふせた。同時に身を引いた赤魔の横面へ、中尉の鉄腕、横なぎの早業に、打たれた赤魔は、グッと右手をつかまれた。が、
「奴（レッチ）！」
英語でさけんだ赤魔、つかまれた右手の指を引くと、
「死ねッ！」
引き金をひかれた無声拳銃、音もなく二発を射ちだした。
左の腹へ、ハッシと敵弾二発、射ちこまれた高村中尉、よろきながら、赤魔ののどへ飛びかかった。そこに、なお一発、左腹へまた射ちこまれた。

## チラリと見えて消えた

宣彦は、地霊の森へ、まっすぐに走っていった。

森の外の梢(こずえ)に、上から黄色い落下傘が引っかかり、長いつなが幹の下までさがってる。

(赤魔の落下傘だ！)と、見あげるまもなく、宣彦は、森の奥へ飛んでゆくと、

「本郷さんの命令！」

と、声のあるかぎりさけんだ。

森の奥にかたまってる皆が、ハッとこちらを振りむいた。(宣彦がきた！)と、おどろく皆に、

宣彦は、なおさけびつづけた。

「断じて水を飲んではならない。赤魔が、おそるべきバイキンを、谷水を流した。皆、天佑谷へ帰って、鉄人先生を守れ！」

これを聞いて、三十二名の日本人が、一時に森の外へ走り出てきた。

「本郷さんの命令か、宣彦、どこに本郷さんがいられるのかッ」

先頭に南工兵大尉が、走ってきながらたずねた。

「向こうの崖の上に！」
宣彦は後ろを指さした。
「よし！」
皆が力づいた。しかも、赤魔バザロフが、どこかにいるのだ。谷水へバイキンを流したという。天佑谷あやうし！　赤魔を捕えて、わが鉄人先生を守れ！　と、三十二名の日本人が、宣彦とともに、地霊の森をバラバラと出てくると、
「どこか、本郷さんは？」
南大尉が、またさけびだした。
崖の上に、本郷さんの姿が見えないのだ。今、五六分の間だ。宣彦は、その崖の上へ、飛ぶように走っていった。
（どこへ？）と、見おろす崖の下に、赤土と草むらと小松がしげり、その下にチラリと見えたのは、本郷さんの頭と肩だ。それが草の中へスッと消えた。
――「僕は宣彦をつれて赤魔を捕る！」本郷さんは、そう言った。宣彦は、ハッと息をつめると崖の下へ、一気に飛びおりた。本郷さんは赤魔を、見つけたのではないか？　と、赤土から草むらへ、スルスルと下りてゆく、上から南大尉の声が聞こえた。
「宣彦、どこへ行くかッ」
「本郷さんの所へ！」

「おお、よし、先頭から十二名、おりろッ。おれも行く！　二十名は岩屋へ走れッ！」
南大尉が命令した。
崖の上から、皆が二手にわかれた。ヒラリヒラリと飛びおりる十二名、後の二十名は白樺の森の方へ、おくれじと走っていった。日本人は敏捷(びんしょう)だ。ものをも言わず、命令どおりに動く、しかも、今や天佑谷の危機だ！　鉄人先生の生死は？　水を飲まれたか？　赤魔を捕らえろ！　と、二手にわかれた日本人の足音が、朝の大興安嶺に、谷に、森に、静けさを破って、近くから遠くへひびく。その中にすずしく下から聞こえるのは、谷より谷へ流れゆく水の音だ。
谷底の岩と岩とのあいだを、サラサラと流れおちてる清水が岩にせかれてまた下へ、岸にあふれながらうずまいて行く。小さな急流だ。が、深い。これを、岩の上に立ってジッと見つめてる本郷義昭、あたりに白雪が、積もったまま残ってる。そこに、宣彦が雪をけって、おりてきた。つづいて、南大尉以下十二名が、先をあらそって一時に飛びおりてきた。
「本郷少佐殿、赤魔を見つけましたか」
と、南大尉が息をきってきく。
ズラリと十二名が、谷底にならぶと、本郷少佐に敬礼した。
本郷は、うなずくと、谷底の方を見わたして、
「いや、バザロフを見つけるよりも、南大尉、きみたちは、この流れの水路を知ってるか」
「水路の中途は、しりません。最後は岩屋のそばへ、たしかに流れているのですが」

「行くのだ！　この水を、早く流さねばならぬ。途中、流れに岩があれば岸へおこせ。近くの雪を流れへおとせ。水に岸を洗わせるのだ。六名は左岸を、六名は右岸を行け。注意！　敵の試験管を発見せよ」

皆が顔をひきしめた。赤魔が今なお、この下流に、毒の試験管を仕掛けてるのか？　本郷と宣彦が先頭に、南大尉以下十二名が両岸にわかれると、流れにそうて岩から岩へ、たちまちおりてゆく。

近くの白雪をけおとして、水量（みずかさ）をふやし、流れをさまたげる大小の岩を、見ると引き起こして岸へ引きあげ、十四名が下へ下へとおりてゆく。本郷はくだかれた左腕を、蒙古服の胸にかけて、宣彦に命令した。

「宣彦！　斥候だ、先へ行け！」

「ハッ、僕は斥候！」

言ったかと思うと、宣彦はサッと前の方へ飛びおりていった。

機敏（きびん）、熱心（ねっしん）、沈着（ちんちゃく）、剛胆（ごうたん）、そして、不意の危害をふせぐために、こまかい注意を、いつも怠ってはならない。これが斥候のやり方だ。宣彦は、谷の流れにそうて機敏におりてゆく。燕のように早い。しかし、足もとの岩、あたりの草むら、遠くの崖の方まで、熱心に眼と耳を働かして、（変わったことはないか？）と、こまかく気をつけて走った。すると、

（試験管を発見！）岩の切れめの草むらに、見よ、一つの試験管が、細い針金にむすばれて、草

の根の下から、水の上へ浮いている。流れが管の口へ入り、また出てゆくように、うまく結ばれてるのだ。宣彦は、グッと沈着してあわてず、その試験管の針金を、草の根からはずした。

(赤魔！　バイキンが少しずつ流れ出て、いつまでも谷水が毒になるように、しかけたのだ)と、気がついた宣彦、なお注意して、その試験管をにぎったまま、下の方へ岩を伝わってゆくと、

(どうしたのか？)右手の方の雪があかくそまっている。血だ。上の草むらから流れてきたらしく、雪の斜面に三すじ紅く血がしみている。宣彦は立ちどまった。草むらをふみわけて、上の斜面へ剛胆に、登って見ると、

「………」

おもわずさけびだそうとして、グッと唇をつぐんだ。

(高村中尉だ、血の雪の中に倒れてる！)

赤魔が岩屋へ？

宣彦は泣いた。高村中尉は死んでいる。草むらの雪に仰むき、血の中に、かたく両手をつかみ、すでに息たえている。宣彦は、そばに膝をついたまま、無念さに泣いた。自分を弟のように

かわいがってくれた高村中尉、熱河へもいっしょに行った。
(僕が、僕が仇をとる！　高村さん、赤魔は僕が仇をとる！)と、涙を流し、すすり泣きながら、宣彦はハッと立ちあがった。自分は斥候だ。これを、早く本郷さんへ報告するのだ。走ってゆこうとすると、
「ここだ、宣彦、待て！」
本郷さんの力づよい声が、斜面の上から聞こえた。いつのまにかまわってきてる、その斜面の上に、スックと全身をあらわした本郷義昭、
「来い、ここへ！」
向こうの崖を見ながら、宣彦を呼んだ。
「高村さんが、ここに！」
と、宣彦はさけびながら、本郷さんのそばへ走っていった。
「知ってる。バザロフの無声拳銃に倒れた。高村騎兵中尉！……」
と、言ったまま、声がきれた。本郷さんの目にも、涙がにじんでいる。
宣彦は、あふれる涙をこらえて言った。
「赤魔が、近くにいる。本郷さん、仇を僕がとる！」
「彼は逃げたぞ、二十分前だ」
本郷さんの右手が指さす、前の方の雪と草むらに、血がつたわってる。赤魔が高村中尉の死骸

を、引きずってきたあとだ。彼の足あとが、雪の上にみだれて、血の赤黒い色は、それが二十分ほど前であるのを、すごくあらわしている。ところどころに血のあとが切れて、と見ると、また細長く向こうへつづいている。銃傷（じゅうしょう）の血だ。発射の音は聞こえなかった。赤魔の無声拳銃が高村中尉を倒したのだ。

「この足あとを追って、本郷さん！」

と、宣彦はほおに涙を流したまま言った。

「待て。遠くまで足あとを残すバザロフではない。崖の方向を見ろ、宣彦！」

「…………」

宣彦は、キッと崖の方を見た。

向こうに赤土の崖が、けずられたように横へつづいてる。人間ののぼる崖ではない。その下に、低いにれの並木がしげって、左の方へ地面がさがってる。赤魔が二十分前に、逃げたとすると、にれの並木の下を左へ走り、この谷底の外へ、今や出てるときだ。宣彦はさけびだした。

「あのにれの並木の端が、岩屋の東の入り口です、本郷さん！　赤魔は、岩屋を、おそったのではないか？」

ああ赤魔の計略は、岩屋の日本人たちを、すでに外へ、おびき出した。谷水を飲むものを外で倒し、一方、岩屋の中に残ってるものをも、鉄人先生をはじめバイキンの水に倒し、そこへ赤魔が不敵にも、単身、岩屋を襲撃（しゅうげき）したのではないか。しかも、今、本郷義昭は、すでに一歩一歩、

赤魔のあとに後れてるのだ。その本郷は、しかし、だまって斜面の上に立っている。宣彦がさけびだした言葉も、耳に入らぬのか、まばたきもせず、にれの並木の方を見つめて動かず、左腕を胸にかけ、岩のように立っている。

（どうするのか、本郷さんは、どうするのか？）と、そばに立ったまま、鉄人先生の危機を思う宣彦は、しかし、本郷さんを信じて、同じく崖の方を見つめていた。

このとき、バラバラと崖の上に人影があらわれた。走ってゆく。岩屋へ急ぐ二十名だ。が、

（おくれてはいないか、赤魔はすでに岩屋をおそい、鉄人先生に危害を加えてはいないか？）

と、宣彦は、本郷さんのそばに、青ざめたまま突っ立っていた。

すると、本郷は、崖の上を走ってゆく日本人たちに、なにか信号するらしく、右手を高くあげ、横にある岩の上へ飛びあがった。朝の光をあびて、なお全身をあらわし、しきりに右手をふりながら、かかとを上げてズッとのびあがった。

二十名の勇敢な日本人が、崖の上を、いっさんに走ってゆく。今や一秒も早く！　と、天佑谷の岩屋へ急ぐ。

（鉄人先生の危機だ！）と、皆が顔色をかえてる。おそるべき赤魔、ついに鉄人先生の命をねらったのだ。日本人はだれも皆、自分の命にかえて鉄人先生を守る。（先生は安全でいられるか？今一秒が危機だ！）と、けわしい崖の上を必死に走ってゆく。下は数十メートルの垂直の谷だ。着ている蒙古服の裾が、足にからんで、ふみはずしたら、岩屋へ行く前に落ちて死ぬ。皆が目を

見はり、唇をひきしめ、岩を飛びこえ、木の根をよけて走りに走る……。
崖の下には、今しも本郷義昭が、谷の底から岩の上へ飛びあがり、右手をふって信号してる。それを、上の二十人は、だれひとりも気がつかず、みんなが自分の足もとと前を見つめて、いっさんに走ってゆく。本郷さんのそばに立ってる宣彦は、もうたまらずに、いきなり、
「オーイ！　気をつけーッ！」
と、号令のようにさけんだ。
しかし、大興安嶺の朝風つよく、宣彦のさけび声も風に吹きとばされて、高い崖の上へ聞こえず、（なにをッ、もう一度！）と、宣彦は、きゅうに背のびして、息を吸いこんだ。このとき、本郷さんは岩の上に、スックと全身をあらわして、まだ信号しつづけてる。宣彦は息をすいこみながら、ハッとふしぎに思った。
（見てないものに、なにを信号するのか？）
ふしぎだ。宣彦は、本郷さんの右手の動き方を、下から見た。すると、手旗信号と同じものでなく、点と線を示す信号でもない。――わからない信号だ。上下にふるかと見ると、グルリとまるくまわし、また天へ字を書くように右手を動かす。しかも、本郷さんは崖の上を見つめているのだ。
（こんな信号は、天佑谷にない！　見てもわからない信号を、本郷さんは、なぜ、やってるのか。ああ今、一秒を争う危機に！）

宣彦は本郷さんを、あくまでも信じている。しかし、今は、あまりにふしぎだ。本郷さんが、敵の赤魔におくれている。しかも、見ていない味方に信号する。それがわからない信号だ。（どうしたんだ？　どうしたんだ？）と、宣彦は、岩の下から本郷さんを見つめた。

本郷さんは、朝日をあびて、岩の上に全身をあらわし、顔を光へ向けてる。宣彦は崖の方を見た。すると、だれひとりもまだ信号に気がつかず、二十人が今や天佑谷の方へ、いっさんに走っていった。

## 毒の水を飲まれたか？

岩屋が近い。崖のはしから石段を下りると、岩屋の第三入り口が、草むらの中にある。二十名の日本人は、崖のはしまで走ってきた。そこに、堂々と石段をあがってきたひとりの偉丈夫、と見ると、東条参謀長だ。

「どうしたのか。赤魔をとらえたか」

と、東条参謀長は、おちついてたずねた。

二十人の先頭にいる白井砲兵大尉が、息をきってたずねかえした。

「ハッ、高村騎兵中尉が、帰りませんでしたか」
「いや、帰っておらん。赤魔を捕えたか。本郷少佐は、どうしたか」
「それよりも、参謀長殿！　赤魔バザロフが、病毒のバイキンを、谷水へ流しました」
「なに？」
おちついている東条参謀長もサッと顔色をかえた。
（しまった！）
幸田少尉に、東条参謀長はなんと言ってきたか、「閣下に水をさしあげておいてくれ。ゆうべから、お疲れだろう」と、これを聞いた幸田少尉は、きっと、谷水をコップにくんで、閣下——鉄人先生へ、さしあげたにちがいない。
（しまった！）
鉄人先生は、水を、いつも飲まれるのだ。
にくむべき赤魔！　本郷は彼を捕えずにいるのか。それよりも、鉄人先生は水を飲まれたか、今、危うし！　と、顔色をかえた東条参謀長、歯ぎしりすると、
「行けッ、岩屋へ！」
さけぶと、自分が先に石段を飛ぶごとくおりていった。
白井大尉をはじめ二十人が、一列に石段をおりてゆく。草むらと崖のあいだへ、石段がつづいて、ここが岩屋の入り口だ。立ってる歩哨は、遠藤弘（えんどうひろし）という青年だ。弘は、おどろいてたずね

た。

「参謀長殿、なにがありましたか」

「きみは、水を飲んだか」

「ハッ、今さきに飲みました」

「行けッ、医務室へ、診察を受けろ！」

「ハッ？」

弘は、なにごとかとおどろいた。しかし、命令だ。すぐに岩屋の中の医務室へ、走っていった。代わりの歩哨に、二十人の中のひとりが、すぐ立った。

東条参謀長は、まっさきに石段をまわってゆきながら、

「井上博士を呼べ！」

と、走りながら命令した。

「ハッ」

と、ひとりが、遠藤弘といっしょに、医務室の方へ走って行った。

トンネルのような石段から廊下へ、東条参謀長が走ってくると、蒙古服のかくしから、呼び笛をつかみ出して、いきなり吹きならした。非常警笛だ。廊下から廊下へ岩壁を切るようにひびいてゆく。吹きならして東条参謀長は、声のあるかぎりさけんだ。

「命令！　水を……水を飲むな……飲むなッ！」

この非常警笛とさけび声が、奥にいられる鉄人先生へ、聞こえないはずはない。ああ今、まだ水を飲まずにいられるように！　と、石段を下りてきた皆が、祈りながら廊下へ走ってきた。先頭の白井大尉が、岩屋の中の要所要所へ、皆をわけて歩哨に立てた。赤魔が生きているのだ。怪人バザロフ、この天佑谷をねらって、どこにひそんでいるのか？　あらゆる要所に、皆がバラバラと走ってゆく。その足音とともに、谷水のひびきが、きゅうに高く聞こえてきた。本郷の命令によって、南大尉以下十二人が、上流の岩を起こし、岸の雪を投げながら進んできた。水がふえて早く流れだした。その水音だ。東条参謀長は、岩屋の奥へ……鉄人先生のへやへ、まっしぐらに走っていった。

（水を、毒の水を飲まれたか？）

鉄人先生のへや――

扉の前に、まばたきもせずに立ってるのは、幸田少尉だ。非常警笛がひびき、東条参謀長の命令が聞こえ、大勢の足音が方々へわかれていった。そこに、走ってきた東条参謀長、敬礼する幸田少尉に、すぐたずねた。

「閣下に、水をあげたか」

「ハッ、あげました」

「………」

ものをも言わず、東条参謀長は、扉をたたいた。

「入れ」
鉄人先生の静かな声が聞こえた。
サッと扉をあけて、中へ入った東条参謀長、鉄人先生の机に、コップを見た。からだ。
(飲まれた!)
「閣下!」
と、東条参謀長は、前へ行くと、血涙をふるって言った。
「水を、お飲みでございましたか」
鉄人先生は、このとき、目の下に満洲と蒙古の大地図を、ジッと見つめたまま言われた。
「飲んだ。水になにかあったというのか」
「バザロフが、病毒を谷水へ流しました。ただいま、井上博士がまいります」
と、東条参謀長の声がふるえた。
そこに、白井大尉が入ってきた。机の上のコップを見ると、ハッと立ちすくんだ。すると、鉄人先生がふりむいて、
「本郷と宣彦は、どうしたかの」
と、たずねられる声も静かに、瞳がすみきって、泰然(たいぜん)としていられる。
白井大尉は、鉄人先生の威厳(いげん)に打たれながら、涙ぐんで答えた。
「わたくしは、会いませんでした。しかし、本郷少佐も宣彦少年も、無事であります」

「ウム」

鉄人先生は、うなずいて、また大地図へ、眼をそそがれた。毒のバイキンを、すでに飲まれたのだ。しかも、自分のことはなんとも言われない。本郷少佐と宣彦少年のぶじを聞かれると、うなずいて、またなにごとか大地図の上に、ジッと計画を立てられる鉄人先生、雪のごとき白髪を後ろへたれて、自分の生きることも死ぬことも、考えていられないようだ。赤魔のことなど、まるでたずねもされない。この偉大な鉄人先生を、東条参謀長も白井大尉も、目のまえに見て、ふたりとも心に誓った。（どうしても、この尊い鉄人先生を失ってはならないのだ！）

ふたりはへやを出た。扉をしめると、幸田少尉に白井大尉がたずねた。

「きみは水を飲んだか」

「ハッ、飲みました」

ああ岩屋に残っていたものが皆、おそるべき毒水を飲んでいる。東条参謀長の命令は、おそかったのだ。

天佑がないか？

東条参謀長は、幸田少尉をつれて、医務室へ急いできた。同じく岩屋の中だ。しかし、清らかな診察室と病室と実験室が、いすや寝台や、さまざまのりっぱな器械をならべて、新式の病院のように見える。その診察室に、遠藤弘がひとりいすのそばに不動の姿勢で立っていた。東条参謀長がたずねた。

「博士は、どうされたか」

「実験室におられます」

「きみは診察（しんさつ）を受けたか」

「まだです。参謀長殿！　僕よりも、閣下は水を飲まれましたか」

「残念だが、飲まれた」

これを聞いて、弘も青くなった。

東条参謀長は、診察室の隣にある実験室へ、急いで入っていった。見ると、すみの方のまるテーブルに、井上博士が大きな顕微鏡（けんびきょう）を置いて、上からジッとのぞいてる。横にも助手がふたり、別々の顕微鏡をのぞいている。ふと顔をあげた井上博士が東条参謀長を見ると、すぐに言った。

「今、歩哨の人から話を聞いて、谷水を見てるところです」

「なんのバイキンです？　すぐ手当をして頂きたい、注射でもなんでも！　閣下がすでに飲んでおられる」

「…………」

医学と薬学の両方とも博士である、その井上宏二博士が、だまってしまった。
東条参謀長は、そばへ行ってたずねた。
「見えないですか、病毒のバイキンが？」
（ああそれならば、じつに安心だ！）
井上博士は、顔をふって答えた。
「明らかに見えます。しかし、わからないのです」
「見える？　わからないとは？」
「これがなんのバイキンであるのか。残念ですが、わたしは、まだ知らないものです」
「…………」
こんどは東条参謀長が、だまってしまった。井上博士は、悲しそうにうつむいて言いだした。
「おそらくシナの奥地か、あるいは熱帯地方から、採ってきたものでしょうが、世界の医学界には、まだ発見されていないバイキンです。すくなくともわたしにはわからない。まことに残念ですが、注射も手当の方法も、わたしには不明です。バザロフというのは、どこの人間ですか」
「ユダヤ人です」
（ユダヤ人の赤魔のために、鉄人先生の尊い命が、遂に絶望なのか。この大輿安嶺の奥に、遂にたおれられるのか。名は天佑谷とつけたが、今ここになんの天佑もないのか！）と、東条参謀長は、こみあげてくる無念の涙をこらえて、顕微鏡の前へ行った。





（わが鉄人先生を倒すバイキンは、どれか？）

東条参謀長が、顕微鏡の中を見ると、前にある電燈の光に照らされて、明るいレンズの下に、紫いろのバイキンが、チラチラと走るように動いている。クモかタコのように足を幾本もはやして、何匹となく右に左に、えものをさがしてるようだ。一所へかたまるかと見ると、すごい早さで方々へ動いてゆく。これを赤魔が養っていたのだ。

井上博士がそばから、もう覚悟してるように言う。

「わたしも助手も、これを知らずに飲みました。飲んだものは、おそらくきょうかあすに発病するでしょう。このバイキンの動き方と、ふえる力を見ますと、コレラやペストなどのバイキンよりも、さらに猛烈です」

東条参謀長は、顔をあげて博士を見つめると、願うようにたずねた。

「博士！　それでは、どうしたらいいのです？　今、鉄人先生をはじめこのバイキンを飲んだものを救う人は、あなたのほかにない！」

「参謀長！　今さきにも申しあげました。このバイキンがなんであるか、わからないのです。残念ながら、たしかな治療の方法が、わたしにはわからないと、また申しあげるほかはありません」

なんという悲痛なことばか。これを聞いて、東条参謀長も、うつむいた。

至急に、鉄人先生をはじめ発病するものを、奉天か大連の大きな病院へ送るか。しかし、大輿

安嶺から道は遠い。否、たとい近くても、鉄人先生は、それを承知されないであろう。先生は大興安嶺を、自分の墳墓の地だと、前からきめていられる。しかも、博士は、「きょうかあすに発病」と言う、「治療の方法がわからない」と言う。万事休す！　にくむべき赤魔バザロフが、ついに勝利を占めたのだ。

こうしているうちにも、猛烈の病毒バイキンは、鉄人先生をはじめ飲んだ人々の血の中に、非常な勢いでふえているのだ。ああ赤魔を呪え！　今や天佑谷の岩屋の中は、足音一つ聞こえなくなった。廊下や出口の各要所に立っている歩哨も、バイキン異変のなりゆきを心配して、（どうなってゆくか？）と、それのみを思っているのだ。岩屋全体が死の影につつまれたように、音もなく静まっている。外から聞こえるのは、早い流れのひびきだ。きのうまでは命の水だった。今は命をうばう毒の水となって、しかも、あざけり笑うような音をたてて下流へ行くのだ。

「静かに！」と三度言う

上流の水もきゅうに早くなっていた。南大尉以下十二人が、岩を起こし雪を水に投げ試験管をさがしながら、両岸を必死におりてきた。そこに、南大尉は、高い岩の上にスックと立ってる本

郷少佐を見た。左手を蒙古服の胸にかけ、右手をふっている日東の剣俠児、朝日を全身にあびて、高く突っ立っている。しかし、向こうの崖の方を見つめて、なんの信号をしてるのか？
と、南大尉もふしぎに思った。このとき、

「ヒューッ」

草むらの上に、風を切って飛んできた弾（たま）のひびき、と思う瞬間（しゅんかん）に、

「ヒュッ！」

また一発、近く飛んできた。

射った音が聞こえず、無声銃だ！　なにものか？　と、弾のきた方向を南大尉が見る、そこに岩の上から本郷少佐が、よろめくように飛び下りた。

(射たれたか!?)と、南大尉は走りだした。

「本郷さん！」

と、宣彦は、本郷さんの横からさけんだ。

岩の下の草むらへ、膝をつけた本郷義昭、左の胸をおさえると、

「バザロフ、射撃はまずいぞ。四センチ上だ」

と、眉をあげて言うや否や、そこに走ってきた南大尉を見て、「静かに！」と、岩の陰へあおむけになった。

ハッと宣彦は気がついて身がまえた。鉄人先生の命をねらってる赤魔は、本郷さんをもねらっ

てるのだ。どこかにひそんでる、それとも岩屋をおそったか、その赤魔をさそい出すべく、本郷さんは今まで岩の上に全身を高くあらわし、だれにもわからない信号をつづけていたのだ。(赤魔を岩屋へ入れては、天佑谷危うし！)と、身をもって赤魔を引きつけた本郷剣俠児、はたして射ちだした彼バザロフの無声拳銃によって、彼のひそんでる場所を今こそ知った。

(赤魔、近きにあり！)

すぐ向こうの草むらだ。本郷は射たれた。一発の命中、心臓の四センチ上だ。岩のかげへ飛び下りてあおむけになると、

「静かに！」

と、また言った。

宣彦は岩の横に身がまえながら、本郷さんの胸を見た。

南大尉は、ささやいて言った。

(傷は重いか？)

「部下を、呼んできます」

「待て！　静かに！」

本郷は三度、「静かに」と言った。

蛇のごとき赤魔、草むらにひそんで、岩の上からよろめき落ちた本郷を、見たのだ。——一発の命中、死んだか？　本郷の生死を、たしかめずにはいないのだ。彼は自分の勝利を、本郷の前

に宣言せずにはいない男だ。
（来るぞ、赤魔が！）
傷つきながら、これを待つ本郷義昭、「静かに！」と、三度言うと、左胸の流血を右手でシッカリとおさえたまま、耳をすました。
——来る、かすかに草をかきわける音が、岩の向こうに聞こえてきた。「静かに！」と命令された宣彦と南大尉は、身動きもせず、同じく耳をすました。——来る。低く聞こえてくる草の音、はってくるらしい……。
（鉄人先生の命をねらい、本郷さんを射ち、高村中尉を殺した赤魔！　かたきは僕がとる！）
と、宣彦は歯をかみしめて身ぶるいした。
今や大きな岩一つが、近づいてくる赤魔の姿をかくしてる。味方の三人をもかくしている。互いに姿が見えず、赤魔のはってくる音が、深い草むらの中に聞こえる。バサリと雪が草から落ちた。その音が消えた。——来る。岩のすぐ向こうだ。まわってきた。また雪が落ちた……。
——来る！　赤魔が来る！　岩の向こうに、ガサリと雪の落ちる音、はって来る。草をわけて来る。その音が、宣彦の耳に、ありありと聞こえる。すぐ向こうだ。
（赤魔バザロフ！　来たれ！）
岩のかげに身がまえた宣彦、そばにあおむけに倒れてる本郷さんを、一秒のうちに見た。
（本郷さん！　今赤魔が！）と、目で言う宣彦、ハッと顔色をかえた。

本郷さんは目をとじている。心臓の上を左手でおさえて、傷が重いのか、身動きもせず、死んだ人のようだ。これを、南大尉も、おどろいて見ると、このとき、本郷さんがサッと右手をあげた。振ると下へおろした。

（かくれろ！）と右手の信号命令だ。

南大尉も宣彦も、この一秒に、岩かげへふたりが、スルリとまわった。音もなく伏せた。すぐ飛びだせる身がまえの宣彦、

（かたきは僕がとる！）と、息をつめ、全身に気あいをこめた。

そこに、ふいに、――岩のはしへ、スッと下から青白い顔を出したバザロフ、草の中に本郷を見ると、サッと拳銃のねらいを本郷義昭の頭へつけた。と、すぐに、

「フム、本郷、心臓の四センチ上、傷は、どうか？」

蛇のような瞳をきらめかして、赤魔が言う。本郷の心臓の四センチ上を、わざとねらったのだ。一発に殺さず、まず傷つけて、自分の勝利を、本郷に宣言しようとする。にくむべき赤魔のことばを、宣彦も南大尉も、岩のかげで聞いた。今にも飛びだそうとする、しかし、（かくれろ！）と、今さきに、右手信号で命令されたのだ。

命令は神聖だ。「出ろ！」と言われるまでは、飛びだせない宣彦と南大尉、岩のかげにひそんで、ジリジリする。そこに、赤魔の声が、

「本郷！　天佑谷の鉄人と部下の日本人は、今、三日のうちに全滅だ。貴公もここに死ぬ。この

大輿安嶺に、今やシオン同盟の勝利だ！　おれは誓いを破らない男だからな、フム、おれの勝利が、わかったか、本郷！　貴公の傷の見舞いに、おれはきたのだ。貴公の死んでゆくのを、見送ってやるためにな。そこで、この親切なバザロフに、オイ、本郷！　なんとか言え。一言、死ぬ前に感謝すべきだろう！」

自分の勝利を、こうして宣言する赤魔バザロフ、無声拳銃のねらいを、本郷の頭へつけたまま、草の上をジリジリと近づいてきた。その声、横の岩へねばりつくように、また言いだした。

「貴公ら日本人の天佑谷は、シオン同盟が占領するのだ。もう一つ、武侠嶺か、これもおれが、全滅させて占領するのだ。二つとも頂戴する。本郷！　死んでゆく貴公の耳へ、これが聞こえるか。なんとか言え、今一発、無声の弾だ。すばらしく通るのを、貴公の頭へ！　これがおれのさいごの贈り物だ。なんとか言えッ！」

赤魔は本郷になにか言わそうとする。あくまでも自分の勝利を、本郷の死ぬ前に自慢しようとする。青白い顔は愉快そうにかがやき、眼はらんらんときらめき、あざけり笑うくちびるをゆがめて、

「どうか？　本郷！　今が決勝点だ。すばらしい勝敗だ。引くぞ、決勝の引き金を！」

ジッとあおむいて、身動きもせずにいる本郷を、目の下に見すえた赤魔が、ついに、今にも引き金を引きかけた。――一発！　音もなく弾が飛びだす、その時が本郷のさいごだ。剣侠児の死だ。

本郷は目をひらいた。自分の顔の上に、バザロフの青白くほこっている顔を見た。

雄傑と怪人、上と下から顔を見あった、一秒二秒……、本郷の唇が動いた。朗々たる声だ。

「バザロフ！　勝敗いまだ決せず！」

「なに？」

赤魔の目が血ばしった。

「引け、貴様の言う決勝の引き金を！」

宣彦も南大尉も飛びだそうとする。しかも、本郷さんの凛たる声、そばの岩をも動かす気合いあふれて、

「引かぬか、バザロフ！」

聞くものを引き裂くごとき底力の声に、宣彦も南大尉も、グッとおさえられた。

「死、死ねッ、本郷！」

赤魔がさけんだ。同時に、右手の指に引き金を、引く一秒に……その指、動かず、しびれてかたくのびた。赤魔は顔色をかえた。指……五本とも動かず、手へ、腕へ、肩へ……しびれが、ジジジジと指からあがってきた。強力な電気をかけられたよう、これを一瞬に知った赤魔バザロフ、顔色をかえて立ちあがると、しびれてる右手から、バサリと拳銃が草の中へ落ちた。

勝敗いまだ決せず、本郷はあおむけのまま、岩の上の頂を、まばたきもせず見つめてる。黒い蒙古服を着てる全身から、見えない気力がほとばしり、それが赤魔の右腕へ、下から噴火するご

とくそそがれている。赤魔は、よろよろと後ろへさがった。落とした拳銃を拾おうとする。しかも、本郷の気力におされて、からだが前へ動かず、右腕……肩……胸へ、からだの右半分がしびれて、

「………」

顔色をかえたまま、赤魔は、ワナワナとふるえだした。

静かだ。気力の闘いだ。静中の動、今や本郷があおむけのまま勝っている。

ワナワナとふるえだした赤魔、ついに立ちすくんだ。このとき、本郷の顔色も青ざめてきた。

勝敗いまだ決せず。静かだ。

静かさに、宣彦と南大尉は、おもわず両方から顔を見あわせた。

(射ったのではないか!?)

(赤魔が、本郷さんを!)

(行けッ!)

今はジッとしてられないふたり、岩かげから赤魔の後ろへサッとおどり出た。ふりむく赤魔、そこに、

「捕らえろッ!」

本郷の一喝、ビリリッと岩にひびいて、宣彦も南大尉も立ちすくんだ。が、その一秒に、おどりかかったふたり、左手で防ぐ赤魔は右手が動かず、たちまち草の上へねじ伏せられた。

「帯をとけ、宣彦！」
と南大尉がさけぶ。
「こ、この野郎ッ！」
と、赤魔の左腕を、ねじあげてる宣彦が、なお下へ組み伏せると、自分の帯をときだした。
赤魔をしばるのだ。

今一、二時間に！

本郷は、深く息をすいこむと、静かにはきだしながら、
「身体検査」
と、あおむけのまま言った。
「立て、バザロフ！」
と、南大尉が、後ろ手に、胸からしばられた赤魔を引き起こすと、
「本郷さん、こいつは日本語がわかるのですか」
と、ききだした。

「よくわかるやつです」
と、宣彦は、赤魔の顔を、ジッと見つめると、日本語で、
「バザロフ、身体検査だ。アッ、こいつ、顔をしかめた。なにか持ってるな」
いつも口数の少ない宣彦が、このときはさけびだした。赤魔を生け捕った。よろこびあふれて、さけびだすと、本郷さんに言われた。
「宣彦、時間を惜しめ！」
「ハッ」
とおどりあがった宣彦、第一に赤魔の上着のボタンをちぎるようにはずしだした。
宣彦のさけび声を聞いて、流れの岸に岩を起こしていた十一人が、なにごとかと、雪の上を走ってきた。見ると、ひとりの白人が南大尉と宣彦に捕われ、岩かげに本郷少佐があおむけにたおれている。そばの草むらに落ちてるのは、黒い無声拳銃だ。先頭に走ってきた佐野少尉が、大声できいた。
「本郷少佐殿、どうされたのですか」
「…………」
本郷は、また眼をとじていた。
ものをも言わず、静かに、死んだもののようにあおむいてる本郷義昭、今や静中の静だ。心臓の上の方から流れ出る血を、静かに一滴も少なくしようとする。今さき全身の気力をそそいで、

赤魔をおさえた、そのための新たな鮮血が傷口に熱くあふれ、さすがの剣侠児本郷も、今は出血に青ざめてる。

南大尉が、佐野少尉に言った。

「早くするんだ。こいつが赤魔バザロフだ！」

十一人がみんな、ギクッと赤魔を見つめた。

（この青白い男が！）

バザロフは、みんなに見つめられ、後ろ手に縛られたまま、身体検査をされながら、蛇のごときつめたい眼を、ジッと本郷の顔色へそそいでいた。——勝敗いまだ決せず、本郷は重傷の出血に、このまま起きあがれず、今一、二時間のうちに死にはせぬか!? と本郷の呼吸の数をひそかにかぞえてる赤魔バザロフ、そこに、赤魔の上着の裏から、スッと手を抜き出した宣彦が、いきなり自分の指を見た。

「南大尉殿、こいつは針をかくしてます！」

宣彦の人さし指に、タラタラと血が流れだしてる。針に突かれたのだ。

（毒針か？）とみんなが寄ってきた。

佐野少尉が、自分の帯をときはじめて、

「こいつはグルグル巻かぬと、危険ですぞ、南大尉殿！」

「ウム、みんな、手をかせ。早く岩屋へ行って身体検査をするんだ。宣彦、なんともないか、そ

の傷は？」
「なに、僕よりも本郷さんを、早く岩屋へかついでゆきましょう」
と、宣彦は、指の血を吸ってははきだしながら、赤魔の無声拳銃を拾いとった。
戦いはいまだ終わらず、今こそ一秒を争うときだ。赤魔はとらえた。だが、鉄人先生はどうされたか？　天佑谷のみんなはどうしてるか？　本郷さんは重傷だ！　――バラバラと三人が本郷さんの横へ行った。
「かつぎますぞ、少佐殿！」
「動かすな」
と本郷は、静かに、
「宣彦、手帖と鉛筆を出せ！」
と、目をとじたまま言った。
赤魔の唇のはしに、あざけりが浮いた。

## 特別暗号の遺言(ゆいごん)！

(本郷さんは遺言をされるのか!?)とみんなが、ひどくおどろいて、シーンとなった。
宣彦は無声拳銃を、佐野少尉に渡すと、自分の蒙古服のかくしから、駱駝の皮表紙の手帳を取り出した。さしてある鉛筆を抜いて、
「本郷さん、手帳を出しました」
と、言う声がふるえた。
「よし、書け!」
(ああ本郷さんの遺言を書くのか!)と、泣き出しそうになる涙を、宣彦は一所けんめいにこらえた。
南大尉をはじめみんなが、本郷少佐の青ざめてる顔を見つめ、赤魔は、あざ笑いながら、耳をすました。すると、聞け! ……。
「東南第八!」かすかに本郷の唇がふるえると、その声が、にわかに朗々と大きく高く、「マクシミール、カク! セイゼン、ゲート、シス! コンゲーテ、カク!」
なにか? 呪文のごとく、一言ずつ力づよく切って、
「セゲール、ワシリーテシ、オーエン、カク!」
これを一言ずつ、宣彦は、片仮名で書いていった。
赤魔は顔をしかめた。世界の各国語にないことばを、本郷が言う。赤魔にも、南大尉にもだれにも、書いてる宣彦にもわからないのだ。ただ一つ、はじめの「東南第八」とは、東条参謀長の

特別暗号だ。大興安嶺を戦時に守るとき、東条参謀長は、東南第八陣地を指揮する。宣彦は「東南第三」だ。第三陣地に着いて、無線電信機を動かすのだ。

「マシーツ、セメーテ、オーエン、カク！　終わり」

眼をとじたまま本郷は言い終わると、きゅうに日本語になって、

「これを、至急、東南第八に渡せ！　南大尉、僕は、しばらく、ここにおる。バザロフの足をしばったか」

「いや、両手と胸だけであります」

「両足をしばれ！　かついで行け、崖を飛び下りるのは、バザロフ特有の芸当だ」

この危急の場合にも、ゆうゆうと本郷が言い出した。しかし、赤魔はグッと顔をしかめた。自分の予定の逃走を、本郷に見破られたのだ。だが、勝敗いまだ決せず、暗号で遺言(ゆいごん)した本郷は、いよいよ重傷出血の死を覚悟したのだ、と、しかも、赤魔は両足を佐野少尉にしばられながら、別の逃走の方法を、ひそかに考えるらしい。毛虫のごときまゆをよせて、すこしも屈せぬ不敵の瞳をこらし、本郷を見つめる。この赤魔の顔色を、宣彦が横から、ゆだんなく見すえた、このとき、カッとからだじゅうに熱が出てきた、――燃えるようなあつさだ。宣彦はきゅうにまっ赤になった。

(しまッた、毒針(どくばり)にさされて……)と、思う眼の前が、白くかすんできた。赤魔の顔も本郷さんも見えなくなり、宣彦は、そのままフラフラと泳ぐように前へのめると、足もとの草の中へ、本

郷さんのそばへバタリとたおれた。
はげしい毒液(どくえき)をぬった針、赤魔が上着の裏にぬいつけていた、それに刺された宣彦は、全身の血に毒がまわりここに倒れた。本郷さんの遺言の手帳を、手につかんで……。

天佑谷の岩屋の奥――
鉄人先生は、雪のごとき白髪を後ろへたれて、大机の前に、ゆったりといすへもたれていられる。神々(こうごう)しく尊い、この鉄人先生が、今や怪人バザロフのために、おそるべき病毒のバイキンを飲まれたのだ。
井上博士は、「きょうかあすに発病」と言い、「治療の方法なし」と、悲しむべき報告をした。
(どうするか？　？　？)
東条参謀長は、井上博士の悲痛な報告を、鉄人先生の前へ、涙をふるって報告した。
「バイキンは未発見の恐るべき性質のものでありまして、たしかな治療の方法を知らずと、井上博士が申しております。閣下！　どうかこの際、なにかのお考えがありますれば、東条にお申しつけください！」
目の前に見る神のごとき英傑、鉄人先生に対して、なにごともかくすことはない。もしもご遺言(ゆいごん)でもあらば、日本のためアジアのために今のうちに聞いておかなければならぬ、と、これを思う東条参謀長、直立不動の姿勢をとって、神々しい鉄人先生の前に立ち、今言った自分のことば

のうちに、絶望の死を報告したのだ。——今、この鉄人先生を永遠に失うことは、日満両国とアジアのために、ふたたび取り返しのつかない損害だ。悲憤と痛恨、赤魔へのにくしみに、東条参謀長は、全身の血が凍るばかりの思いして、なお言った。

「閣下、思し召しを今のうちに、東条がうかがっておきたいと存じます」

鉄人先生は、いつもとかわらず、静かに言われた。

「遺言か」

東条参謀長は、自分の気をはげまして、断固と言った。

「ハ、ご遺言をうかがいたいと存じます」

「そうか。新たにのこすことばはない！」

「ハ」

「日本武人の多くの英霊が、地下にあって、この大陸をまもっておる。英霊は平和の礎じゃ。予も大興安嶺に平和の礎となって、この国防線を永遠にまもる。平和を乱すものあらば、予の死骸をふんで義戦に勝て。このほかに、予の遺言とてはない」

これは鉄人先生がいつも、言われることだ。

——すでに二十八年前、日露戦役に沙河激戦のとき、「楊城塞」というもっとも堅固な敵陣地をわが仁平歩兵大隊が、全滅を期して攻撃した。苦戦の先頭に軍刀をふるって突撃する仁平大隊長、いましも敵陣地の正面へせまる。鬼神のごとき大隊長の突撃を、後ろから双眼鏡で見ていた

第一軍司令官の黒木大将は、感嘆のあまり手ばやく白紙に鉛筆で感状を書き、それを前線の仁平大隊長へ、伝令騎兵を飛ばしてとどけさせた。軍司令官鉛筆書きの感状である。この感状を、伝令騎兵が前線へ敵弾をくぐってとどけにいったとき、仁平大隊長は胸を射ちぬかれて、敵の塹壕中にたおれた。代わって大隊を指揮する星野大尉、応援の矢野大尉も戦死し、さらに大崎少尉も戦死した。激戦また激戦、混戦さらに混戦の楊城塞に仁平大隊長は胸の重傷に戦死し、敵の塹壕へ横たわった。その死骸をふんで日本将兵が苦戦の後に、楊城塞をついに占領したのだ。――二十八年の後、「予の死骸をふんで義戦に勝て」と鉄人先生が言われる。ああ大東の鉄人先生こそ、二十八年前の仁平大隊長なのだ。

　戦死と伝えられた仁平大隊長は、後ろへ送られて、多くの戦死将兵とともに、野戦病院の死骸室へ入れられた。その時、胸の重傷からよみがえり、なお後ろへ送られる途中から、一夜、ゆくえ不明になった。――日本将来の国防線は大興安嶺にあり！　と、これを日露戦役のときから見破っていた仁平大隊長、戦死と報告されたまま、胸の重傷をつつんで蒙古人の部落へ入った。その後二十八年、今や大興安嶺に鉄人先生として、天佑谷に多くの日本人をひきい、ロシヤとシナ人に対して国防の第一線を秘密にまもる。しかも、日本をのろうシオン同盟の極東委員長バザロフのために、病毒バイキンによって大興安嶺に骨をうずめようとする、遺言は平生の 教訓にあり、「死骸をふんで義戦に勝て！」と。

　これを聞いて、東条参謀長は、悲痛と義憤、胸にあふれて、はふりおちる涙とともに唇をかみ

しめた。
（アジアの平和を乱す敵あらば、鉄人先生の死骸をふんで義戦に勝つのだ！）と、東条参謀長は、石のごとく突っ立って涙をこらえた。
この時、静かな岩屋の中に、あわただしい足音が石段にみだれてきた。おおぜいだ。扉の外に立っている白井大尉が、キッと石段の方を見つめると、――おおぜいの先頭に、石段の上から下りてきたのは、南大尉だ。
「報告」
帰ってきた南大尉が、鉄人先生と東条参謀長の前に立って報告する。
「本郷少佐殿と宣彦が、バザロフをとらえました。しかし、少佐殿は重傷、宣彦も重態、少佐殿に三名の看護を残し、宣彦はただいま、医務室へはこびました。バザロフは第九号室へつなぎました。彼のために高村中尉がたおされました。この手帳に宣彦が書きました暗号は、参謀長殿へ、本郷少佐殿の遺言であります」
「本郷の遺言！」
と、東条参謀長は、その駱駝の皮の手帳を受け取ると、すぐに開いて見た。
「閣下、読みます！」
鉄人先生の死期はせまり、本郷も遺言したという。東条参謀長は、特別暗号につづられてるそれを、翻訳しながら読みはじめた。

「東条参謀長殿に告ぐ。わが武侠嶺に、巌窟城より航空し来たれる飛行船流星号あり、中に積みきたれる最新式活人光線機を、ただちに武侠嶺より空中輸送によりて、発送を命じ、受領ありたし、鉄人先生をはじめ諸兄の血をおかせる病毒バイキンは、活人光線によりてのみ死滅すべし。赤き魔人には少なくとも七名の監視を要す」

と、読み終わった東条参謀長、手帳を握りしめると、朗々と言いだした。

「よし南大尉！　本郷少佐の遺言じゃないぞ。今のとおり武侠嶺へ、特波長の無線電信を打てッ！」

「ハッ」

南大尉も顔色をかがやかして、敬礼を忘れたまま走り出ていった。

「閣下、お聞きのとおりであります。殺人光線よりも反対の効力が威大だという活人光線によって、バザロフの計略は、これこそなんでもなくなりました」

と、言う東条参謀長を、鉄人先生は見られると、眉も動かさず、静かに言われた。

「本郷の重傷と宣彦の重態を、その光線によって治してやれ」

「ハ」

「高村の死骸を、天佑谷の上に厚く葬ってやれ。大陸をまもる新たな英霊じゃ」

鉄人先生は、高村中尉の英霊を弔うごとく、目をとじられた。

そこに、佐野少尉が右手になにか厚い書類を持って入ってきた。

「報告！　バザロフの身体検査の結果、上着の三重隠（じゅうかく）しから、この書類を発見しました」
「よし、赤魔の機密書類だな」
その書類をすぐに開いてみた東条参謀長、ジイッと瞳（ひとみ）をこらした。シオン同盟の暗号文が、いく枚も赤インクで書かれている。見つめつづけてるうちに、東条参謀長は、グッとうなずくと、鉄人先生の前へ、その書類を差し出して言った。
「これによって、シオン同盟の残党を、容易にほろぼすことができます。首領バザロフとこの機密計画書が、わが手に入りました以上、すでに彼らは滅びたも同様であります」
鉄人先生も、うなずいて言われた。
「正義に敵するものは必ず滅ぶ。天の理じゃ」
大興安嶺に雪深し。アジアの大東をまもる鉄人先生をはじめ、本郷義昭、宣彦少年、その他の尊き生命を救うべく、武侠嶺の上空から、一台の無声単葉機が一直線に天佑谷の森へ、影を雪に投げつつ飛んできた。最新式の活人光線機をのせてきたのだ。

（『少年倶楽部』昭和七年八月号〜八年十二月号に連載）




少年倶楽部文庫 39

大 東 の 鉄 人

昭和51年 9 月16日 第 1 刷発行

著　者　山中峯太郎

発行者　野 間 省 一

発行所　株式会社 講 談 社

東京都文京区音羽 2 −12−21

郵便番号 112　振替 東京 8 −3930

電話 東京(03)945−1111(大代表)

編　集　株式会社 第一出版センター

印　刷　図書印刷株式会社

製　本　株式会社 若林製本工場